

汝平和を欲さば、 悪魔  
に備えよ

せとり

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「大崩壊なんてありえない」

そんな風に考えていた時期が僕にもありました。

目

次

13.

鬼神

12. 冬の到来	11. 企み	10. 友達	9. 期待外れ	8. 仲魔集め	7. 才能の壁	6. 秘匿された世界	5. 異界からの脱出	4. 自己満足	3. 悪魔会話	2. n o o b	1. 兆候
208	196	184	162	136	108	87	56	40	23	11	1



# 1. 児候

そこには全てが存在し、そこには全てが存在しない。

矛盾という言葉すら存在せず、全てが有つて、全てが無い。不思議な事にその場ではそれが正常なのだ。

人類の叡智では永遠に再現できないだろうその空間。暗く黒い闇の中。僕は一糸纏わぬ裸となつてその空間を漂つている。

その何もない世界では、光や音はおろか、動くという概念だって存在しない。なので実は、一ミリだって動いてないのかも知れないが。

ぼんやりと宇宙を眺める僕の視界に入るのは、真っ黒の空間に、あらゆる色が浮かんでは消える。見る者の精神状態によつて、神々しくも、禍々しくも見えるだろう独特の色彩。何度もここに来たことのある僕としては見慣れた景色。

それを無感動に見つめる。

この場で思考しようにも、ここは夢のようなもの。戻る頃には何を考えていたのか忘れてしまう。

いざれ目を覚ますようにして、僕はこの場から消えてなくなる。その時が来るまで、

壁の染みを見つめるようにして時間を潰すのが、ここでは正しいあり方なのだ。

一部の人間にとつては垂涎ものであろうこの状況も、この空間を利用する術を知らず、その野心も無い自分にとっては、ただ徒に暇を齎すだけのはた迷惑な場所である。

主観にして数年。毒々しい色彩に辟易してきた僕は眠るように目を瞑る。

無味無臭無音の世界で、唯一残っていた視覚を閉じれば訪れるのは真の闇。

痛いくらいの静寂に、自身の存在すら疑うほどの暗黒の世界。

長く触れれば精神を病み、思わず目を見開きたくなるような世界でも、景色に酔つていた自分には心地良いぐらいだ。

実際には数時間も経つていないので。主観的にはそれからさらに十数年。

真つ黒の空間に、相も変わらず様々な色を撒き散らしている世界にて、眠るように瞳を閉ざしてゆらゆら揺れる裸の人間が一人。

永遠に続くように思われたその状態は、ついに変化が訪れる。

静寂の世界で幻聴を耳にし、ようやくその時が訪れた事を悟った人間が目を開ける—



|。

『p i p i p i · · p i p i p i · ·』

主人の指令を忠実に実行し、安眠を妨げる無機質な電子音を鳴らす目覚まし時計に、渚は億劫に目を開けた。

(またあの夢……)

前世の記憶を持つて生まれ変わる。ネットの世界で言う所の、所謂転生を経験し。その時にあの世界を体験した経験を今でも夢に見る。

頻度的には月に一度あるかないかといったところであるが、十数年経つても色あせない記憶はそれだけ衝撃的だつたのだろうか。

実際にあの空間にいたかのような、嫌に現実感を与えてくる夢であつたが、捏造、妄想なんでもござれの夢なのだから仕方ない。

『p i p i p i · · p i p i p i · ·』

「うつさい」

『p i p i p i · · p i !』

未だに電子音を垂れ流し続ける時計の頂上に位置するボタンを叩き、不快な音を止めさせる。

そして時計を手に取り、手慣れた動作で目覚まし機能をOFFにしておく。これをしておかないと職務に忠実なこの時計は午後にも作動してしまうからだ。

時計の針は、七時三〇分を示していた。

「……起きようか」

布団から這い出て起き上がり。  
母が作っているのだろう朝食の匂いに誘われ、階段を下りる頃には夢の内容などすっかり忘れていた。

「おはよ」

「おはよう」

台所で朝食を作っている母と、ちやぶ台で新聞を広げている父に挨拶し、洗面所へ直行する。そこで適当に身嗜みを整え制服に着替える。

備え付けの鏡に映るのは、近所の高校の男子制服、ブレザーやを着用した黒髪の少女だった。

透けるような肌に、卵形の輪郭、ぱっちりした目鼻立ちの、可愛らしい容姿の少女……ではなく少年である。少なくとも戸籍上は。

というのも、確かに男として生を受けたにも関わらず何故か幼い頃から性器に成長が見られないのだ。

両親や医者が言うには僕は生れ落ちてからの数週間、原因不明の酷い高熱に襲われていたらしく、生殖機能への障害はその後遺症らしい。

容姿への因果関係はよくわからないようだが、生き延びたのが奇跡のような重体だつたらしいし、もちろん前例なんか無いから何が起こつても不思議ではないのだろう。

まあ性別錯誤なこの容姿も、冴えない風貌よりは多少おかしくとも華があつた方が良いだろうと、むしろ好ましく思つてゐるのだが。

不自然な個所が存在しないのを確認して鏡から視線を外す。

居間に行けば、朝食は既に始まつていた。

「いただきます」

一足先に食べ始めている父と母を横目に自身の定位置に座り、目の前に並べられる手つかずの朝食を前に手を合わせて、そう唱えてから食べ始める。

現在の時刻は七時四五分といったところ。家にいる大抵の生徒が急ぎそうな時間帯であるが、現在通つてゐる高校は家から徒步数分の距離に位置する為、こんな時間でもゆっくりできるのだ。

『昨夜、東京都稻生市アパートで、二六歳の男性が鋭利な刃物のような物で切断され、殺害されました。警察は、男性の妻が何らかの事情を知つてゐるものとみて捜査しています』

つけっぱなしにされていたテレビからニュースが流れてくる。

その内容に興味を惹かれて視線がテレビに向かう。

ニュースキャスターを映していたのが画面が現場に切り替わり、事件現場のアパートを背景に詳細が説明されていく。

『警察によりますと、昨日午後八時すぎ、稻生市のアパートで火事があり、この部屋に住む石田正則さんが倒れているのが見つかりました。正則さんは刃物のような物で切りつけられた痕があり、間もなく死亡が確認されました』

『同居していた二五歳の、男性の妻の行方が分からなくなつており、警察は女性が何らかの事情を知つてゐる可能性があると見てゐます。続けて――』

その報道は終わつたが、それに負けず劣らず物騒なニュースが続けて放送されていく。最近殺人事件や怪死体が多い。前世の世界よりも物騒な世の中とはいえ、これが連日続くとはちょっと異常な光景である。

「最近、物騒ねえ」

「そうだな、戸締りはしつかりした方が良いだろう。……渚も気を付けるんだぞ」

「うん、気をつける」

娘にするような心配もいつもの事。容姿が容姿なだけに、両親にすら息子のような娘として接されているのだ。

この世界は、メガテンシリーズと非常に似通つた世界だと思われる。

変化は自分で、同じ世界に一〇年ほど遡つて転生した。という訳ではないらし  
い。

前世の世界では隆盛を誇つていたいくつかの宗教が消えてなくなり、代わりにメシア  
教団が台頭していたり。今のニュースのように、明らかに悪魔関係と思われる怪事件  
が、毎日のように報道されていたり。

実際に悪魔や異能者を見たことは無いが、この世界に前世では信じていなかつた超常  
的な法則が存在していることは確信している。

渚本人が生まれつき超能力を宿しているからだ。……日常生活では全く意味のない  
能力であるが。

メガテン世界であるという確証を得たいだけなら、曰くつきの場所へ突貫すれば容易  
であろうが。その場合、情報の対価に差し出すモノは高確率で己の命である為、絶対に  
やりたくない。

或いは教会や神社に行つて事情を知つていそうな者に悪魔の事を尋ねれば、もしかし  
たら懇切丁寧に教えてくれるかも知れないが。情報を秘匿しているような者達が一般  
人に寛容とはどうしても思えないでの、その方法も却下である。

それになんとかんで、ここ一六年を何事もなく平穏に暮らしてきたのである。

いきなり東京に核が撃ち込まれたり、東京受胎が起こつたり、東京が封鎖されたり、世

界の崩壊が発生するのかもしれないが、その兆候も感じられない。

ここ最近は悪魔事件が多発しているようだけど、ヤタガラスあたりが何とかしてくれるだろう。日本の警察機関は優秀なのだ。

「じゃあ、いつてくる」

「いつてらっしやい」

「——いつてらっしやい」

テレビをぼうっと眺めて考え方をしていたら、いつの間にか朝食を腹に収め、歯を磨き終わつた父が、ネクタイを結びながら出勤していった。

渚も無意識の内に箸をすすめていたらしく、出されたものは綺麗に完食していた。父や母が食べ終わる頃にいれてくれたのだろう、温くなつたお茶をすすつて一服する。

「渚、食べ終わつたなら食器をもつてきなさい。それとも自分で洗う？」

「あ、ごめん。ちょっと待つて！」

お盆に食器を乗つけて台所に下げていた母に、暇そうに一服していることを見咎められる。渚は慌てて残された食器を重ねて母の後に続いた。

運んだ食器を流しに置けば、逃げるようになに台所を後にして洗面所で歯を磨く。ちらしていたらまた何か言われてしまうのだ。

素早く支度を整え、昨夜の内に準備済みであるナイロンの学生かばんをひっさげる。

これで登校準備は完了である。

「いつてきまーす」

「気を付けるのよ?」

「はーい」

渚は母の優しげな声を背に、老朽化により若干立てつけが悪くなっている引き戸に手をかけた。



「あ、お守り忘れた……」

家を出てから一分ほど。外出する時は常に首にかけているお守りが存在しないことに、渚は気が付いた。

渚の高祖父が悪魔関係者だつたらしく、家にある年代物には“ソレ”っぽいものが多  
いのだ。今は無きお祖母ちゃんから貰ったそのお守りは、何らかの“耐性”でもついて  
そうな代物である。

御利益がありそうで常に身に付けることにしていたが、身に付け忘れたことは何度か  
あつた。その度に戦々恐々としていたが、何か問題が起こつたことは一度もない。なら

ば今回も特に何も起きないだろう。

……だけど、何か嫌な予感がする。生まれてから今までこういう予感に逆らつて良い事なんか一度もなかつた。ちょっと面倒くさいけど、どうせ往復で二分も掛からない。取りに行くべきか——。

ゾクツ。

背筋に感じる悪寒が極限まで高まると同時に、何かが犯されるように体が熱くなり、頭がぼうつとする。

なにも、かんがえられない。

『こつちへ来なさい……。そう、こつちよ……』

どこからか頭の中に響いてきた言葉に従い、渚は意志が感じられない虚ろな色を瞳に宿し、“通学路を外れて”ふらふらと歩き出す。

——この先には死地だ。行つてはならない。

死の気配に敏感な本能が、全力で警鐘を鳴らし続ける。しかし。——その警告に従える理性は、存在しなかつた。

## 2. n o o b

謎の声に誘導された場所は、何の変哲もない近所の民家であつた。

不法侵入はいけない事。その常識に従い玄関前で立ち止まるが、それも頭に再び声が届くまで。渚は命令に従い、鍵のかかっていない扉を開け放つと不法侵入を開始する。渚が発する物音以外が聞こえてこない薄暗い家屋。カーテンも閉め切られたままだ。どうにも人の気配が感じられない。

確かにここは富山さんの家だったはず。ぼんやりとした頭で町内会活動の時に記憶していた顔を思い出す。車があるというのに住民がいないという事実に最悪の想像が浮かび上がるが、洗脳されている渚は氣にも留めずに、導かれるままに無心で足を進めた。

土足のまま玄関を上がり、階段を上る。そして二階の突き当りの部屋に辿り着く。息子さんの部屋だったのだろうか、パソコンやゲーム機、ゲームソフトや漫画に薄い本が見て取れる。

一見なんの変哲もない一室。しかしその空間に、声の主の居城へ続く“孔”は存在した。

地獄にでも繋がつていそうな、禍々しい孔。

カーテンが閉め切られて仄暗い空間で起動したままのパソコンが、画面に不可思議な文字列を高速でスクロールさせ続ける。その文字列が術式となつてゐるかのように、孔はパソコンの前に設置されていた。

『さあ、来なさい』

本能的に危険を感じて扉を開け放つた状態で突つ立つていた渚が、孔に向かつて足を前に踏み出した。

その行動に対し、既にこれ以上ないといふほど高まつていた警鐘がその限界を超えて鳴り響く。もちろんそれは意味をなさない。格の違いすぎる悪魔の魅了に対して、人間の本能など塵も同然なのだから。

黒い孔に触れた渚の体が、転移する為にデータへと変換されていく。  
行先は当然、声の主の住居——『異界』である。



微かな燐光と共に渚が降り立つたのは、闇が支配する夜の世界だつた。微かな月明かりに照らされて、鬱蒼とした森に囲まれてゐることが伺える。

ここは魔境である。人とは比べ物にならない強大な気配を其処等じゅうから感じ取れる。

「ニンゲンだ、いたずらしようつ！」

「女だ」

「どうしてここに？」

「クイタイ」

宙に浮かぶ妖精、餓鬼、犬の獣人、幽霊。

特に近くにいた悪魔達が、人間の気配を察知して渚を取り囲み、口々に言葉を発し始める。

一斉に飛び掛かつてこないのは、誰しもが獲物を独占したいからだろう。悪魔同士で隙を疑い、牽制しあつて手が出せないのだ。

しかし中には短気な者もいる。この膠着状態は長くは続かないだろう。そうなれば渦中となる人間など一溜まりもない。

「……アレ、りりむノえもの。ヒツタラコロサレル」

「なーんだ、残念」

「女……」

「！」

「ク、クイタクナイ」

だが一匹の悪魔が放つた言葉により、緊迫としていた空気が弛緩する  
悪魔たちが表に出す感情は様々であるが、強者の勘気に触れたくないという心中は共  
通していた。

一匹の妖精がさつさとどこかへ行つてしまつたのを皮切りに、渚を取り囲んでいた悪  
魔達は集まつて来た時と同様にばらばらに去つて行つた。

『まつたく、雑魚共は私がつけた“匂い”すらわからないのかしら。……まあいいわ、早  
く来なさい』

一步間違えれば自身の獲物が横取りされていたというのに、その声は全く揺らいだ節  
が無い。余程自分に自信があるのだろう。

謎の声——悪魔の言うことを真に受けければリリムというらしい——の言葉を受け、操  
り人形となつている渚は歩き出す。

鬱蒼とした夜の森の中、悪魔が踏みしめたのであろう獸道を微かな月明かりを頼りに  
進んでゆく。暗さも相まつてそれは相当な悪路であつたが、平均を超える運動神經を有  
する渚にとつてはハイキングとそれほど変わらない。

脅威はやはり、未だに遠巻きに感じる悪魔達の気配であるが、リリムを恐れているの  
か手は出してこない。

やがて森が開けた場所に出る。その中央には幽霊屋敷のような館が建つていた。

『ようやく来たわね。私は奥の部屋にいるわ、さつさといらっしゃい』

どうやらこの館の奥にリリムはいるようだ。いよいよ食べられてしまうようであるが、魅了状態の渚には言いなりになるほかない。重厚な扉に手をかける。

——背後から、蟲の羽音のようなものが聞こえた気がした。



闇の中、薄暗い森が高速で視界を流れていく。

気が付いたら、渚は空を飛んでいた。もちろん自力で飛んでいるわけがない。頭上を飛んでいる妖精に、何らかの術を使われて運ばれているのだ。その術の効果によるものか、まるで風防があるかのように風を感じない。

身体の調子を確かめるように身じろぎすると、まるで水中で動くような感覚。無重力というものは体験したことが無いが、もしかしてこれがそうなのだろうか。

とりあえずは動ける。手足をじたばたさせるぐらいなら余裕だろう。

「やつたな、あねさん！　いまごろリリムのやつは大慌てですぜ！」

「リリムへの嫌がらせを兼ねて、わたし達のおやつが手に入る。一石二鳥」

「すげえ！ さすがっす！ そこまで考えていたんすか！」

「そう。わたしは天才だから」

渚を運ぶ妖精と、その隣を並走する紙のお化けのような悪魔の会話が聞こえてくる。魅了の効果が切れて平静に戻った渚は、聞こえてきた“おやつ”という単語に、状況は何ら好転していないことを悟った。

今からして思えば、変死体や獵奇事件の多発……。ヒントはいくらでもあつたにもかわらず、楽観視した結果がこの様だ。せめてお守りをもつていれば、何らかの加護でこの事態を回避できたかもしれないのに。

いや、それは言い訳か。魅了が効かなかつたとしても、リリムに襲われていたら絶対に勝てなかつたと断言できる。

根本的に、悪魔という認識からして間違っていた。この異界で出会つた悪魔達は、恐らくレベルでいうと二～五あたりだとゲーム知識からして推測できるが、そいつ等でさえ人間とは存在としての格が全く違つている。

産まれた時から備わつていた、常人を逸脱した身体能力に戦闘特化の特殊能力。

これだけあれば中堅悪魔だって相手にできるかも？ もしかしたら大物悪魔にさえ匹敵するかも？

全くどんでもない妄想だった。実際に相対して理解した。あれは常人が勝てる存在

では絶対にない。

——そう、常人には。

平和ボケしていた過去の自分を一通り罵り、気持ちを切り替える。

悲観している場合じやない。絶望するにも早い。幸いにも、自分にはこういった状況で頼れる能力が宿つていてるのだから——。

「でも大丈夫なんすか？ こんなことやつたらリリムのやつに怒られるんじや……」  
 「そろそろ殺ろうと思つていた。怒りに任せて突撃してくれるなら、ホームで戦える分むしろ好都合」

「な、なるほど？ よくわかんないけどすご~いっす！」

——意識を切り替える。チャンネルを切り替えるように、"ソレ"を使用するに最適な状態へと変化させていく。

脳が全力で稼働を開始し、視界に"赤黒い線"が浮かび上がる。

黒色の瞳は、青白く輝いていた。

それによつて、今まで見えなかつた多くのモノが見えるようになる。

「——ツ！」

「えつ？」

渚を包み込むように纏わりついていた不可視の概念が、線の動きを精確に捉えた手の

動きによつて “殺される”。

術が霧散し、轟々と音のなる風にぶつかり、宙を飛んでいた身体が重力に捕らえられて落下する。地上五〇メートルからの自由落下。思いついても絶対にやらない自殺行為。それを渚は、空中で着地の姿勢を維持しつつ、運よく着地に適した木々が足元に来てくれるのを祈るのみ。

そして渚は、賭けに勝つた。

拍子抜けするほど早くに足元へやつて来た、頂上付近の細い枝に器用に着地して勢いを殺す。落下ダメージを受け止めて限界までしなった枝から、別の枝へ滑り落ちるよう移動する。ガサガサベキベキ。葉の擦れる音と、枝が折れる音。それを何度も繰り替えし、ようやく地面に辿り着く。

「え？　え？」

「あねさーん！　どうしたんすか！　おいていきますよー！」

逃げるよう走り出し、木々越しに上空の様子を窺えば、何が起こったのかと困惑するピクシーと、渚が逃げたことにすら気が付いていない様子のシキガミが微かに見える。

「に、逃げられた……？」

「もー！　どーしたんっすかー！」

「…………逃げた！」

「…………」

駆ける。ピクシー達の声が聞こえなくなつたとしても走り続ける。

間伐なんかされていない鬱蒼とした森は、灌木や下草が生えていたため、段差以外に足を取られる心配はなく非常に走りやすい。逃げているのはいいが、正直この世界から脱出する方法の当てはない。しかし根拠のない自信はもつていた。

胸ポケットにしまつてある3G携帯を手に取る。鞄なんかは放り出してしまつたので、これが現在唯一の所持品でもある。

不可思議な事に、異界に入った時にこの携帯が着信を知らせるように震えていたのだ。異界で電波が通じるとは思えない。しかし天啓のような閃きは、これが活路となると主張する。

「“悪魔召喚プログラム”…………？」

開いて起動した画面に表示された文字を見て吹き出しそうになる。

一体いつの間に。インストールした記憶は無いし、もし発見していたらこんな重要なこと忘れるわけがない。

(あれ、そういえば異界の入り口は……)

はたと気づく。異界の入り口を作っていたあのパソコン——。あれも召喚アプリの

仕業だろうか。だとしたらネットを介してばら撒かれている？ それも持ち主に気付かれぬように潜伏させて……。

(いや止そう。これ以上の推測は無意味だ。今はこれを利用して脱出する方法を考える——！)

そう決意したと同时、大分離れた上空から異常な気配が高まつた。これが所謂魔力だろうか。

もう見つかった——。そう頭をよぎるよりも早く。身体は危険を察知した本能に従つて弾かれるように動いていた。

携帯をしまい、手頃な長さの枝を拾いつつ、射線から隠れるように大木の陰へ滑り込む。

木を盾するように中空の様子を窺うと、妖精が魔力を纏い、それを電力へと変換しているのか周囲はバチバチと帶電していた。

(あれは、——マズイ)

見ただけで解る。あれは駄目だ。悪魔以外に生身で防げるモノではない。

防ぐには同じだけの魔力が必要だ。今盾にしている直径二〇メートルはありそうな大木ですら、あれを撃たれれば容易く貫通されることだろう。

“食べる”ような節を言つていたから多少は手加減されると思つたが、どうやらそれ

もないらしい。あんなものが着弾したら渚など肉片一つ残らない。

直視の魔眼で無効化する？ いくら運動神経がいいとはいえ、雷速に反応するなんて不可能だ。出来たとしたら人間やめすぎだろう。だつたら避ける？ あの強さで動体目標に命中させた経験が無いとは思えない。標的となつた悪魔達はもちろん渚よりも速いだろう。

銳すぎる感覚と、聰明な思考から絶望的な状況を一瞬のうちに理解して、俯きがちに溜息一つ。

「——だからつて諦めるわけないんだけどね」

瞳が爛々と蒼く瞬き、口元は弧を描く。勢いよく上げられた表情は、挫けるどころか戦意に満ち溢れていた。不思議とまるで怖くない。それどころか、どこかこの状況に高揚している気持ちさえある。

幹から数メートル離れた位置で持つていた枝を構える。ひょろ長いそれは頼りなさそうだが素手よりはマシだろう。

さらに高まり続ける妖精の魔力を感じながら。渚は目を瞑り、闇の中で一筋の光明を探し求める。

バチバチバチ。飽和しつつある電気と魔力を感じ取りながら、それを頼りに数瞬先の未来を予測し続ける。

些少の事実に妄想と推測を重ねたような、未来予知とはとても言えない杜撰な予測。それでも今はこれに頼るしかない。

いや、違うか。本当のところ渚が頼つているのはこんな小手先のモノではなく——。

(——ツ いま! ——)

思い焦がれるようにして求めていたモノ。魂の奥底から発せられる鋭い指令を感じて。渚は全力で枝を振るつた。

撃たれてからでは間に合わない。ならば先読みに全てを賭けるしかない——！

大木に遮られて渚がピクシーを認識できないように、妖精からも渚の様子は窺えない。渚の動きを見てからタイミングを外すというのは不可能だ。

——ジオ。

完成した魔法が放たれる——。死神の鎌が振るわれたのを察知して、しかし渚は生存を確信した。

闇夜を切り裂く雷が妖精から生み出された。大気を穿つ轟音。

分厚い幹が塵と消え、紙を突き破るようにして姿を現した稻妻が——見えた。

蒼に輝く瞳が微かに捉えた『死の線』へ。すぐ傍を通過しようとしていた木の枝を、殆ど勘で振り抜いた。

### 3. 悪魔会話

第二撃は無かつた。

幹を抉られた大木が、自重を支えきれずにへし折れていく。

その破壊を齎した妖精は、人間に稻妻がかき消された光景が信じられないように目を見開いて呆然としていた。

それは明確な隙であつたものの、渚は身体が痺れて動けないでいた。

放電を避けつつ死の線だけをなぞるという神業に失敗し、枝越しに電流に触れて感電してしまつたのだ。焦げ付いた木の枝を握つて気合で臨戦態勢を維持しているが、ここで畳みかけられたら容易に人生の幕を閉じる事となるだろう。

(得体の知れない力をを見せたんだから、会話でもしてくれないかなー。暴力に訴えられると今度こそ終わるし。とりあえず話しかけてみよう)

時間を稼ぐのも状況を開けるにも、とりあえずはそれが最善だと判断する。

友好的に接するには、まずは禍根を流さないと。挑発は絶対にしてはならない。相手

が気に障りそうなことには全く触れず、良い点だけを強調する。

交渉術——というよりも媚の売り方の基本を頭の中で復唱し、意を決して口を開く。

「えーと、こんばんわ？ 先程は危ないところを助けていただき、まことにありがとうございます」

「……は？」

まずは挨拶。そして助けてもらつたお礼を言つておく。

相手からしたら獲物を分捕つただけで、助けたなんて絶対に思つていはないだろうが、攻撃なんか気にしてないという渚の雰囲気は伝わるだろう。

……伝わつた、のだろうか。なんだか更に理解できないものを見るような目で見られているが。いや気のせいだろう。遠いうえに小さいのだ、間違えるのは無理もない。

ともかくにも会話をする気になつたのか、ピクシーは小さく頭を振つた後、傍にシキガミをはべらして渚の元へやつてくる。

人間のように個体差が激しいのだろうか。そのピクシーは近寄りがたい雰囲気を纏つっていた。

ゲームのような画一的な服装ではなく、黒いローブを目深に被り、そこから覗く無表情を見ると、クールな印象を受けると共に厨二病独特のプレッシャーを感じる。

シキガミの方は……身近にあるものから外れすぎていて、違ひはよくわからない。それどころか、その物理的に白く薄つぺらい表情から感情を推察する事すら怪しいものだ。

一步前に歩み出た妖精が、無感情に小さな口を動かした。

「どういたしまして。対価はあなたの命でいい」

「ふふ、お戯れを」

凄まじく過激な要求だつた。渚は曖昧に笑つて誤魔化そうとする。

まあその要求はともかく、会話に応じてくれたおかげで首の皮一枚で助かつた。

人の命をなんとも思つていない言葉。能力を見せたとはいえかなり見下されているのは間違いない。しかし力尽くで来ない辺り、渚のことを大分警戒しているのだろう。頭はちよつと残念そうだけど、この二人の悪魔は出会つた中でもトップレベルだ。

こいつらの言動からして、この二人が協力すればリリムも倒せる、つまり二人を合わせた戦闘力とリリム単体の戦闘力は拮抗するらしい。

そしてこの周辺に住んでいる悪魔はリリムを絶対強者のように恐れていた。リリムの振る舞いも上位者がいるとは思えない程に迂闊なものだつた。つまりこの周辺にはリリム以上の悪魔は存在しないと推測できる。

ならば周辺危険度暫定二位のピクシーとシキガミの元にいつまでもいるよりも、さつさと逃げ出して死中に活を求めた方がマシ。そう思つていたのだが。王手を打たれているのに盤外戦で、この一局をなかつたことにしようとしているようだ。どうして未だに生きているのか不思議なこの状況。

まあ運は向いているのだろう。

なんだかよくわからないが、召喚アプリという鬼札も手に入った。

リリムが追つてくるという話も存在するし、警戒に値する能力も見せた。あとはクールぶつてるこの妖精を、悪魔会話で丸め込むことが出来たら活路が訪れる……かもしれない。

説得の材料は、命がけの綱渡りを繰り返して得るしかない。

「どう思おうとあなたの勝手。だからわたし達も勝手にする」

「そうだ！ かつてだぞかつて！」

そう言い放つたピクシーが雷を撃ち放ち、シキガミも追従する。

「——そう？ 僕もただでやられるつもりはないんだけどね」

二人の悪魔から放たれた、先程の稻妻とは比べ物にならないほどに弱い電流を切り落とした。

その枝先が先程よりも鋭かったのは気のせいではない。無茶な体の使い方をしてコンディションが下がるどころか上がっている。これは神祕体験をするとレベルが上がるというあれだろうか。

「……不可解。ただの枝に打ち負けるほど軟ではないはず」

「めんどつちい！ 直接ぶん殴れば！」

「危険。あのニンゲンの能力が予想を上回った場合、わたし達ですら消滅させられる可能性がある」

「む、むむむ……！」

追撃は無かつた。二人の悪魔は渚を苛立たしげに見据えるだけだ。間違いない。こいつらは消耗するのを嫌がつてゐる。

漏れ聞こえる二人の会話は渚の憶測を補強してくれた。追い風が吹いているようを感じる。これはハツタリをかますしかない。

腕組みして思案に耽るピクシーと、唸るシキガミに向かい、微笑を湛えた渚が声をかける。

「これ以上続けるかい？　この戦闘は君たちにとつても実りが少ないようだけど

「……どうして、そう思う」

「会話が成立しているのがその証拠さ」

「……」

シキガミは頭にハテナマークを浮かべ、ピクシーは押し黙る。怒つてゐる感じはしない。これは無言の肯定というやつだろう。

手応えあり。予想は当つていたらしい、このまま押し込んでみよう。

「理性的で助かるよ。そんな頭のいい君に提案だ。——僕と契約しないかい？」

「……？ よく意味が分からぬ。説明を求める」

（うん？ これで伝わらないのか。なら――）

渚は懐に手を突っ込み携帯を取り出す。横目で召喚アプリが起動していることを確認し、二人の悪魔に画面を見せつけるように突き付けた。

「僕はデビルサマナーだ。契約すれば、危険を冒さずとも一定のマグが恒久的に手に入る。君たちにとつて悪い話ではないと思うけど？」

「……？」

渚が自信満々に言い放った言葉に、ピクシーは首をかしげた。

思っていた以上に悪魔召喚士というものは知名度が低いものなのだろうか。得意げだつた渚の表情に冷や汗が浮かぶ。

そして流れる、渚にとつて非常に居心地の悪い沈黙の時間。

しかし今まで話の流れに着いて行けずに空氣に徹していたシキガミが、突然合点が言つたように大きく頷いて、マイペースに元気よく言葉を発した。

「おまえ、サマナーだつたのか！」

「……知つてるの？」

会話を交わすたびに頭が悪いという印象が深まるシキガミが、比較的頭が良さそうなピクシーすら知らなかつた情報を有していたことに、渚は大変な衝撃を受けた。それど

ころか仲間である妖精ですら驚いている。

本人が知れば気分を害しそうな反応も、予想通りというべきか、テンションが高めのシキガミに気づいた様子は欠片もない。

「おうよ！ なんでもサマナーの仲魔になるとつよくなれるとか！」  
「!? ……それは本当？」

「じょうほうつう？ のやつから聞いたんですね！ まちがいねえ!!」

「それは——」

しかしそれは当然と言うべきか、聞きかじりの知識だつた模様である。

変な自信だけはあつても具体的な情報が入つていないこの説明で、ピクシーが信じることは無いだろう。

ここは渚が補足説明（ゲーム知識。実際にどうなのは分からない）をして納得してもらうべきか。状況的に味方となつているこのシキガミを利用できれば、もしかするともしかするかもしれない。

ピクシーは次に口を開けば必ず否定してくるだろう。しかしそれは予想の範囲内。そうなればもつともらしい台詞を重ねてシキガミの言葉に信憑性を持たせればいい。  
さあ霜月渚よ。その矮小なる知恵を振り絞り、目の前の悪魔を騙くらかして、己が生存権を取り戻すのだ――！

「——そんなにおいしい仕事なら、すぐにでもやるべき」

「だろ！ だろ！ おいサマナー！ きいていたか、早くけいやくしろ！」

大真面目な雰囲気を醸し出してピクシーが頓珍漢なことを言い放ち、我が意を得たりと言わんばかりにシキガミも同調する。

その急かすような言葉を肯定するように、フードを被つた妖精がこくこくと首を縦に振る。

一世一代の大勝負に出るかのような意氣込みでいた渚は、目の前で繰り広げられたあんまりな光景に石のようにはまつた。

(二、こいつら本気でバカだつた——!?)

驚愕、安堵、拍子抜け。内心で様々な感情が入り乱れ。

「……うん、そうだね。契約しようか。……ちょっと待つててね」

驚異的な自制心により我に返った渚は、瞬時に成すべきことを思い出し、携帯に意識を向けながらも絞り出すようにして言った。

そう、今までの渚の発言は全て、本来知りえないはずのメタ知識を基にしたハツタリだ。

早急に、怪しまれないよう短時間で、最低限、契約の仕方だけでも悪魔召喚プログラムを把握する必要があつたのだ。

固まっている時間なんてない。今は一文字でも多くの記述に目を通すべき。

少しでも時間を稼ぐため、焦りの感情は断固として表には出さない。傍から見れば召喚アプリの操作しているように見えたりしないだろうかと祈る。気持ちは天才プログラマーを装う、キーボードを滅茶苦茶にタイピングするだけの素人だ。

ヘルプを見つけた後は早かつた。“←”ボタンを押しっぱなしにして、小さな画面を霞みながら流れていく文章を頭に叩き込んでいく。終点を迎えるべば素早い運指で瞬時に次の項目へ。

スクロールにかかる時間がもどかしかつた。



召喚アプリの機能は大体把握した。

このプログラムは素人ですら容易に悪魔を召喚・使役できるようになる代わり、その性能は使用者の才覚に完全に依存することになる。

本日の実感として、才能のない大多数の人間ではレベル一の悪魔すら従えることはできないのは明白だ。しかしヘルプでは、さも召喚アプリさえあれば誰でも悪魔を使役できるかのように記されている。

しかし現実は甘くない。

使役者が使役悪魔よりもレベルが高ければ命令に強制力を持たせるのも可能だろうが、一般人ではレベル零がいいところだろう。

しかも彼我の戦力差を実感させない為か、悪魔を対象としたアナライズどころか、使用者へのアナライズすら実装されていない。

その圧倒的な格の違いは、実際に悪魔と対峙すれば否が応でも理解できるだろうが、その時にはもう手遅れだ。

その危険性は、例えるならば、サーヴァントを令呪なしで使役しているようなものだ。それも魂食いを躊躇しない、強さだけを追い求めている悪魔のようなサーヴァントを。

薄々感じてはいたが、これをばら撒いている奴は絶対に性悪だ。黒幕は天使か悪魔だと言われても簡単に信じられるだろう。

まあその性悪のお蔭で生き残れそうな以上、あまり悪くも言えないものであるが。渚は慄然とした気持ちを自覚した。

「ふむ。これはいいもの」

「ですぜ！」

携帯を弄り始めてから数分後、やけに時間がかかることを訝しげに思われつつも、二人の悪魔と契約を結ぶことに無事成功した。

サマナーとなつた渚から流れ込むマグネタイトに、先程まで抱いていた疑念を捨て去るよう上機嫌な妖精とシキガミ。

その様子を、渚は表面上はニコやかに眺めつつも、内心では大きな危機感を抱いていた。

(生命力を生み出す端から吸い取られているような感覺……。結構キツイ。平時でこれなら戦闘時はどうなるんだか)

持前の才能によるものか、その身体に膨大なマグネタイトがプールされていなければ即死するところだつた。

とはいえ微かな時間的猶予が出来ただけで状況は変わらない。本来、過剰な吸い取りを拒否する為に結ばれている契約も、渚と二人の仲魔たちの間にはレベル差が存在しており有名無実と化している。

自転車操業で悪魔を狩つて、早急に力を付ける必要に迫られていた。

レベルアップでマグネット生産量が増えるのかは分からないが、悪魔を倒せばマグを手に入れることが出来るだろう。

それに十分なマグを吸つたピクシー達のレベルが上がり、要求される維持費が増えるというのも考えられるだけに、このまま座して待てば死にそうである。

なるほど悪魔召喚士というものは大変だ。仲魔内でトップの強さを維持しつつ、仲魔

たちを成長させる必要があるのだから。

それを現実で実行するのは、いささか骨が折れそうだ。

——唐突に。ここからそれほど離れていない場所で、膨れ上がった魔力と共に閃光が迸る。

三人が彈かれたように一斉に、光の発生源へと振り向いた。

微妙に遅れて雷鳴と、砲弾が命中したかのような爆発音、そして衝撃波。

攻撃された悪魔のものと思われる、弱々しい雄叫びも聞こえたが、すぐに何も聞こえなくなつた。

戦闘が終わつたのだろうか。

「……今のは?」

「悪魔同士の戦闘は日常茶飯事。けどあの威力はリリムのもの。恐らく苛立ち紛れに攻撃したと思われる」

確かに先程間近で見させてもらつたピクシーの雷よりも凄そうだつた。それが撃てるということは格上でリリムしか居ないということなのだろう。

苛立ち紛れ。そういうことなら未だにこちらの位置は知られていない?

いやまさか。索敵能力が皆無だとしたらピクシー達との妥協は成立していない。ならばある程度の索敵力は絶対に持つてゐるだろうが、それがどの程度なのか、よく分か

らない。

というかそもそも悪魔の平均的な索敵能力すら分からぬ。

普段だつたら一も二も無く質問したいところだが、駆け出しサマナーを騙つてゐる今はちょっとまずい。

口を開けばボロが出そう。しかし常識的な事は知つていた方が絶対にいい。

一瞬の逡巡、結論は出た。

かなり抜けている所のあるこの妖精なら違和感をスルーしてくれるかもしれない。聞いてしまおう。

「なるほど。……ところで君たち悪魔は、この広い異界でどうやって索敵してるんだ?」「ある程度接近すれば気配を察知できる。この異界もそれほど広くない。目的を持つて飛び回ればすぐに見つけられる」

なるほど。

疑問に対する的確な回答を得て満足げに頷いてみると、緊張感の無さを咎めるように、ピクシーがフードの陰からジト目で睨んでくる。

「この分だといつ接敵してもおかしくない。サマナーも準備して」

「了解」

そう言い捨てて、ピクシーはシキガミと話し始めた。

ベルトと靴、それに枝。渚も素直に言われた通り装備を確認する。圧倒的格上に挑むのだと、やれることは当然しておいたほうがいいだろう。

とはいえる主力は悪魔の二人。それも勝算があるのだろう自信満々な二人が仲魔なのだ。孤立無援で戦うしかなかつた状況に比べれば気楽なものである。

理想を言えば共倒れとなつてくれるのが一番なのだが、目的は一つの単純なモノにしたほうがいい。二兎を追うほど、渚は自分を過信してはいなかつた。

逆の見方をすれば。弱者でありながら自暴自棄にならず、一つの目的に向かつて邁進し続けられるその精神のありようが異常なのであるが、そのことに渚が気付く様子はない。

着の身着のままで準備するものなど何もない。

すぐに手持ち無沙汰になつた渚は、作戦でも聞いてみようと一人に近づいた。

「そういえば作戦つてあるの？」格上相手に無策だと厳しいだろうけど

「もちろんある。簡単に言えばシキガミの新スキルで弱体化させた後、なぶり殺しにする」

「新スキル？」

「確か……タルンダといったはず。これを限界まで使用すれば、どんな相手でも完封できる」

「んだんだ」

シキガミの駄洒落のような相槌は聞き流す。

タルンダ。攻撃力低下の補助スキル。ゲームでは大分お世話になつた記憶がある。全体が単体かは分からぬが、恐らく魔力の籠め方によつて効果範囲が変わるのだろう。

それが彼女らの自身の源か。確かに強力なスキルである。だがしかし未だに懸念は残る。

「リリムはチャームのスキルを持つてたはずだけど、それは？」

「……確かにセクシーアイは脅威であるが、魅了なんて惰弱なスキル、気合溢れるわたし達に効くはずがない」

「どうかそれ以外にどうやつて防げばいいのか！ わからん!!」

渚の核心をついてしまつたらしい質問に、ピクシーは精神論を唱え、シキガミが裏事情をぶちまける。

デバフ系は分かつていても対策のしようが無いらしい。確かにゲームでも、序盤でバフ、デバフ、状態異常を駆使してくる敵がいたら詰むしかないだろう。解除系のスキルを持っていたとしても、基本的に群れないらしい悪魔はそれを生かせないのだろう。だからリリムは今までデカい顔をしていられたのか。納得である。

(魅了対策をしようにも、道具のない悪魔じや対策できないのか。素の耐性かスキルがないと――)

それで思い出した。

詳細なステータスなぞ覚えていないが、それでも特徴的なスキルや耐性は覚えていた。

そう、渚の記憶が正しければ――。

(リリムつて確か電撃無効だつたような……？ そしてピクシーとシキガミの属性攻撃はジオのみ。……あれ、これつてヤバくね？)

「――ッ！ 来た！ サマナー、その辺で隠れて！」

二人の悪魔がリリムの接近を感じし、迎撃に向かつたのだろう、警告する間もなく空に向かつて飛んで行つた。

透明の羽をばたかせ、魔力で鱗粉のように軌跡を描きながら上昇している妖精に荒っぽく指示を下される。

その言葉と増加しつつあるマグネットライトの流出により、ピクシーの意図を悟る。彼女はどうやら、渚には魔力タンクとしての役割をお望みらしい。

格上相手に斬つた張つたをしなくていいのは渚にとつても好都合。否は無い。

空を飛ばれたら、宙に浮かぶ手段すら持たない渚にはどうしようもないものである。

まああれだけ自信満々だつたのだから、相手の耐性だつて当然知つてゐるんだろう、多分。

事態が動き始めてしまつた以上、後悔は不要。渚は自身が思う最善の行動を執るだけだ。

とりあえずは指示に従つておこうと移動を開始。途中、上空に浮かぶ、小さくなつた二つの影を仰ぎ見た。

## 4. 自己満足

術者の怒りを体現するかのような猛々しい雷が、悪魔の羽としつぽを生やしたレオタードの女から放たれる。それは以前、ピクシーが渚に向かつて放つた稻妻よりも、一回りも二回りも巨大なものだ。

渚のように、放たれた魔法を無効化するという芸当ができない二人の仲魔は、正確無比に放電される魔法には耐えるしかない。

速度的に躱すことは不可能とはいえ、此度の雷の標的となつたシキガミは、恐怖を感じている様子は微塵もない。耐えられるという絶対の自信があるからだ。

逃げも隠れもしなかつたシキガミに着弾した雷は、シキガミに触れる直前に何らかの力場に接触し、術者に向かつて弾き返された。

威力が一切減衰せずに、リリムに返つて牙を剥く雷の魔法。しかしこちらは搔き消される。

「あら、反射持ち？ 珍しいのね」

「げつ、電撃無効か！」

「……ジオが効かないのなら物理的に殴るだけ。作戦に支障はない」

シキガミはタルンダを放ち、ピクシーはディアで自身の傷を癒す。

攻撃を阻害する呪いを持つた魔力が、リリムの体に纏わりつく。それを受けながらも余裕ぶつたりリリムの呟き。

対するピクシー達の返答は素つ気のないものだった。

(そういうえばピクシーが電撃耐性でシキガミが電撃反射持ちだつたつけ？ となるとチャーム持ちで自力も高いリリムが有利かな)

リリムがジオを使っていることにも違和感を感じたが、ゲームではどうだつたら知らないが、使えるということは使えるんだろう。

魔法が飛び交う戦域から少し離れた巨木の枝の上。

安全地帯に立つている渚は、前方で繰り広げられる戦闘を冷静に評していた。

戦闘が始まつて一分ほど。今までの展開は、一応作戦通りに推移している。

ピクシー達はタルンダを積み終わるまで守勢に回り、リリムがそれを阻止するように攻勢に回る。

リリムはデバフが限界までかけられてすら、自身の勝利は揺るがないと考えているのか、その妨害は非常におざなりであるが。

確かにどちらかに魅了が決まれば、形勢は一気にリリムへ傾くだろう。一瞬前まで敵だった存在に、意のままに操られる。それを自覚してなお操られてしま

うほど、魅了というものは甘美で抗いがたいものなのだ。

三人の悪魔が中空で織りなす攻防は、次第に加速していく。

電撃では効果が薄いと判断したリリムが、セクシーアイを連発し。

それに対してもピクシー達は気合と魔力で抵抗しながら、今は雌伏の時と、時折隙を見つけてはタルンダを放ちながら守りに徹し続ける。

それだけを見れば、格上を相手に中々いい勝負を繰り広げている様にも見える。  
しかしその強さの源は有限である。

スペック差を補おうと、湯水の如く消費されている魔力は、元は渚から供給される  
る生体マグネットだつたのだ。  
生命エネルギーでもあるその残量は、お風呂の栓を抜いたかのように、時間が経つご  
とに目減りしていく。

ピクシー達も生命の危機に瀕しているからか、その吸収速度は渚への劳わりなど皆無  
だ。

このペースが続くと、敵に殺されるよりも先に仲魔に吸い殺されそうである。

そうならない為の短縮的な思考として、仲魔と結んだ契約を破棄して逃走するのも手  
ではあるが、そういった卑劣な手は執りたくない。

(やつぱり僕も出るしかないのか……)

体調不良により青くなつた顔で振り仰ぐ。

戦闘はようやく中盤に差し掛かつたところ。今のデバフを重ねる下準備ともいえる時間が終われば、二人の悪魔による一斉攻撃が控えている。

そんな状況では、魔力の消費速度が上がることはあっても下がることはないだろう。両陣営共にメインウェポンが通じず、終盤になつても泥沼の展開になりそうとなれば尚更だ。

理想を言えば短期決戦がベスト。

補助が積み終わり次第、渚も戦闘に参加したいのだが――。

その戦場は、高く聳え立つ木々よりも更に数十メートル上だ。

(……手の出しがない。せめて木から飛び掛かれる高度まで降りて来てくれないものか)

それが最大のボトルネックだつた。

渚の手の届く場所まで降りてくれば、その時はリリムに翼を与えていた飛行術式を破壊し、戦場を強制的に地上に移行することも可能となる。

そうなれば、この直死の魔眼で――。

「あれ……？」

空を自在に飛び回つてゐるリリムを見て、違和感。

その女の形をしたモノを殺そうと意識しても、そのとつかかりつかめない。周りに存在する夥しい量の線は、いつたい何の綻びなのか。全ての情報を、視覚イメージに頼らずに精査していく。

脳髄の奥から鋭い痛み。

思わず額に片手を押し当てる。手のひらから伝わる、高い熱。

そして理解する。

た。

焦つたように仲魔たちに目を向ければ、渚の微かな望みを絶つかのように殆ど同じ光景が。

「——死が、見えない……!?」

その意味を理解して、渚は戦慄と共に呟いた。

脳にあまり負担を掛けたくない、視覚イメージに頼りすぎていた結果。

万物に存在する終焉、その綻び。悪魔にはそれが存在しないと、一番大切なことを今更ながらに認識する。

……いや違うか。

シキガミに目を凝らせばその真っ白な体に、蜘蛛の糸のように薄らと、だがはつきり

と一本の線が見てとれた。

悪魔にも死は存在している。しかし渚の目にはうつすらとしか映らない。

それは悪魔という存在の滅びに対する、渚の理解の不備を示唆していた。



契約による繋がりを伝い、サマナーの位置を探る。

——いた。大樹の枝の上、遠く、枝葉に遮られながらも、青白く光る瞳はよく見えた。恐らく魔眼だと思われる、不気味な目。

アレで見つめられると、どうしてか得体の知れない恐怖を感じる。

弱点を丸裸にされてしまうような、そんな感覚。例えるならば、アナライズを使用された時の悪寒に近いかもしれない。

——多少動けるようではあるが、所詮はニンゲン。

あの魔眼は、そんなわたしの認識を粉碎し、そのニンゲンを警戒させるに足るところでもない異能だった。

悪魔達ですら不可能な芸当を、目の前で披露されたこともポイントだろう。  
わたし達もよく知らない事を自信満々に喋られて、その雰囲気に呑まれてしまつたの

も原因か。

力関係は歴然の状態で、わたし達に若干有利という程度の契約を結んでしまったのは。力量差を見れば完全なる敗北であった。

(どうしてわたしは彼を戦闘に参加させていないのだろう？　あの能力があれば、噂に聞くガードキルも……いや、最低でも弾除けくらいにはなつたはず。なのに、どうして？)

それは咄嗟に隠れていろと指示してしまつた時から、ずっと感じている疑問だつた。いくら思考をしようとも、胸のもやが晴れることはない。

戦場でのんきに余所見をしていたわたしに向かい、リリムからピンク色に錯覚するほどに魅力の呪いが籠められた魔力が放たれた。

その速度は、電撃ほどではないにしても避けることの出来ない高速だ。着弾までの一瞬にも満たない僅かな時間。その間に心の準備を整える。

ピンク色の魔力にわたしの小さな体が捕らえられる。

脳裏を過る甘美な誘惑。リリムがとても美しく見え、そのお手で撫でられればどんなに心地いいだろう。その口で褒められれば――。

「――ツ！」

一瞬の気の迷い。

夜魔のチャームを、気合とサマナーから潤滑に供給されている魔力を用いてレジストする。

リリムが他方を攻撃したその隙に、頼もしい子分であるシキガミがタルンダを更に命中させる。

これで五発目。

リリムの周囲には、妖艶な肢体を覆い隠すように大量の攻勢妨害の呪いが纏わりついていた。

攻撃しようとするたびに、鎖のように束縛しその行動に制限をかけている。残念ながら魅了には制限が及ばないが、これで直接攻撃手段は封殺できた。後は、あのいけ好かない悪魔を囮んで袋叩きにしてやればそれで終わり。リリムを中心に囮むような軌道を描いて飛んでいるわたし達。

対面、リリムの肩越しにシキガミと目配せし合い、二人は小さく頷いた。

「いっくぜええええ！」

空に響き渡る雄叫びと共に、シキガミが紙のような体をなびかせて突撃する。

格上とはいえ魔法型の上、攻撃力が大幅に制限されたリリムと、格下とはいえばランクのシキガミ。

格闘戦はシキガミがかなり押す事となる。

妖精で肉体的には非力なわたしは、シキガミに前衛を任せて回復と、暇があれば後ろから殴るのがお仕事だ。

シキガミが傷つけば即座に回復し、隙を見せればその背中に一撃離脱で嫌がらせ染みた攻撃を仕掛ける。

最大の懸念であるセクシーアイも、何とか抵抗を成功させ続けている。

サマナー様様である。魔力切れを気にせずに戦う事ができるのは、戦闘に於いて非常に有利だ。

接近戦では形勢不利で、二人の悪魔が中々魅了されないことに、流石のリリムにも焦りが見え始めた頃。

一人に狙いを定めたのか、シキガミにチャームをかけ続ける。

今のところはその全て誘惑を振り払うことに成功し続け、接近戦でリリムにもダメージを蓄積させ始めている。

しかし。

(一発食らう)とにレジストするまでの時間が伸びている——。これ以上は、駄目……

その場にいた全員はそれを理解していた。

多少手傷を負つてはいるとはいえ、戦闘不能には程遠いリリムに、立て続けのチャームで高ぶつた精神が冷え切らず、今にも誘惑されそうなシキガミ。

敗色濃厚とみて撤退を開始しようにも、素早さはリリムの方が高い。

撤退は不可能。

「くつ、こつちを向け！」

「ふふ。何かしたかしら、おちびさん？」

わたしは自身に攻撃を向けさせようと執拗に攻撃を繰り返すが、余裕の笑みを取り戻したりリムが思惑に乗つてくる様子はない。

元々の非力さに加え、レベルによる靈的装甲の厚さ。

その差は渾身の打撃も、無視できる程度のダメージで防いでしまつていた。

「さあ、そろそろ終わりにしましようか。『私に従いなさい』」

「う、おお、うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

チャームを受けたシキガミが、煩惱を頭から追い出すかのように身悶える。

しかし肉体の動きとは裏腹に、抵抗時に最も重要な魔力をうまく使っていない。  
あれではだめだ——。

「よしよし、いい子ね。あの妖精を捕まえれば、もつとご褒美をあげるわ」

苦楽を共にしてきたシキガミが、飼い慣らされた犬のようにリリムの傍に待つている。

わたしは絶望と共にその光景を目にした。

弱肉強食の惡魔の世界。

強者には媚び、弱者からは搾取して。

下剋上を恐れ、将来脅威となりそう芽は早々に摘み取る。

その環境に適応しながらも、なぜだかそんな自分に無性に腹が立つて。

イタズラをやめて、効率を追求してみたり、喋り方を変えたり衣服を変えたり、よわつちかつたシギガミを子分にしてみたり。

思いつく限りの周囲と違う事をして。でも結局、本質的には何ら変わることはないで。

苛立ち紛れの下剋上。その集大成を実行していた時だったからか。

普段ならば率先して潰していたであろう才能を垣間見ても、摘みたくないと思ったのは。

戦闘に参加させず、ニンゲンが手出しきれない空を戦場に選んだのも。

もしかしたら、あのニンゲンがさつさと逃げてくれるこ<sub>ト</sub>を望んでいたのかもしだい。

大成した彼の姿を見てみたいと思つたのは——。

「——あつ！ うあ！ あぐつ！」

「まつたく、手間のかけさせる羽虫だこと」

撃ち落されて、失神しかけていた意識が強い痛みによつて覚醒する。

地面に這いつくばされ、足蹴にされていた。

フードがはずれ、薄紫の髪が空気に触れる。

「あれだけおいしそうな人間を食いつぶしてしま<sub>う</sub>なんて……。ほんとうに、忌々しい子」

わたしの体長程もあるリリムの足が踏み下ろされる。

体が押し潰されて、粉々に粉碎されたような衝撃。

痛みに涙がこぼれ、口は喘ぐように苦痛を訴える。

「あツ——、う、う……」

「楽には殺さないわ。死ぬまでいたぶつてあげる。自分が犯した罪を自覺するまで、ね」  
あんな状況になつても律儀に供給させていた魔力も、シキガミが操られて敗色濃厚となつた時点でこちらからカットしていた。

シキガミも、チャームされた時点で契約が破棄されている。

二人の魔力供給が途絶えたことに気付いたリリムは、順当にサマナーが枯死したと勘違いした様子だつた。

何故か自分の契約は未だに解除されていないが、彼も目端も効くようだから逃走に移つていることだろう。

消耗しているとはいえ雑魚悪魔に殺される玉でもなし。襲つてくる奴等を脅して従わせれば、無事に異界を脱出できるはず。

あれだけの才能があれば、人間界で苦労することなどないだろう。

ニンゲンの癖に、魔界でだつてやつていけそな奴なのだ。

だから心配いらないだろう。

今心配するべきなのは、自分の心。

いつたいどれくらい躊躇っているのだろう。

多分まだ数分も経つてない。

それなのに、もう全身、痛いところがないくらいに痛い。

リリムは悲鳴を聞くのが愉悦だと言わんばかりに、わたし目掛けて何度も地団駄を踏む。

その度に痛みに反応するわたしの体。

与えられる暴力を、無我夢中で耐え凌ぐ。

それが緩んだ時には、罠だとは思つても、駆け出さずにはいられなかつた。  
成算なんてない。痛いのは嫌。それから逃げ出す機会があつたから逃げ出した。そ  
れだけだ。

絶対に逃げきれないことなど分かつていた。

それでも無事に飛び立てた時は、不覚にも希望を感じてしまい——数メートルも飛ば  
ないうちに、再び絶望に叩き落とされる。

「がつ、ふつ！」

ボールのように地面を跳ね転がつて、木に衝突してようやく止まる。

わたしに近づいてくる気配に恐る恐る顔を上げると、潤んだ視界に、嗜虐的なリリム  
の表情が映つた。

——心の折れる音。

それが、胸の奥から聞こえた気がした。

(ごめんなさい、シキガミ。わたしは悪いボスだったみたい)

確固たる芯が無く、気紛れに自分のやりたいことだけをやる。

あれこれ理屈を付けながらも、極論すればしていった事はそれだつた。

そんなわたしは、今まで自分が馬鹿にしていた同族たちと大して変わらなかつたことに今更気が付いた。

それすら自覚できていなかつた馬鹿な自分は、のたれ死んで当然だ。

信じて付き従つてくれたシキガミには悪いとは思うが、彼も立派な悪魔の一人。

変わり者の妖精に騙されて、無謀にも格上に挑み、死ぬ。

そんな結末も、甘んじて受け入れてくれるだろう。  
わたしは、この痛みを甘受しているように。

「――――――？」

目の前の悪魔が、何かを言つている。

何の反応も返さないでいると、いらだつた様子で蹴つてくる。  
それをされるがままに受け止める。

無駄な足掻きはもうしない。

今の最善の行動は、彼女に興味を喪失してもらい、樂にしてもらうことだと悟つたのだ。

だから頭を空にして、ただその時を待つた。

――ふいに、ここにいるはずがない存在が目に入る。

目前で起きている光景が、信じられなかつた。

わたしを踏みつけながら何やら言葉を発していたリリムに、突如サマナーが樹上から襲い掛かる。

素早い踏み込みに、一瞬の攻防。

サマナーの先制攻撃、リリムに触れた枝が何らかの存在を霧散させる気配を感じたが、無傷。

リリムの速度に退避が間に合わず、無造作に払われた細腕によつて、サマナーが弾き飛ばされる。

幸いにもタルンダの効果が残つていたお蔭で、傷は浅い。

空中で体勢を立て直し、木の幹に受け身を取つたサマナーは、木々を足場に攪乱するような立体機動を展開した。

「……どうして逃げなかつたの、サマナー」

大地に押し付けられる足から解放され、ふいに口を突いて出た言葉。

返事すら求めていなかつたそれを耳聴く聞きとめたサマナーは、一瞬こちらを向いて、困つたような笑みを浮かべた。

## 5. 異界からの脱出

手出し可能な高度へと、戦域が下りてきた。

森へ逃げ込むようにピクシーが降下し、その後をシキガミとリリムが追いかける。その光景を目にした瞬間、渚は弾かれるように動き出した。

風を切り、枝を足場にして、巨大樹の森を飛び跳ねるように移動する。

目的はもちろん、ピクシーへの加勢である。

自分では悪魔に傷を負わせるのは不可能かもしれない。

それでも戦闘に参加すれば、状態異常の解除や、単純に的が増える効果として、一人一人の圧力の軽減にも繋がる。

悪魔と比べたら低い身体能力に加え、武器はただの枝と、基本攻撃力は無に等しいが、様々な現象を無効化できるという能力を有している以上、完全に無視されることもないはず。

あの二人を見捨てて逃げるという選択肢も存在した。

シキガミが魅了され、これ以上の魔力供給は利敵行為と契約を絶つた時、このまま逃げてしまえと思わないでもなかつた。

というか真剣に検討した部分もある。

確かにこのまま突撃するよりは、生き残る成算は高いだろう。

しかし仲魔を囮にして逃げるなど、とてもサマナーの行動だとは思えない。

渚の知っているサマナーは、例えどんな状況であろうとも、仲魔たちと協力して危機を脱そうとしていた。

過程はどうあれ、渚は仲魔を得て、サマナーとなつた。

一人で逃げるなんて、ありえない。

(……といつても、ゲームの中の話なんだけどね)

なんだかおかしくなつて、渚はくすりと笑みを漏らす。

そして唐突に木の枝で、片膝をつくようにして衝撃を殺し、足を止めた。

加速しきつていた身体を完全に制御しきり、音を立てず、枝も揺らすことのない華麗な急停止。

目的地はまだまだ先、しかし障害が発生した。

ごう、という音と共に訪れる局所的な突風。

すぐ目の前、渚が移動を続けていれば未来位置だつただろう空間を、横合いから飛び出してきた茶色い毛皮の獣人が、弾丸のように過ぎ去った。

奇襲を避けられたコボルトは、進行方向に存在した自身の十倍以上もある分厚い幹に

激突するように接地して、すぐに重力に引かれて大地に足を付けた。

追撃を警戒してか、コボルトはすぐさま渚に体を向ける。

「グゥルル……」

奇襲を察知していながら、攻撃するそぶりも見せずに悠々と高所から見下ろす渚の姿に、舐められたと感じたのか、コボルトは怒りで毛を逆立てた。しかしコボルトは、威嚇する犬のように唸るだけで、飛び掛かつてこようとはしない。奇襲を避けられ、頭上を取られたこともあつて警戒しているのだろう。

——飛べない可能性大。

感じるプレッシャーからして、レベルはそれほど高くない。

仮にリリムを一〇、ピクシーたちを五とすれば、こいつは二～三程度。一対一なら時間を掛ければ倒せそう。

それでも死の線はよく見えない。

一瞬の交錯と数秒の観察で、渚は彼我の戦力差を大体把握した。

渚に襲い掛かつてきた理由は……。

格上同士の戦いを、あわよくばハイエナしようと様子を見てたら、手頃な獲物を見つけたから襲つた、って感じだろうか。

(ピクシー達が心配だけど、戦うか？ それとも無視する？)

思考が回転する。

コボルトは唸りながらも、じりじりと後退りしていることから、無視すれば戦闘は回避できそうである。

しかしその場合、弱いとはいえ好戦的な悪魔を放置することになる。

リリムとの戦闘がどんな形で終わるにせよ、消耗することは避けれない。その状態で出会えば面倒だろう。

ならば後顧の憂いを絶つために殺す？　いや、恐らく漁夫の利を狙っているのはコイツだけではないだろう。

コボルトを一匹倒したところで、後の状況が極端に好転するとは思えない。  
(ならさつさと援護に駆け付けた方が良い、かな?)

戦闘回避に天秤が傾き、コボルトから視線を外して踵を返す。  
移動を再開しようとして――。

不意に、天啓のような発想を得た。

利点を探すならば、もつと別のところに視点を向けるべきだった。  
そう、例え――。

(こいつをぶつ殺せば、悪魔の死について理解できるかもしね)

死が理解できないという現象は、例えるならば小学生低学年を相手に先端科学の論文

を見せるような行為だ。

記述は母国語で書かれているから、数字や文字だけは読めたとしても、内容は絶対に理解できない

しかし内容が理解できずとも、その現象や実験の様子を見せてやれば、直感的に理解できる可能性はある。

それが得意分野ならば、尚更だ。

天才的にも思える自身の閃きに、思案の為、俯きがちとなっていた渚の口元は弧を描く。

実験にお逃え向きの悪魔がやつて来たのは僥倖だつた。

今にも飛び立ちそだつた渚の体が、コボルトへ再び向き直る。

「グツ……。……グゥルアアアアアアアア!!」

振り返つた渚の顔を見て、コボルトは気圧されたかのように一步大きく後退る。だが、そのまま逃げだすことは無かつた。

悪魔としての矜持が、人間から逃げ出す事を許さなかつたのだ。

寸前のところで踏み止まつたコボルトは、弱さを見せた己を誤魔化すように咆哮を上げて棍棒を振りかぶり、頭上に位置する渚に向かつて飛び立つように跳躍した。



捨て鉢氣味なコボルトの突撃から始まつた戦闘は、両者共に有効な攻撃を与えることができずに膠着していた。

持つていた棍棒を破壊され、徒手空拳となつたコボルトが渚に襲い掛かる。

若干細身ながらも隆起した筋肉に、獸のように敏捷な身のこなし。

その身体から繰り出される攻撃は、渚にとつて確かに脅威であつたが、雷速すらも捉える目を欺くには、その動作は鈍重にすぎる。

振るわれた右腕を潜るようにして避け、すれ違いざまに脇腹に見えた、か細い線に枝を走らせるが、失敗。

それはすぐに消えてしまい、枝先が触れる頃にはただの毛皮となつていた。

その攻撃は、もちろんノーダメージに終わる。

「グフツ」

繰り替えされる渚の奇行に、コボルトが馬鹿にしたように笑う。

戦闘中ということでそれなりに自重したのか、押し殺されたような笑い声は、それでも渚の耳に届いていた。

(こいつつ、全裸の癖に、むかつくな!)

邪魔だからと、コボルトの服のようなものは、渚に全て破壊されて真っ裸となつていた。

獣の上、毛皮があるので羞恥心など感じていない様子であるが。

そんな原始人のような輩に馬鹿にされたとあつては、中々上手く殺せずに苛立つていても手伝つて、渚の勘気は一瞬にして沸点を超えた。

それ違ひざま、そのまま距離を取ろうとしていた足を強引に止める。

魔力を流し込み、簡易的な強化を施していた木の枝を、更に強化しようと魔力を注ぐ。散々吸い取られたし、使うところも見てているからこの程度は簡単だ。

地面を抉るようにして減速していく体を反転させ、同じように足を土に埋めていたコボルトへ向かつて突つ込んだ。

ヒットアンドアウエイを徹底していた渚が自分から向かつてくるのを好機と感じたのか、コボルトが牙をむき出しにして笑い、その場でどつしりと構えた。

渚の攻撃力は大したことがないと確信して、相手から一撃を貰つても、更に良い一撃を返すことに決めたのだろう。

(肉を切らせて骨を断つか……。確かに有効な戦術だ)

その脅威を理解して、渚の思考は急速に冷却された。

魔眼に期待できない以上、ダメージ交換では圧倒的に不利。

筋力や耐久が其れほど上がっていない渚にとつて、正面からの殴り合いは避けるべき事柄だろう。

「

一瞬の逡巡。

今ならば仕切り直しも可能だつたが、やめた。

いつからなのか分からないが、ピクシーや魔力供給が止まっていた。

契約が残っている以上死んでいないとしても、生存を諦めてしまったのだろうか。  
(早く救援に行かない)

ここで勝負を避けても余計に時間がかかるだけ。

負傷のリスクを受け入れたコボルトと同様に、渚も覚悟を決めた。

▼

脳を限界まで酷使して、全力で“死”を理解する。

頭が割れるように痛み、脳の放熱により顔が真っ赤に茹で上がり、滝のような汗が額を流れる。

極限まで集中した結果として、知覚速度も際限なく加速する。

周囲の木々、地面、空気、身に付けている物。理解できるモノすべてに“死の線”が浮かび上がり、脳髄が悲鳴を上げる。

視界に映る世界も、見ただけでも鬼気が走る黒で、元の配色がよく分からぬほどに埋め尽くされていた。

そこまでしてなお、悪魔という常識外の存在は、普段と殆ど変らずに元の姿を保っていた。

まるで未知の言語で記された書物を解読しているような作業。

目が滑り、必死に類似点を探しても見つからない。ついには理解を放棄し始める。悪魔にも死は確実に存在する。しかし、その内容がまるで理解できない——。

魔眼と頭脳の性能でごり押しして、全ての死を理解するような従来のこの方法では、悪魔達には対抗できない事を悟る。

もつと効率的な方法を。

(解析のリソースを一点に集中すれば——)

unnecessary モノを意図的に省いて、指定した対象に全てのリソースを注ぎ込む。 目を完全に見開いているのに、視界の中心に位置するモノ以外は、意識の外に追いやる。

言葉にするのは簡単なのに、いざ、やるとなると苦戦する。

意図的に魔眼の対象から外すのが、こんなにも難しい事だなんて思いもしなかつた。目を開ければどうしても視界に入ってしまう。

視界に入れれば、条件反射的にそれがなんのかを理解してしまう。  
かといって目を閉じようと、そもそも目標が見据えられなくなるし、かえつて気配を感じようと感覚が研ぎ澄まされ、その五感で感じたものから死の気配を感じ取つてしまふ。

どうしようもなかつた。

これは超絶技巧が必要とされる技術だ。一朝一夕で身に付くものではない。  
気づけば、待ち構えるコボルトとの距離はもう僅か。

引き返すことなど、到底かなわぬ彼我の距離。

焦りが思考を支配して。

(だつたらもつと、押すしかない!)

発想を変える。

一朝一夕では身に付かない。ならば自ら死地に赴いて、身に付かなければ死ねばい

い。

そうだ、それでいい。

この身は追い込まれれば追い込まれるほど応えてくれるのだ。

頭が破裂する？ 大丈夫。精神が負けなければ、身体が勝手に最適化してくれるはずだ。

破裂するのは、限界までの最適化を完遂し、それでもなお届かずに何の打つ手もなくなった後。

だからその時は、純粹に力が足りていなかつただけだ。潔く死ねるだろう。

煮詰まつた頭から導き出された結論は、脳筋全開の根性論だった。  
まず真っ先に、痛みが無くなつた。

今まで苛んでいた頭痛が消え、あまりの痛みに錯誤が発生しつつあつた思考が清らかに澄み渡る。

神経回路のあちこちがショート寸前で、それでも意識は明瞭に。

全力が出せるようとの配慮だろうが、身体が発する悲痛な警告も完全に無視する形となる。これで後戻りはできなくなつた。

そして気が付けば、視覚以外の五感が全て機能を停止していた。

風を切る音、森の匂い、鉄の味がする口内、衣類の感触。

一瞬前まで感じられていたそれが、今は全く感じられない。

それでもイメージ通りに身体は動く。戦闘に支障はない。

しかし様々な機能を停止して、それでも渚の瞳に映る獣人の姿はほとんど変わらな

い。

リソースが微かに増えたとしても、注ぎ込む対象が絞れていないのだから当然ではある。

恐らくその効果は、全ての線の色度が数十%上がつたくらいじやないだろうか。例え色度が五割増しになつたとして、元が無きに等しいのでは意味がない。

まあここまで予想通りの結果、渚自身も期待してはいなかつた。

コールタールの海を泳いでいるような体感速度の中、更に一步距離が縮まつて。四肢を地面に置き、今にも飛び出しそうだつたコボルトの体が、微かに沈むように震えた。

(来る――！)

それは飛び出す前兆。

コボルトが攻撃動作に移つたことの証左。

コボルトが動き出せば、その二人の相対速度は生物の域を超越する。

次に時計の長針が一つ動いたとき、勝敗は既に決しているはずだ。

このまま当たれば、渚の敗北は必至。

見切つているお蔭で、その気になれば回避も可能だろうが、それをしてジリ貧である。

ここからが本番。

一秒にも満たない僅かな猶予を以つてして。

危機に瀕した肉体が、勝手に対象を取得選択してくれる……。やると決めた以上、その願望にこの身を捧げるしかない。

コボルト目掛け、力むように意識を集中させて。

——今が限界。これ以上は本気で命に係わる。

生存本能が発する弱音も、覚悟を決めた渚を止めるには至らない。限界の更なる先へ。その一線を何の躊躇いもなく踏み越えた。表面張力のようにギリギリで保たれていた拮抗が破られる。

脳が破裂した。そう錯覚するほどの衝撃。

四散した意識。炸裂する視界。ここは天国。いや地獄。

死出の旅。無常の風。一巻の終わり。

亡失。喪失。他界。往生。昇天。不帰。先途。終焉。卒去。入滅。絶命。絶息。遺失。逝去。死神。

B o s h i t s u . A π ■ λ ε i a . A π ε β ♦ ω σ ε . Θ ▲ ν α τ o ■ .  
A ν ▼ λ η ϕ η . Π ε θ α ● ν o ν τ α ♦ . K ρ ♦ σ η σ τ η μ ■ χ η .

T●λ○●. D o o m. Πεθα▼νοντα◆. Θυσιαστε■.

Z e s s o k u. L o s t. Απεβ▼ωσε. R e a p e r . . . .

飛散した意識の欠片の一つが、死の一端を理解した。

「」

焦点の合わない瞳が回復し、意識が再構築されていく。  
何かとんでもない経験をしていたような気がする。

渚が一瞬の自失から立ち直れば、すぐ目の前にコボルトが存在して。  
そしてその身体には、無数の線が見えた。

別世界、その法則で生まれ育った魂。それが悪魔の——。  
「なるほどね。それが君たちの『死』か」

魔法なんかの概念よりもずっと強度が高かつたから手こぎつた。  
とはいえば完全に理解し得た訳ではない。

証拠に、一撃死させられそうな場所には死が見えない。  
(なら即死圏内までダメージを与えてやればいい)

ナノセカンドの判断。

コボルトの踏み出された足を切断し、咄嗟に体を支えようとした右腕も流れるように  
切り払う。

勢いに乗ったままつんのめって、縋るようにして伸ばされた左手も、次の瞬間には胴体と切り離されていた。

「——グアツ!」

五体の内の三つを瞬時に失い、地面に叩きつけられたコボルトが、困惑交じりの悲鳴を上げる。

しかしその悲痛な叫びも、蒼い瞳の死神は意にも介さない。

殺して殺して殺し続けて。

上半身のみとなつたコボルトは、這い寄る死の気配に恐怖した。

痛みや苦しみ。生への執着。死への恐怖。とんでもない藪蛇をしてしまつた後悔。

様々な感情がコボルトの胸中で渦巻いた。

爆発するような感情の放出を求め、無意識の内に口を開けて——。

渚が無造作に繰り出した木の枝が、コボルトの額になんの抵抗も感じさせずに突き刺さつた。

「ア——」

断末魔の叫びをあげる事も許されず、コボルトはあつけなく死んだ。

それを確認し、水に浸かつた枝を取り出すように、額に埋まつた木の枝を、渚は然して力も籠めずに引き抜いた。

存在の核を失つたコボルトの肉体が、世界に分解されるかのように魔力となつて溶けてゆく。

透き通つた赤い魔力が発煙弾のように撒き散らさる幻想的な光景には目もくれず、渚は目を爛々と輝かせながら、大地に散らばつたコボルトの死体を凝視し続ける。

大量の魔力を浴びながら暫く経ち、やがてコボルトの体が消えかけた頃、渚は興味を失つたように踵を返した。

「ありがとうコボルトさん。お蔭で死について、また一つ理解できたよ」

一足飛びで近場の木の枝に飛び乗つて、思い出したように渚が感謝の言葉を口にした。

その顔には穢れのない純粋な笑みが浮かんでいるが、それを向けられて、言葉通りの意味に捉えられるものは少ないだろう。

自分で殺しておいて感謝するなど、まして心の底から感謝しているように見えるなど、狂人にしか思えないからだ。

そんな渚の頭脳には、新たに理解した死の法則が、完全にインプットされていた。



感覚が若干戻り、鈍痛と氣怠さが渚の身体を支配する。

コボルトのマグネットを吸收昇華して、魂が成長し、それに合わせて肉体も強化された。

体に力が漲る。しかし損傷は回復していない。

なのに疲労をそこまで感じない。アドレナリンってすごい。

(今日一日でだいぶ人外になつたなあ)

木々の間を飛び回り、再び樹上の人となつた渚が、胸中で一人ごちた。

高速で流れる視界、感じる風圧、忍者にでもになつたような感覚。その全てが人力にて齋されたものなのだから驚きだ。

「痛つ」

痛み止めの効果が唐突に切れたように、頭痛が激しくなつた。

脳髄が全周囲から脈打つように激痛を発している。

後遺症が残るかもしれない程の酷使の結果だ。

この分では、魔眼の性能は一時的な低下を免れない。

しかし悪魔の死を理解できたことは非常に大きな成果である。

性能が下がつたとしても、リリムとは戦えるだろう。

少なくとも、コボルトを無視した場合の未来と同程度には。

——遙か前方に、力強い悪魔の気配を察知した。九分九厘リリムだろう。

その近くに違和感を感じ、もしやと思い契約のパスを辿つてみれば、それは非常に弱つたピクシーの気配だつた。

どういう状況かは分からぬが、ピクシーは未だに生きている様子。

ほつと小さく吐息を漏らす。

契約が繋がつているとはいへ、本当に生きているのか不安な部分もあつたのだ。その場の気配に集中し、それ以外の気配がどこにも存在しない事を知る。

安堵しそうになつた気持ちが乱暴に引き締められた。

(……シキガミ。間に合わなかつたか)

それどころかピクシーも危険である。

そのことに思い至り、次にやつてきた足場は全力で蹴つた。

同時に、息を潜めて衣擦れや足音に気を配り、魔力の漏洩にも注意して、渚なりに精一杯の隠密をこなす。

気配が殺せているかは甚だ疑問であるが、無造作に接近するよりはマシだろう。

見えてきた。

地に墜ちたピクシーが、リリムに足蹴にされている。

幸いにもこちらに気付いた様子はない。

ならば奇襲あるのみ。

何時だつて苦しめられた、悪魔直伝のバツクアタックをくらえ！

リリムの後方に回り込み、地面に倒れた妖精を踏みつぶそうと足を振り上げた瞬間にタイミングを合わせて強襲する。

溢れ出る魔力、纏わりつく呪い、靈的装甲、それらに覆われたリリムの死。

狙える線が多すぎて目移りする。

（やはり即死は狙えない。なら基本はさつきと同じ！）

リリムの背中に走る無数の線の一つを目標に杖を振るい、鋭いエオルス音が辺りに響く。

靈的装甲を剥いでやる。一部を殺すにとどまつたが、電撃無効は剥がれ落ちたのを超常的な視点により知覚する。

コンディションが最高だつたら全属性を弱点にしてやることも出来ただろうが、その場合はまどろっこしい事をせずに即死させているだろうから比較に意味はないだろう。

「――!?

首だけで振り返つたりリリムの驚いた視線。  
しかし驚愕は一瞬。

渚のことを視認して、すぐに気を取り直した夜魔が、うざつたい羽虫でも払うかのように振り向きざまに腕を振るう。リリムの死角、背中側を通り抜けようとしていた渚の背後に、リリムの細腕が迫りくる。

——速い。回避が間に合わない。

本能が発する警鐘により、渚はその脅威を瞬時に判断した。

咄嗟に盾とした木の枝は容易に碎かれ、背中側の左脇腹に衝撃、それは地面に叩きつけられるような角度だった。

(——まづつ)

大地に転がされれば、今も地面に蹲るピクシーのようになつてしまふのは明白だ。

渚は被害が増えるのも厭わずに、衝撃に逆らうように地面を蹴つて、そのベクトルを無理やり上方向へと変換する。

——ボールのように弾き飛ばされた体。

体内からも何かが碎ける音。

木の枝の粉碎音を聞き間違えたのだと思いたいが、恐らく肋骨が何本か逝つた。

空中で何とか体勢を立て直し、木の幹に着地。追撃を警戒して立体機動を開始する。だが、これだけで済んだのは幸いだつた。

攻撃阻害の呪いが残つていなければ、あの一撃は背骨まで達していただろう。

存在強度の差、魂の階梯の差。つまりレベル差というのは恐ろしい。

痛覚が遮断されているお蔭で、行動には全く支障がない。

物理的に行動不能にされないかぎり、今の渚は死ぬまで行動し続けることが可能なのだ。

激しく動いているにも関わらず、リリムから途切れることなく視線を向けられている現状について考える。

此方から仕掛けるのは難しい。

上手く強襲して正面からの奇襲に成功しても、精々が先程の焼き直しになりそうだ。

コボルト相手のようにはいきそうにない。

とはいえるこの状況を打破する為の布石は既に打たれている。

ピクシーの復帰が待ち遠しい……。

(うん?)

逸るようすに視線を向けた先で、呆然とした様子のピクシーが何事かを喋つたが、まったく聞き取れなかつた。

表情からして、何か意味のある指示という訳でもないだろう。……とりあえず笑つて誤魔化そう。

「へえ。アナタ、生きていたのね。……それにまあ。おいしそうになつちやつて。期待以上だわ」

好色と食欲が入り混じつた視線。

渚を屈服させた後でも思い描いているのか、リリムが自分の想像に舌なめずりする。しかし慢心していても、流石に戦闘経験豊富な悪魔。リリムはこの状況に於ける最善手を選択し、宙に浮かんだ。

それは渚にとつては最悪の一手。

「ちよ、待った！」

「ふふ、捕まえてごらんなさい？」

渚が網を張っていた周辺を避けて、リリムが頭上に躍り出る。

意図を察知した渚がすかさず追いかけるが、リリムの上昇速度は木々を足場に駆け上がる渚の比ではない。

空に逃げられたら大変なことになる——。

「ピクシー！ ジオを！」

「――？」

頭に疑問符を浮かべながらも、指示に従つてくれたピクシーの電撃が上昇を続けるリリムへと放たれた。

「はつ、馬鹿ね。私に電撃なんて——。ガア——!?」  
「えつ」

私の耐性も知らないのかと、小馬鹿にした笑みを浮かべていたリリムが、雷に貫かれて悶絶する。ついでに術者であるピクシーも驚いている。

本来ならば効かない筈の攻撃が効いたのだから当然だ。

二人とも、渚が何かをした事には気づいても、その“何か”的詳細には理解が及ばなかつた様子である。

放されたピクシーのジオは速射であり、威力はそれほど無かつたが、全く備えていなかつた予想外のダメージに、リリムの動きは停止した。

正確に言えば、今もリリムの体は慣性に従い上昇を続いている。しかしその速度は、渚にとつては動いていないも同然である。

瞬時に肉薄し、リリムに碎かれて包丁並みに短くなつてしまつた枝を振りかざす。

今度は狙いを迷う必要はない。

すれ違いざまに飛行術式を無効化し、ダメージにより比較的濃くなつていた腕の線を切斷、白くて綺麗な細腕が宙を舞う。

「ああつ、私の腕が！ 人間、貴様アア！」

憤怒と苦痛をない交ぜにした顔のリリムが、落ちながらも報復しようと、魔力を噴出

し始める。

魔法の前兆。かなり本気。照準は渚。変換された魔力がバチバチと音を鳴らす。至近距離からのジオ――。

それだけの情報で、咄嗟に逃げようとした身体を理性が律した。

一度この足場を蹴つてしまえば、もう決して行動の変更を行えない。

数瞬行動が遅れれば、それだけで避けられるものも避けられなくなるだろう。  
しかしそれがどうしたと、渚はパーテイー戦での最善を求めて視野を広げると、渚を援護しようと、地上で再びジオの準備をするピクシーの姿が見えた。

――勝利への道筋が、一瞬にして明瞭になつたように感じられた。

しかし魔力切れが近いのか、その魔力の充填は遅々として進んでいない。

(変な遠慮なんかしないで搾り取りなよ!!)

ピクシーは戦闘が再開してからも、渚から全く魔力を吸い取つていなかつた。

なのに魔力不足により戦線離脱しかけていたわけで、通りで気付けなかつたわけだ。

邪魔をしないようにとのピクシーなりの配慮だつたのだろうが、危うく勝機を逸するところであつた。

そんなピクシーを不甲斐なく思いながら、渚は自身の体内でかき集めた魔力を、パスを通して強引に送りつける。

目が霞み、生命力が一気に無くなつた感覚。また一步、死が近づいた。

『頼んだ』

そう強く思つての魔力供給。

その願いと共に、全力で撃つのに十分な魔力を受け取つて、ピクシーは何かを堪える  
ように頷いた。

『任せて、サマナー』

決意を宿した瞳を向けられて、渚にもその覚悟は伝わつた。

すかすかだつた術式に、魔力を流し込み始めるピクシー。それは徐々に帶電し始め  
る。

少しだけ、ディアを掛けられたらどうしようかと思つていたが、無事に意図は伝わつ  
た様子である。

(ほらほら、下から脅威が迫つているぞ? こつちばつかり向いてて平氣かなー?)

思いつく限りの最善の布陣を完成させて、上機嫌な渚が楽しそうにリリムを眺め、そ  
の瞬間を待つ。

焦りに負けて中途半端なジオを放つか、眼下を確認しようと渚から意識を逸らすか。  
どつちに転んでもおいしかつた。

しかし敵もさる者、そう簡単には引つかからない。

一瞬の間に幾度となく繰り広げられる心理戦。

充填されつつある魔力は気になつても、目の前にある脅威を前に、そう簡単に地上の脅威の程を確認できず。

かといって攻撃しようにも、まるで恐怖を感じていらない様子の渚の姿に躊躇して。視線を用いたフェイントにも全く反応しない渚に焦れてしまつたのか、膨れ上がる魔力の恐怖に屈したのか、向けられていたリリムの意識が逸れた——。

それが瞬時に本物の隙だと断定した渚は、限界まで折り曲げていた足を解放させて、リリムに向かつて弓矢のように飛び出した。

レスポンスが遅れて、リリムが咄嗟に身をよじる

しかしその反応は遅すぎる上、——そもそも狙つているのは身体ではない。  
今度の交錯は、両者共に無傷だつた。

しかし——リリムの術式で縛られていた魔力が、霧散した。

戦車が大砲を破壊されたかのような、主要攻撃手段の一時的な喪失。

今リリムは、まな板の鯉も同然だつた。

引き撃つた表情を浮かべた悪魔を、地上から放たれた雷が撃ち貫いた。

——着弾の光景を見届けるよりも早く、渚は当つたと想定して既に行動していた。リリムの左胸部に死の線が重なり合い、点のようになつてゐる。

(さよなら——)

レオタードを押し上げる膨らみの下から、心臓を穿つように繰り出された枝は僅かな抵抗すらなく、すんなりと根元まで突き刺さった。

一刺しで死に至らしめる、確かな手応え。

びくんと震え、呆然と目を見開くリリムの姿。

「私が……死ぬ？ 人間如きに、殺されて……？」

力が入らない様子で、渚にしなだれかかってくるが、無造作に振り払う。

「これ、が……」

死——。掠れる声で呟いて、リリムは動かなくなつた。

同時、リリムの死体は膨大なマグネットイトとなつて消失する。

淡く光る暗い緑色のマグネットイトが、物理的な圧力を感じさせるほどに発生した。リリムの存在全てが自然に帰ろうと、魔力に変換されているのだ。

その幻想的な光景を、地面に着地して倒れ込んでしまつた渚は、仰向けのまま見やつた。

雪のように魔力が降り注ぐ中、木の葉や土が入り混じる濃厚な森の匂いが鼻をつい

た。

「あ、くあ……」

喘ぐようにしてうめく。

戦闘態勢が解除され、どつと疲れが押し寄せてきた。

全身が信じられない程に痛み、しかし尋常ではない怠さにより身じろぎする事さえ億劫だ。

しかし渚は苦しげにしながらも、その表情には笑みが浮かんでいた。

胸中には狂おしいほどの達成感と充足感が麻薬のように広がっている。

動く元氣があつたとしたら、飛び上がらんばかりに喜んでいた事だろう。

(そうだ、ハイエナの警戒……。あー、なんかもうどうだつていいや。来るならこーい。餌になつてやる)

「サマナー！ 無事!?」

アホな思考を遮るようにして、ピクシーがよろよろと浮遊してやつてくる。

近くでよく見れば、その体は傷だらけだ。

上辺だけなら渚の方が身綺麗かも知れない。

「大丈夫だ……問題ない」

「……少し我慢して。今から人間界に脱出する」

ピクシーの真剣な表情には気づいていたが、それでも言つてみたかつた言葉が言えて満足です。

ネタなど知らないピクシーは言葉通りに受け取つて、渚の死人のような顔色と、ぐつたりとした様子を見て強がりだと判断した。

しかし漁夫の利を得にハイエナに来ていた悪魔達がにわかに騒ぎ始めた今、その言葉に甘えるべきだとピクシーは考えた。

「……？ そんな……便利な、ものが……？」

途切れ途切れに、渚が言葉を発する。

掠れてもいるその声は、まるで危篤患者といった有様だつた。

脳内物質の効果が切れ始め、ハイになつていていたテンションが下向を始めたのだ。

それと入れ替わるように、とてつもない睡魔が渚を襲い始めていた。

「……悪魔なら、誰だつて使える。……黙つていて、ごめんなさい」

懺悔するように言つて、仕事に逃げるようにピクシーはその魔法の構築に取り掛かつた。

魔眼を発動していない為に直には見えないが、今も緻密な術式を編んでいるのだろう。

確かに発動しつつあるその気配は、この異界に来た時の感覚と似ているような。

「いや……いいよ。僕も、色々嘘ついたから……お互い様さ」

「サマナー……」

確かに、出会つたその時にでも教えてもらえば、こんな修羅場を潜らずに済んだだろう。

しかし i-f の話をしても仕方がない。

眠気の強い頭から導き出された回答は、偽らざる本音だった。

無理して笑つて見せれば、ピクシーは複雑そうな表情を見せる。

……今の頭では、その本心を見抜けそうにない。

だからだろうか、こんな頓珍漢なことを言いだしたのは。

「そう、いえ。自己紹介が、まだだつたね……。僕、霜月渚……。今後とも……よろし

く

「

お約束とも言つていよいアレをしていなかつたことに気が付いた渚は、唐突に自己紹介を始めた。

「——うん。こちらこそよろしく、ナギサ」

どんな風に受け取つたのか、ピクシーは花のような笑みを浮かべていた。

あれ？ と感じつつも、渚も彼女の嬉しげな顔に釣られて、思わず笑い返していた。視界が白く染まる。

魔法が完成し、転移が始まつたのだ。

光と眠気に負けて、渚は目を閉じた。

## 6. 秘匿された世界

気が付いたら知らない部屋で布団に寝かされていた。

いや知らない場所ではない。うちと似た感じのこの和室は、幼馴染の信楽太しがらき一のお宅だろう。

信楽神社の社務所兼住居。何度もお泊りした経験があるから分かる。

「ん、これは……冷えピタ？」

若干の体の怠さを感じながらも体を起こすと、額に何か違和感が。

触つてみると、そこにはおでこに熱さまシートがはつてあつた。

そういえば確かに、顔や耳が熱くてなんだか熱っぽい気がする。

未だに脳が放熱しているのだろうか。

その割には肉体の痛みはおろか、頭痛すら感じないのが疑問であるが。

「ピクシーが直してくれたのかな」

身体の傷は治つても、疲労から熱を出した。

結構ありそうな話ではある。渚は適当に結論付けた。

布団に脚を突っ込んだまま部屋の中を見渡せば、そこはやはり見覚えのある部屋だつ

た。

勉強机に本棚。図工や美術の授業で作成した、素人丸出しな作品の数々。

本人の印象に反して、両親が厳格な為、部屋は整理整頓が行き届いており散らかつた印象は全く受けない。

うむ。これは紛れもなく、渚の親友である太一の部屋である。

備え付けの時計を見れば、現在の時刻は午前一一時。

八時頃に家を出てから、約三時間。意外と時間は経っていないようだ。  
ついでに道端に置いてしまったはずの鞄も発見した。

（携帯は——ない。ピクシーが実体化している以上、変な事にはなつていらないようだけど）

仲魔との繋がりを辿つてみれば、近く（この位置ならば居間だろう）にピクシーの反応があることを考えれば、彼女が上手くやってくれたのだろう。

携帯が取り上げられたのも、アレをC O M Pと考えれば、一般人から遠ざけるのはおかしな話でもない。

やはりこの神社は悪魔関係の仕事もこなしていたようだ。

となれば、生まれた時からの付き合いの友人と、その家族。ここで暮らす住人が悪魔関係者なのは確実だろう。

まあ、境内に結界みたいのを張つておきながら無関係とか言われても困つたのであるが。

そうなると、ここに来た経緯は――。

(太一とは通学の時間帯が被つてゐるからなあ。道端で僕の鞄を発見し、悪魔関係者だつた彼は魔力の残滓を追つてあの家へと辿り着く。そして二次災害を避ける為に異界前で待機していたら、僕達が帰還してきたのだつた――)

そんなところだろうか。その後はピクシーが事情説明でもしてこうなつた、と。 目を覚ました当初に抱いていた警戒心は、既に霧散していた。

この家族なら信頼できる。そう確信できた。

今まで培つてきた十年以上の思い出が、彼らを疑うことを拒絶したからだ。

まあその願望は、恐らく間違つてはいない。

過去、裏事情を聴きに突撃しなかつたのは、大人の事情を考慮して、迷惑を掛けない為に自重していただけでもあるし。

普段の様子が擬態で、その精神は悪魔よりも悪魔らしいとかだつたら渚はもう極度の人間不信になるしかなくなる。

渚の覚醒に気が付いたのか、遠くで人間が立ち上がる衣擦れと床が軋む音。 続いて襖を開く音が聞こえ、廊下を歩いてこちらに向かつてくる足音が二つ。

その二人の後を追うように続く、宙に浮いたピクシーの気配。

ピクシーが渚の覚醒に気付いて二人に知らせたか、それともこの部屋に何らかの仕掛けがあつたか。

確実に前者だろう。魔眼で見渡しても気付けない術というのはちょっと考えられない。

(僕も立つか……？　いや、あつちから来てくれるなら待とう)

見知った三人の接近を人並み外れた感覚で知覚して、渚は腰を上げかけたが、すぐに座り直した。

話ならばどこでもできるし、病み上がりに無理をさせる人達でもない。事実として体調が悪いのだし、言われたときに移動すればそれで済む話なのだから。

板張りの廊下を歩く音が徐々に近づき、渚がいる部屋の前でびたりと止まる。一瞬の間の後、目の前の襖が静かに開け放たれた。



「渚さん、色々と言いたいことはありますが……、元気そうで何よりです」

「あ、ありがとうございます、巴さん」

斜向かいに正座した女性、信楽巴（太一の母親）が、渚の体調を気遣つてくる。

それに慌てて正座し直した渚が対応するが、その笑顔は引き攣つっていた。

四〇代とは思えない若作りの、厳格そうな女性。

普段は若干の息苦しさを感じさせつつも、心地よい緊張感を与えてくれるその厳かな雰囲気が、今は一段と重苦しく感じられる。

——怒つてる時の雰囲気だ。

開け放たれた襖から巴が入つて来た時から、渚は一瞬にして悟つていた。  
小さい頃はやんちやして、散々叱られていたから分かる。これは、彼女が本気で怒つている時のオーラである。

背筋を凍らせるように冷たい怒氣が、目を合わせるたびに感じられて、渚は視線を彷徨わせながら身を縮めていた。

（昔、おばさんって呼んだ時に一瞬感じたモノと同等、いやそれ以上だ！）

経験からして、無知のまま叱られれば大変なことになる。

そう思い立ち、まずは何に対しても怒つていているのかを知ろうと、巴の隣に正座する太一に目配せしてみれば。

巴の説教がトラウマにすらなっている我が唯一の友は、すっかり萎縮してしまつており役に立ちそうにない。

絶体絶命。その四文字が脳裏を過る。

しかし、救いは意外なところから訪れた。

「三日は起きないと思つていた。ビックリ」

渚の膝の上にちよこんと座つていたピクシーが、渚の顔を仰ぎ見ながら口を開いた。  
人間の顔よりちよつと大きい程度の身長と、人形のような可愛らしさに、背中から生えた妖精の羽。

明るいところで見ると、その天使っぷりが明らかになる。

「……そんなんに酷い状態だつたの？」

「ああ、疲労骨折やら筋断裂やらで酷い事になつてたし、発熱も酷かつた。脳に至つては五〇度くらいあつたんじやね？」

膝上の天使に問いかけてみれば、返答は太一からやつてきた。

それは死んでるんじやないんですかねえ……。そう思つて視線を巡らせてみれば、全員異論は無さそうな感じである。

ピクシーは太一に不満げな視線を送つているが、これは台詞を取られたとかそんな方向の不満だろう。

「僕、よくそれで生きてたね？」

「わたしが治したから、当たり前」

どやつとしつつも、物欲しそうなこの感じ。

——渚の頭に電流走る。

直感に従い、恐る恐る手を伸ばして薄紫の髪を撫でてみれば、ピクシーはされるがまま、渚の感覺が正しければ嬉しそうにしているのが感じられる。

どうやらこの対応は正解だつたようだ。

「そつか、ありがとう。ピクシーの回復は凄いよ。一日も経たずに完治してゐんだから」「もちろんわたしは凄い。でも、あの状態で死ななかつたナギサの方がもつと凄い」

頭を撫でられたピクシーが、上機嫌に教えてくれる。

なんでも、デイアで治つたとはいへ、体力の回復に一週間はかかるとは思つていたらしく。生命力は悪魔並みのこと。

やけに懐いてくれたピクシーに、だんだんと遠慮が無くなり、撫でる手つきから強張りが抜け始めた頃。

二人の会話が止まつたところを見計らい、ごほん、と咳払いの音。

誰から発されたのかを察知して、ピクシーに向けていた穏やかな笑みのまま、石のように固まつた渚。

楽しいからつて頭から抜けていた。いや、辛い現実から目を逸らしていたのか。

「楽しそうな所申し訳ありませんが。渚さん、お話があります」

「——はい。申し訳ありません、どうぞ」

ピクシーを膝から退かし、巴に向き直つて姿勢を正す。

脇下を抱えられて強制退去されたピクシーは不満げであるが、今は構つていられな  
い。

「そこの妖精さんから話を聞きました。大変だったようですね」

「……はい」

どこまで聞いたのだろう。真つ先に疑問に思つたのはその事だつた。

ピクシーの主觀で語られたものなら、それ程大した情報ではないだろう。  
もしかしたら、能力の情報なんかは意図的に伏せていいかもれない。

しかし召喚アプリ使用、リリム撃破などの事実は伝わつたはずだ。

その上で、自分に一体どんな評価が下されたのか、いささか興味が沸いた。

「その魔眼は、いつから?」

——不意を突かれた気分。

いきなりの直球。なんだか今日はこういった交渉ばかりしている気がする。

真つ直ぐに見据えられる瞳から感じる圧力は、嘘偽りを許さないと暗に告げている。  
少し考えて、この会話の方針を決めてから口を開く。

「……生まれた頃から。少なくとも……物心ついていた頃には、既に」

「それを口外しなかつた理由は？　また、それを思い至つた時期は？」

能力の詳細を伏せることができれば、それ以外はどうでもいい。

能力の発現した時期やその時の思考なんか、巴の心証を悪くしてまで隠し通す事でもない。

そう渚は決断していた。

「それも同時期です。……見えてはいけないものだと理解できましたから」

「……異界ではその力を随分派手に使つたようですが、その副作用は？」

その返答で、巴の表情に一瞬だけ陰が見えたのを、渚は見逃さなかった。

しかしその理由がなんなのか、皆目見当がつかず、思案も及ばない。

「ありません。しいて言うなら頭がちょっと痛むぐらいです」

「そう、ですか……」

だから、その決定的な言葉を言つてしまふ。

それを受けて、目の前の女性は疲れたように肩を落とした。

先程までの刺々しい雰囲気が嘘のように、弱々しく萎れてしまい、鬱オーラが漂つて

くるほどの、どんよりとした雰囲気が発せられる。

何かまずいことを言つてしまつたのかと驚いた渚は、とりあえず太一にアイコンタクト。

俺が知るか、とばかりに首を横に振られる。

諦めずに瞳を潤ませて繰るように見続けても、結果は変わらず。

一縷の望みをかけて視線を滑らせば、拗ねていたピクシーは、その空氣から逃れるよう何処ぞに消えていた。

「」

後詰は存在しない。

その事を悟った渚は、意を決して直接本人に訪ねることにした。

「あの、巴さん？」

「……将来を悲観していました」

コントのようなことをしている間に大分回復していたのか、確かな受け答え。

しかしその姿から受ける印象は、未だに弱々しい。

「？ 僕のですか？」

「……はい、あなたのような才能ある若者には、危険にかかることなく学業に専念してほしいと考えしました。

いえ、それは今も同じ考えです。ですが、今のヤタガラスは才能ある人材の勧誘に積極的です」

「うん？ これは——」。

「組織人として、あなたほどの才能の持ち主を、上に報告しないわけにはいきません……。」

「そうなれば、硬軟織り交ぜて勧誘されることになるでしょう。そして、微かな鍊兵の後、戦場へ。」

「その未来は……」

「その言葉の先を想像したのか、巴はハンカチを取り出すと目元を抑えた。

平穏にぬくぬくと浸かっていた外で、世界は予想以上に追い詰められていたようだ。

第二次世界大戦の末期、学徒出陣あたりを髪髪とさせる。

「……そこまで酷いんですか？」

「五四万七〇〇〇人と、二万九〇〇〇人」

「？」

「日本での怪異による一般人の死亡数と、悪魔との戦闘による異能者の死亡数です」

「ふあ!?」

目を赤くした巴に告げられた言葉に、渚は驚愕を禁じ得なかつた。

「我が子にも似た存在に、きちんととした真実を伝えようという使命感でも働いたのか、

その語氣は戻りつつある。

確かに昨年の死者数は一五〇万人ほどだつたはず。

その三分の一以上が、悪魔関係で失った命——。

それに戦闘員の三万人の犠牲つて所が多いのか少ないのかよくわからない。ニュースにならない程の小規模戦闘を繰り返しての数ならば多いと言えるかもしないが、戦争だつたら少ないと言える人数だ。

できればその内訳……。せめて人類と悪魔のキルレシオは知りたいところ。「これは昨年の数字で、毎年更新を続けています。今年は、一〇月上旬の現在で既に昨年の数字を大きく超えています」

「ぐくり。無意識の内につばを飲み下した音が、嫌に大きく聞こえた。二人の親子の真剣な態度は、とても嘘をついているとは思えない。

「あなたが生まれた頃は、この五〇〇分の一以下の被害でした」

「悪魔召喚プログラム……でしたつけ？ やっぱりそれが原因ですか？」

「やはり、聰い子ですね。想像通り、三年ほど前から全世界でばら撒かれてる召喚アプ  
リが、全ての元凶です」

よく似た世界観で似たような状況を、ゲームではあるが知っているのだ。  
だからその原因に思い至るのは簡単だつた。

ステイブンやアルコル、直哉のような人間がばら撒いたのだと信じたい。  
それほどまでに世界の現状は破滅的に思えた。

「犯人は……というか、対策は？ ネット感染なら、比較的楽に対応可能なのでは？ 最悪ネットを使わなければ済む話なのに、ネットを廃止する話なんて聞いたことが無いんですけど」

「感染経路はネットではありません。ネットに一度も接続されていないものは元より、電子端末が工場で生産された時には既に、召喚アプリに感染しているとの報告があります」

咄嗟に思い付いた逃げ道は、やはり行き止まりだつた。

『全世界規模でばら撒き』『生産された時点で感染』『正確な感染経路すら不明』

とても人間業とは思えない。

裏社会では表の技術よりも数世代進んでいる。巴の深刻な表情を見る限り、そんな可能性は限りなく低いと予想される。

となると黒幕は——。

「そんなこと、人類には——」

「不可能でしよう。ですから、恐らく犯人は悪魔。それも、知恵の神とも呼ばれるほどに頭の冴える」

想像以上に世界はまずいことになつていたらしい。

同じ悪魔のピクシーなら、何か知つてているのでは。

そんな考えが頭を過り、ピクシーがいた場所に視線を向けて、すぐに自分で否定する。各々が好き勝手にやつてゐる様な悪魔たちが知つてゐるとは思えないし、ピクシーなんかサマナーという言葉すらよく知らなかつた様子だつた。

そんな彼女が真実を知つてゐる訳がない。あまりの事実に混乱してゐたようだ。

「末端の悪魔は、何も知りませんよ」

「で、ですよね」

渚の挙動不審な態度から、その内心を見抜いた回答が告げられる。

考えればすぐにわかることを言い当てられた氣恥ずかしさに、熱で薄紅に染まつていた渚の顔が更に赤みを増した。

その熱を自覚して、なんだか余計に恥ずかしくなつた渚は、隠れるように俯いて思考に没頭する。

規格外だつた悪魔の力と、想像以上に弱者だつた人間の力を照らし合わせて、その戦場を妄想してみる。

ガシツボカツ人間は死んだ。

脳裏に浮かんだ光景は、人間側が悪魔に鎧袖一触されるものだつた。

異能者がどの程度の力量を持つのかは知らないが、基本的な性能で悪魔は人類を圧倒している。その戦場は過酷な物だらう。

渚のように、悪魔と一緒に戦えれば——。

——COMPの存在を思い出して、再びシミュレート。

渚はがばつと顔を上げた。

俯いて膝を眺めている場合じゃない。

自分の思考が至った結論に、得も言われぬ恐怖を感じながら、それでも確信を得ようと口を開く。

「……！ もしかして、実動部隊は召喚アプリの使用を？」

「ええ。遺憾なことですが、そうしなければ今頃、悪魔の物量と質に押し負けていたでしょうから」

やつぱりそうなつていたか。だがそうなると——。

「召喚アプリを使用せずに、悪魔と生身で契約するというのは、不可能なんですか？」

「もちろん可能です。しかし、そこまでの域に至るには数十年の研鑽が必要となります。そこまでいかずとも、自身より遥かに劣る雑霊を使役する事すら、数か月から数年もかかります」

自分の中では分かりきつていた事を質問して、予想通りの回答を受け取る。

僅かな希望も断ち切られて、渚は自身が下した最悪の予想を口にする。

「そんな悠長なことをしていたら、黒幕が隠し玉を使うよりも先に人類が終了してしま

う、というわけですか」

「……本当に、聰い子ですね」

肯定するでも否定するでもなく、巴は誇らしいような、憐憫するような、そんな複雑な眼差しで渚を見つめた。

その眼差しで、聰い子と称された渚は理解できてしまった。

人類は既に詰んでいる。

何故なら。

黒幕がその気なら、全世界の電子端末が召喚アプリに感染した時点で強制的に暴走させれば、それだけで全てに片が付いてしまつっていたからだ。

それをしないのは、遊んでいるのか、時期を見計らっているのか。

強制的な暴走など不可能。もしくはそれ以外に何らかの目的がある。——そんな可能性は限りなく低い。

技術的に不可能ならば、そもそもがこんな大規模にばら撒けるとは思えない。

人類に協力的なのであれば、召喚アプリの説明が悪意に満ちすぎていた。

——人類への協力以外に何か目的があつたとしても、人類を顧みない時点での最悪の状況に変わりは無かつた。

「数日中に組織から連絡があるはずです。……心しておきなさい」

それは見方を変えれば、死刑宣告のように感じられたかもしれない。巴から絞り出されたその言葉に、渚は神妙な顔をして頷いた。



重苦しい静寂は、一二時を知らせる鐘の音が遠くから聞こえてきたことで破られた。居間に設置してあるアンティイーク調の時計の仕業である。

それを耳にした巴は、昼食を作つてくると太一と渚を置いて部屋を出て行つてしまつた。

「なあ……お袋のこと、嫌いにならないでやつてくれ」

「？」

閉じられた襖をなんとはなしに眺めていた所、俯いて置物となつていた太一が、深刻な表情をして口を開いた。

「俺に才能があつて、渚にはもつと才能があるつて、ずっと前から分かつてたみたいなんだ」

「へえ」

興味なさげな口調とは裏腹に、渚は内心で驚いていたが、同時に納得もしていた。

幼少の頃から転生者特有の鬼才っぷりを發揮しつつも、何のリアクションも無かつたのはそのためか、と。

恐らく巴の考えでは、その才能を銃後で發揮してほしいと考えていたのだろう。そしてその頃は上方針とも合致していたと思われる。

「俺も最近になつて、悪魔の被害と自分の才能を教えられて……。そんな非常事態なら、俺も戦うつて言つたんだ。でもお袋たちは、危険なことは大人が何とかするから、俺達子供は勉学に集中して、次代を担えつてさ……」

「……」

その時のことと思い出して感情が高ぶるのか、震えた口から絞り出される言葉。

親しい友人である太一の、内心の吐露。

それに共感できない自分に、渚は内心で溜息をついた。

前世ではこんなに薄情では無かつた記憶があるが、転生して他と隔絶した性能を持つて生まれてしまつた所為か、どこか傲慢に育つてしまつたのだ。

それを自覚していながら、本気で矯正する気が起きないのも厄介な所である。

「あのお袋たちが、持論を曲げてまで言つた事なんだ。……きっと、今の状況は俺達には想像もつかないほど悪いんだと思う。

だからさ、その……。お袋たちを、嫌いにならないでやつてくれ」

お袋“達”つて誰のことなのかよく分からぬが、文脈から察するに亮二さん（太一の父親）やその同僚だろうか。

確かにひねくれた視点で見れば、大人たちが責任を果たさず、子供たちに負担を丸投げしたように見えるかもしれない。

だがそれがどうしたというのか。

ツケに出来るのならツケにする。先送りに出来れば先送りにする。

それが社会というものだろう。

ツケや、先送りにされて肥大化した問題を清算するのが、たまたま渚たちの世代だつたというだけで。

「もちろん。他意は全くないよ」

「そうか、よかつた……」

分かつた風に領いて、安堵される。

騙しているようで気が引けるが、仕方ない。これも関係を維持する為には必要な事なのだから。

「そういえばこれから先、僕がどうなるか知つてる？なんか鍊兵はしてくれるらしいけど」

布団に横になり、枕に頭を乗つけて問い合わせる。

ずっと正座なんてやってられない。

太一も同じ思考だつたのか、渚のだらけた態度を見て、気が抜けたように姿勢を崩した。

悪魔関係の詳しい話を聞くことも考えたが、そういう知識は昼食の時にでも巴に聞いた方が良いだろう。

聞いた限りでは太一も初心者、あまり当てになるとは思えない。

「あー、話によると“そういう”訓練所に行かされるらしいぞ」

「へー、どんな場所でどれくらいの期間？」

「俺が知る訳ないだろ」

「だよね」

思つた通り役に立たなかつた。

「……そうなると、遂に君ともお別れかあ。なんだかそう思うと寂しくなるね」

寂寥感に駆られて口から突いて出た。

その訓練所とやらが地元だつたとしても、配属先まで地元になるとは思えない。

当然、この得難い友人とも離れ離れになつてしまふのだろう。

「んな大袈裟な。というか俺もその訓練所とやらに行くつもりなんだけどな」

「……マジ？」

「まじまじ。言つたろ？ 僕にも才能があつたようだつて。お袋にはまだ言つてないけど、お前を行かせるつもりなら俺も行けるだろ」

その返答は渚を啞然とさせるものだった。

男氣溢れる言葉には感動させられたが、それより驚愕させられたものがある。

——才能つて、戦闘の才能だつたの？

太一には才能があるという。……これで？

世界に満ちる惰弱な人間と比べれば、多少は存在感大きい気がするが、それだけだ。当たらない。

「……マジ？」

自身とは比べ物にならない程に萎びた才能。

今日見た悪魔で最弱の存在でも、太一が倒せるとはとても思えなかつた。

(これで才能がある……うごご。お、親の聾貁目か何かかな？)

厳格な太一の両親に限つてそんな訳がない。

後日、才能ある人間が集められたという訓練所にて、渚は己が人類の層の厚さを見誤つていたことに気が付くのであつた。

## 7. 才能の壁

長野どこかの山の中。人里離れたその場所に、ぼつんと存在する全寮制の訓練学校。渚が異界に放り込まれたあの日から、数日後。渚と太一はそんな学び舎の生徒となつていた。

これを逃せば次の機会は当分先ということで、慌ただしくもねじ込まれたのだ。

その強引な手段には、渚の才能に驚嘆した上の人間が関わっているとかいないとか。

昔は隠れ里か何かがあつたらしいが、今は歴史を感じさせる木造校舎と、隣に比較的新しい寮が建つてゐる。

最初は不安を覚えたものだが、中に入ればどちらも設備と内装は近代的で、諸々に不便することは無さそうだつた。



「うわあ、本しかない」

「図書室なんだから当たり前だろ？」

「だつて、ウイキで知れる程度のさわりの知識が得られれば良かつたのに……。これ  
じゃそれっぽい書籍の全てに目を通すしかないじやん」

「確かに面倒だが、探し物つて本来そういう物だろ？ 誓めようぜ」

「うー、めんどつちい……」

少女のような少年が本棚に納められた蔵書の数々を目にして嫌そうな顔をして、同年代の少年がそれを軽くたしなめる。

その会話は親しげな雰囲気で行われており、恐らく二人は友人同士なのだろうと推察できる。

インク、カビ、酸化する紙のにおい。

それらが複雑に混ざり合つて独特のにおいを醸し出す図書室にて、声を潜めながら交わされる愚痴のような会話は、渚と太一のものだつた。

渚たちが全寮制の対魔術訓練学校へと入れられて、早くも三日の時が過ぎた。  
初日は体力テストと健康診断が合わさったような行事を経て、なんだか愛国心に訴えかけるようにして色々と現状を説明されて、その日は解散。

翌日から行われている授業では、戦闘の知識、悪魔への対処法など実践的な知識の詰め込みと、後は基礎体力の鍛成など、やってることは兵士の育成である。

下は渚のような未成年から、上は三〇ほどの社会人まで。才能があるからと組織に入

カウトされてきた生徒たちの間では、まるで徴兵だと鬱憤交じりに囁かれている。

ここは短期間で戦力を作り出そうという速成訓練所らしく、授業で教わることは実践的な知識が大半で、歴史的経緯なんかはさわりすら教えてもらえない。

民間にはひた隠しにされている裏の歴史。渚はそれが知りたいというのに。

教官役の人間に質問しても、興味が沸いたら自主学習してくれとの一点張り。教官は不足しているらしく、彼らは傍目から見ても忙しそうなので仕方がないことなのであるが。

というわけで、普通は精根尽き果てる訓練終わりの自由時間、サクッと夕食を済ませて、態々調べものをしに図書室へとやつてきたのである。

検査の結果、単独異界ツアーバイブルーによつて仲魔であるピクシーを上回るレベルになつていたことが判明した渚はともかく、今日もしごかれまくつたというのに渚について来る余力のある太一は、思つた以上に才能はあるらしい。

「で、何が知りたいんだよ？」

「んー、まずは歴史かな？ 悪魔は何時からいるのだとか、人類はそれにどうやつて対抗してきたか。その程度は漠然とでも理解しとかないと、頭脳労働では手足をもがれたままだ」

授業で偶然それっぽい事を教官が口にしたとしても、基礎が無ければ関連付けて記憶

できない為、宙ぶらりんのまま覚えようとしてもすぐに忘れててしまう。

とりあえずは大体の年表を頭の中に作つておかないと何かと不便だ。

しかしパソコンも司書も無い以上、関連していそうな本を片つ端から読まなければいけないことが、あまり勉強好きではない渚を憂鬱にさせていた。

気が進まないとはいっても、本を読まなければ何をしに図書室まで来たのかわからない。渚は本棚から適当に見繕つて椅子に座り、読書を開始する。

『侵略の世界史』『有史以来、悪魔は何をしてきたか?』『世界の歴史がわかる本』『神話時代』『中世ヨーロッパ編』『世界の歴史がわかる本』『ルネツサンス・大航海時代』『近代編』『最新日本史がわかる本(悪魔編)』『表に出せないホントの日本の歴史』『封印された日本史』『神靈の国日本』……などなど。

悪魔・歴史関連コーナーに置いてあつた書籍の数々を、渚は存在の昇華により超絶強化されていた認識能力を駆使して、その中身を高速で目に通していく。

魔眼によつて酷使されている脳みそは、純粹な視界から得た程度の情報量に圧倒されることもない。余裕をもつて内容を理解して記憶する。

そんな作業を始めて五分もかからぬうちに、一冊の本を読み終える。

「……え、もう読んだのか?」

読み終わった本を離れた所において、机の上に積んであつた書籍を手に取ると、目の

前に座っていた太一から疑問と驚きの声が。

それに対し渚は、本から顔を逸らさず瞳を高速で動かしながら「うん」と短く返答する。ページが捲られる音が、秒針のような間隔で鳴らされていた。

「……」

数秒の沈黙。その尋常ではない光景を見て、渚が本当に速読をできていると悟ったのだろう。

我に返つた太一は軽く苦笑いを浮かべ、手元の本に目を落として自分のペースで読書を再開した。

この規格外の友人と張り合うことの愚かさは、長年の付き合いで熟知していたからだ。

太一が手元の本を読破する頃、渚は本棚と机の間を三回ほど往復していた。



有史以前、古の時代から、悪魔はマグネットを求めて人間界へとやつてくる。

人類が原始人の時代から悪魔に襲われて、性能で大きく劣る人間が種を存続できている理由は、様々な要素が複雑に絡み合った結果である。

人間界の魔力濃度、その関係でこちらに渡れる悪魔のレベル制限、悪魔同士の諍い、人類の可能性。

神のお蔭。環境に恵まれた結果。人類の底力の勝利。悪魔が馬鹿だつただけ。

著者によつて見解の違うそれらを自分なりに咀嚼すれば、『どれか一つでも欠ければ今は無かつただろう』と渚はそんな結論に至つていた。

「しかし……メシア教が本当に、人類にとつての救世<sup>メシア</sup><sub>主</sub>だつたのにはびっくりだよ」

「んん、確かに。あいつ等つてただの宗教キチガイじやなかつたんだな」

読書は適当な所で切り上げて、一人で得た情報を共有し終わつた少しあと、渚は思い出したようにそう言つた。

その驚愕は前世の知識から来るモノの為、本当の意味での共感は難しいだろう。しかしそれでも口にせざにはいられなかつた。

キリスト教から分派して、並み居る宗教の数々をぶつ瀆し、唯一無二の世界宗教に君臨していたメシア教会が！

世界史の授業では、どんだけ汚い手段を使つたんだと内心で思つていた出来事が、捏造だと思つていた逸話の数々が本物——むしろ控えめにされていたなんて。

人類は過去、神を自称する悪魔達により、宗教を使つて家畜化されかかつており、その軛から脱せたのは救世主<sup>メシア</sup>と呼ばれるメシア教祖の功績が大らしい。

今は亡き旧宗教群の数々が渚の持つていた口ウ陣営のイメージに近く、メシア教団はそれに反逆する勇士たちの集まりだつたそうだ。

裏事情を知らない一般人はドン引きして、事情を知つてているのだろう幹部達が狂信的になる訳である。

悪魔や異能が秘匿されていた理由は、まあ簡単に言えば、メシア教団の活躍により、策源地（信者）を失つた悪魔達の脅威が薄くなり、相対的に同じ人間の脅威が増したからだろう。

種の危機に対して一丸となつて戦つっていた時代が終わり、地球上から悪魔勢力を驅逐して仮初の平和が齎されると、やつぱり不届きな連中は出てくるわけである。

特に平和ボケした異能者は黙し難く、悪魔のように弱者を食い物にする思考が彼らに流行り始め、ガイア教団が結成されたのが大きな原因らしい。

そういうわけで国が管理できない異能者の存在を嫌い、また戦力を維持する必要性が無くなつたため、軍縮するかのように情報の秘匿を開始したのである。

知らない事には手の出しようがない。

権力者の思惑も介在したのであろうが、その時代ではベストな選択だつたと思われるる。

「……まあ予想していた通りだつたね」

両手で頬杖をつき若干前のめりになつてゐる渚が、暗くなつた窓の外を眺めながら言う。

その予想を聞かされていなかつた太一は、渚がその予想に自信を持つていなかつたであろうことを察したが、生暖かい視線を向けるだけで特に何も言わなかつた。

二人が時折発する音以外は静寂に包まれる図書室に、カツカツと、廊下から一人分の足音が響いてきた。

それはだんだんと大きくなり、やがて図書室に到達し、引き戸を開けて教官が中に入つてきた。

「自主学習か？ 感心だな。だがそろそろ門限が近い。適當なところで切り上げるよう

に」

強者の風格を漂わせる男は渚たちの姿を認めるに、そう言つて返答も聞かずに去つて行つた。

來た方の廊下を通らずに足音が去つていくのを聞くに、恐らく見回りにでも來ていたのだろう。

「……あー、ビビつた」

「くふつ、今の太一は巴さんに叱られてる時みたいだつたよ？」

足音が聞こえなくなつたのを確認して、無意識の内に姿勢を正していく太一がほつと

息をついた。

渚も異界を経ずにここへ来ていたら似たような反応をしていただろうが、それでも太一のビビりように笑ってしまう。

教官たちは今の渚と同レベル程度とはいえ、彼らは人心掌握のためか威圧的になつており、生徒たちも否応なく格の違いが知れて恐縮してしまったのだ。

「なんか身構えちゃうんだからしようがないだろ!?」

「ごめんごめん、なんだか警戒の仕方が小動物みたいでおかしくて、思わず」

馬鹿にされたと微妙に声を荒げた太一に対し、渚はあくまでマイペースを崩さない。

その常と変らぬ様子を見て、こういう奴だつたと毒気を抜かれた太一。

そしてある事に気が付いて、呻きながら机に突つ伏した。

渚の表情から含み笑いを読み取つて、またしても遊ばれてしまつたと自己嫌悪しているのだ。

「さて、今日はもう帰ろうか。……ぐずぐずしてると、怖い怖い教官様がお怒りになるやもしそれませぬ」

「……ああ、そうだな」

人をくつたような態度も、渚がやると不思議と不快ではない。

冗談めかした言葉はスルーして、太一は椅子から立ち上がった。



単純計算で、約三（倍）。

その数字は悪魔召喚師の平均使役数であり、同レベルの悪魔召喚師と異能者が争つた場合の戦闘力の差でもある。

自身より格下とはいえ悪魔を複数使役できるデビルサマナーは単体で、異能者で構成された小集団と拮抗するだけの戦力を誇るのだ。

才能があつたとしても、厳しい鍛練をその身に課し続けなければ開花させられなかつたそれが、今や何処にでも存在するC O M Pがあれば簡単に悪魔召喚師になれる。

そんな便利な代物、利用されないわけがなかつた。

しかしそれは、どこの誰が開発したのかも分からぬ、得体のしれないモノもある。信頼性など皆無なのであるが、これを大々的に活用していなければ、今頃地上は悪魔の支配する世界へと逆行していくだろう。

つて何冊かの本で似たような記述を見た。

一応C O M Pの仕組みを解析しようと試みられているようだが、昨今の世界情勢を鑑

みるにその成果は芳しくない模様。

しかも最新の研究成果の資料など、こんな辺鄙な場所にあるわけがなく、COMPについて渚が知りえた事柄は少ない。

悪魔はデータ化して持ち歩いているらしい。

その技術を応用しているのか、生身だと貯蓄できる量にも限度がある生体マグネットを無制限に保存可能。

ピクシーにCOMPの中にいる時の話を聞くと、そこには小さな異界のようなものが形成されており、渚のマグで満たされているとのこと。

悪魔やマグ以外の物でも取り込めそうなものであるが、恐らくその機能は作成者によつて意図的にオミットされているのだろう。

分かつたことはこの程度。

知れば知るほどそのオーパツツつぶりが明らかになる。

製作者の意図が不明という程度の曖昧な危険性で、見なかつたことにしてするというは人類にとつて誘惑が多すぎたのだろう。

才能ある者達を放つておけば、悪魔の餌になつてしまふかもしれない。

かといつて素人を集めた所で、彼らに命令を強制させられるだけの力がなければ、敵に塩を送るだけ。

理想は、悪魔召喚師を大量生産し、最前線では悪魔対悪魔という構図を作る事。

そんな構想を胸にして、各国の悪魔対策機関ではデビルサマナーをより早く、強力に仕上げようと、効率的な訓練プログラムを作成していた。

——仮にこの場を凌いで平和が到来しようとも。

後世にて狂氣の沙汰と非難されること請け合いな計画を。



入学より約一ヶ月後。

土や草木が朝霧に濡れる早朝、渚は教官たちに呼び出されていた。

木々に囲まれ、公舎や校庭からは死角になつている広場のような空間。

皆が何やら作業をしている傍らで、渚は呼び出された理由を説明させていた。

「——以上が概略だ。何か質問は？」

「えっと……」

渚は教官から聞かされた説明を、再度頭の中で振り返った。

生徒を、学校側が用意した使役悪魔と戦わせてレベルアップさせる。

簡単に言えば、今回の目的はそれだ。

問題は効率を求めすぎているのか、所々に無理に感じられることだろうか。

悪魔は存在を維持できなくなれば、魔力となつて霧散する。それら浴びて身体に蓄積させるとステータスが向上し、やがて蓄積された魔力をエネルギーに、魂が昇華して存在の格が上がる。

つまりレベルアップだ。

そして魔力の吸収効率はその時の状態によつて決まる。

生存本能が刺激されれば性欲が高まるように、悪魔と死闘を繰り広げた直後は吸収率が大幅に高まるのだ。

しかし一度に吸収できる限界は決まっており、その消化にかかる時間も変わらない様で、その辺が才能の有る無しに関わつてくるらしい。

つまり魔力をより多く蓄積し、より速く昇華できる者が天才と呼ばれるようだ。

そういうた観点から見ると、渚は本当に異常の塊だったのだと分かる。

平穀な生活を送つていたら、一生レベルアップする機会もないだろう人間界の魔力密度で、たかが十数年生きただけで昇華に必要な魔力を得て。

顕現上限レベルが十程度の魔力密度の異界で、とてつもない淘汰圧力に晒されたといえ短時間で悪魔と戦えるだけの存在の格を得て。

遥か格上の悪魔を倒したら、普通だつたら二つ三つ格が上がる程度で落ち着くところ

を、その存在に若干劣る程度の力を身に付ける。

それを渚から聞かされた時の相手の反応。

図書室で知識を蓄えて、無知から脱出して理解したことがある。ゲームに登場するような人間はあまりいない。いたとしても、そういう者は悪魔に近い存在と恐れられるようだ。

閑話休題。

この日の為に雑魚悪魔を大量に使役していたサマナーが、生徒たちと一対一で悪魔と戦わせるのだ。

効率の良いレベルアップの環境を意図的に設備しての、一種のパワーレベリングである。

悪魔と、覚醒前の人間で勝負になるように、悪魔側にはデバフを掛けまくり、人間側にはバフを掛けまくり。

回復準備も万端で、中にはリカーム持ちすら存在し、いざとなつたら割つて入るために死傷者は“基本的”に出てこない。

ちなみに渚は、パワーレベリングなんてお前には必要ないよな、ということでの救護・補助班に回された。

今回の呼び出しの目的である。

ピクシーがディアとラクンダを使えるし、渚もピクシーから習つてディアを覚えたから、確かに仕事はこなせるだろう。

銃の訓練まで受けておきながら、今回の戦闘では特殊加工を受けたナイフ一本しか支給されないようであるが、それでもこんな至り尽くせりな状態なら、負ける方が難しい。しかしそれは、最早一般人とは口が裂けても言えないような渚の感想であつて、渚が想像するより遙かに惰弱な存在たちは怖気づくのではないだろうか。

「ちょっと鍛えたとはい、殆ど一般人の彼らが悪魔と戦うでしようか？ 大半が逃げるような気がしてならないんですが」

一番の問題はそれだ。

勝てる勝てない以前に、一般人に毛の生えたような奴らでは、戦いから逃げる可能性が高いように思えてならない。

厳しそうな日々の訓練から逃げ出さない以上、各々はそれなりに覚悟を決めているのだろうが、少なくとも渚の目を惹くような気概を胸にする者はいなかつた。

精々が国や家族を守りたいという願望と、辛い訓練を乗り越えてきたという自負で積み上げられた、吹けば飛ぶような意志だろう。

そんな彼らがいきなり悪魔と戦えと言われても氣後れするだろうし、実際に相対したら格の違いを理解して逃げ腰になるに決まっている。

退路が用意されている状態で、恐怖に抗つて力を求められる者がどれくらいいるのか、想像もできない。

渚の疑問に、男は答える。

「心配はない。あれを使う」

「……あれは？」

教官は、今も作業中の者達を無表情に見やり、ある軍用箱を指差した。

蓋は閉じられており、中の様子は窺えないが、まさか弾薬という訳でもあるまい。

恐怖心を和らげる効果を持つ市販品と考えれば、酒や煙草なんかが入っているのだろうか。

まさか現代の政府機関で麻薬を服用させるとは思えないが、嫌な予感は拭えない。

「覚醒剤のようなものだ。服用者の恐怖心を薄れさせ、闘争性を激化させる」

(うわあ)

無表情で淡々と言葉を並べた教官に、渚は苦い顔になるのを抑えられなかつた。

正直予想していた通りだつたとはい、眞実を告げられると若干へこむ。

とはいえ麻薬というものは、副作用さえ考えなければ利点だらけなのもまた事実。

意見を押し流せるような対抗手段を編み出したのだろう、多分。

すぐに思い浮かぶのは、キュアボディの使用と依存性の低い薬の開発か。  
とりあえず聞いてみる。

「副作用は？」

「数日間、軽度の中毐症状に悩まされるだけだ。常用しなければ人体に深刻な影響はない。仮に依存症になつたとしても、魔法で即時治癒が可能だ」

「……なるほど」

無感情に説明する教官の姿に違和感を持つて、渚の目が若干細められた。

その言葉を信じ込んで、自身の心の安寧を図つている。

教官の態度の違和感の正体を、渚の直感はそう解釈した。

それは無知から来る恐怖なのか、有識から来る恐怖なのか。渚には判断できなかつた  
が。

「ちなみに、教官はそれを服用した経験は？」

分からることは直接聞くに限る。

この質問的回答で、教官の内心も見えてくるだろう。

無知ゆえに原理を知らず、麻薬という先入観から嫌悪を抱いて、それを服用させることに厭然としないものを感じているのか。

有能ゆえに原理を知つて、その危険性を理解してしまつたのか。

……まあ、そこまで頭が良さそうには見えないのだが。

「悪魔との戦闘の度に支給されるからな。私と知り合いも大分摂取しているが、健康に被害はない」

「へー、なら大丈夫そうですね」

微かな変化も見逃さないと、気取られないよう神経を総動員させていたが、特に引っかかるものも無く拍子抜けする。

どうやらこの男は、覚醒剤という語感から漠然した不安を感じていただけのようだ。

心配して損をした。

ぱんぱんと、拍手のような音が後方から聞こえ、渚は振り返る。

「そろそろ始めるぞ！ 配置に着け！」

手を打ち鳴らして周囲の注意を惹いた責任者っぽい男が、広場の中心辺りに進み出でそう言つた。

その後ろには緊張し、所在なきに辺りを見回している生徒が一人。

(生徒といつても大人なんだけどね)

今の今まで会話をしていた教官に目礼して、説明された通りに仲魔を召喚すると、渚はピクシーを引き連れて救助・補助班とやらの所へ向かう。

(太一は大丈夫かなあ？ 怪我しないといいんだけど)

あちこちで悪魔が召喚されて、視界に入る光景が一気にファンタジーっぽく変化する。

それが一旦落ち着くと、今度はバフやデバフを意味する呪いや祝福が飛び交った。経験値として用意された悪魔に対し、やっぱり腰が引けてしまった生徒に、教官が件の箱から取り出した注射を打つのを眺めながらも、渚が心配するのはそのうち順番が回ってくるだろう友人のことだった。



身体が火照り、下半身の一部に血が滾る。

微睡の中で、太一はそれを心地よさと共に感じていた。  
明かりのついていない、暗い寮の一室。

左側の壁に隣接するように設置された寝台の上で、母の抱擁のような安心感を、自身を包み込む布団から受け取りながら。

がちゃり、ばたん。

寝ている同居人を気遣っているのか、極力音を鳴らさないようにゆっくりと扉が開閉される音。

もう一人の同居人、渚が部屋に帰ってきた。

部屋を覆う闇を不便と感じていなか、眠りを妨げないようにと考えているのか。入つてすぐのところにある照明スイッチを無視して、渚は右側のベットへと腰かけた。

微妙にベットが軋む音。

流石というべきか。一連の行動で、渚は鈴のついていない猫が入つてきた程度の音しか発していない。

しかし覚醒しつつあつた太一にとつて、その気遣いは無意味であつた。

「ん……、うん!？」

薬の効果が残つてゐるのか、神経が過敏氣味となつていた太一の体は、その小さな気配を敏感に察知して、一瞬の内に意識を覚醒させた。

「……夜？ 朝？ 寝過ぎし、え、あれつ!?」

あちこちが負傷していたはずだが痛みは無い。既に治療済みなのだろうか。

直前の記憶は夢のように不鮮明だが、悪魔と戦つていたのは覚えている。少なくとも寝入つた記憶は無い。

混乱しながらも太一は飛び起きかけて、局部がえらいことになつてゐるのに気がついた。

人の存在を感じて、立ち上るのは危険と判断。身をよじり、壁を背にして横にな

る。

かちつという音がすると、天井の照明から光が射した。

「ごめん、起こしちやつたね」

いつの間にか立ち上がり、照明をつけていた渚が軽く謝罪した。

風呂上りなのか、少女のように整った顔は上気して、ショートカットの髪が濡れていった。

首には白いバスタオルがかけられて、ベットの脇には入浴セットが無造作に置かれている。それは太一の推測を補強してくれた。

渚が、濡れた髪を耳にかけた。

(ー!?)

その仕草に色っぽさを感じてしまい、体の一部が反応した。

普段見慣れた幼馴染の、しかも男にも関わらず反応してしまった事に、太一は戦慄していた。

「い、いや、大丈夫だ」

「そつか」

慌てた様子の太一を氣にも留めず、渚は寝台に戻つて今度は寝転がつた。渚が通つた後から風呂上りの、ふんわりとした甘い香りが鼻孔を満たす。

とくん、動悸が増した。

(二、これは流石におかしい。今の俺は絶対普通じゃない。原因は——午後の実習授業か?)

一人一人試験があると聞いて呼び出されれば、ヘンテコな薬を打たれて悪魔と戦わされて。

恐らく自身の異常は、それが原因だろう。思い当たるのはこれしかない。

殺し合いを体験して欲求が増大したところを、更に薬の作用で增幅されている。そんな感じだろうか。

「それにしても運が悪かつたね。太一の呼ばれた順番つて、中盤から後半にかけての一番ケチケチしてた時間帯だつたんだよ?」

「え?」

鏡合わせに向かい合つて、肘枕をした渚が突然、午後の授業の裏事情を話し始めた。

真っ先に呼び出されて帰つてこないと思つていたら、実は教員の手伝いに駆り出されていたのか。

本来は芽吹くのに時間がかかる才能を、促成栽培で無理やりに芽吹かせる。

そんな今回の授業の趣旨ならば、芽吹くどころかつぼみが開きかけている渚には余計なお世話だつたのだろう。

太一が発した疑問の声を、どこをどうケチつたんだ、といった意味に解釈したのだろう渚が補足する。

「ほら、傷を受けても本気で倒れそうになるまで回復されなかつたでしょ？」

「……そうだつた、かも？」

言われて思い返してみれば確かに、これ以上はもう無理だという状態になると、不思議と身体が軽くなつていいた気がする。

その時は必死すぎて気にも留めていなかつたが、今考えればそれが回復なんだろう。渚の補足は続く。

なんでも自分が呼ばれた時間帯は一番ペース配分に気を使つていたらしく、最低限の支援しかされていなかつたらしい。

序盤と終盤の奴らは、それはもう甲斐甲斐しく補助させていたとか。なんて羨ましい。

「ペース配分ぐらい最初から決めとけつて感じだよ！ 今日中に終わらないかもしけないと相談した時の教官の表情つたらもう！」

「そつちはそつちで大変だつたんだな……」

怒つてるような笑つてるようなどつちつかずの声音に、太一は適当に相槌を打つ。気が付いたら渚の愚痴になつっていた。

しばらく相槌を打つてはいるが、ついに話題が尽きたのか渚が静かになる。

やがておもむろに上体を起こした渚が、手から風を生み出して濡れた髪を乾かし始めた。

以前、念動力を極めれば最強になると興奮していたことから、その風は訓練も兼ねて念力で起こしているのだろう。

一円玉をようやく浮かせられるようになつた程度の太一には、とてもそうは思えない。のであるが。

あれが成長したとしても、記憶に新しい悪魔の装甲を抜くには費用対効果が悪すぎる。と感じた。

渚の事だから、そんなことは百も承知なのだろうが、だからこそ解せなかつた。

魔法関係は一朝一夕では覚えられない、カリキュラムから除外されているにもかかわらず、二人が魔法を使用できるのは、渚の仲魔のピクシーに教わつたからだ。

しかし悪魔にとつて魔法など、生まれ持つた機能を当たり前に行使しているに過ぎず、その教え方は感覚的であるで理解できなかつた。

そんな要領を得ない説明を受けて、一度見本を見せてもらつた程度でコツを掴んだ渚は人間やめすぎである。

目が覚めて大分時間が経つたが、太一の肉体の滾りは静まる様子がない。

これは、出すものが出さないと収まらないだろう。

渚からちらちらと送られる、いつまで寝てるんだと言いたげな視線が辛い。

(トイレに……いや、立つたら流石に気づかれる。今は機会を窺おう)

「……今日は乾かしてこなかつたのか? いつも脱衣所のドライヤー使つてんのに」

不審げな視線はスルーして、適当に喋つて誤魔化す事にした。

意図は不純でも疑問は本物。渚も尤もな質問だと感じたのか、目が合わさつた時には含む物は消えていた。

「なんかさかつてる奴が多かつたからさ、今日はいつも以上に居心地が悪かつたんだよね」

「ぶつ!」

太一は思わず吹き出した。

油断が生じた所に、まるで自身を揶揄するような言葉。

不思議そうな渚の表情で、バレてはいないと確信できたが、それでも脈拍が上がるのは抑えられなかつた。

「な、なんでもない。まあ人生初の死闘を経験した後だからな! 生殖本能が滾つてゐるんだろ!」

「ん、それは分かつてゐるんだけど実際に見ると、ね。トイレの個室が占領されてて妙にイ

力臭かつたり、ケツをかばつて歩いてる奴がいたり、やけに親しげに話しかけてくる奴がいたり……。ほんと、僕たちの居ない場所でやつてほしいよね」

「ま、まつたくだな」

トイレ……。本当に勘付かれていなかっ疑うほどに、渚の言葉は恐ろしい。ナチュラルで『分類：発情していない』として渚と一緒にされていたが、実態はどうあれ太一は同意するしかなかつた。

しかし、自分で自分を追いつめてしまつた気がしてならない。

「……そろそろ八時過ぎるけど、お腹すいてないの？　さつさと食堂に行つた方がいいと思うけど」

局所的に発生している風に黒い髪を靡かせながら、渚が言つた。

食堂の利用時間は八時半まで。自身を鎮めてから行くことを考えれば、ぎりぎりの時間だ。

だがその為には、渚の存在が邪魔すぎた。

同性で幼馴染の同居人と割り切つて、むしろ誇示するように歩けば済む話だが、太一はそこまで羞恥心を捨てていない。  
飯抜きを覚悟して——。

「……あつ」

突然、何かを察したかのような声を耳にした。

その発信源に目を向ければ、生暖かい笑みを浮かべた渚の表情が。

「ち、ちが——」

「ごめん、気が利かなかつたね！」

どう見ても察している表情に、太一は咄嗟に弁解しようとして。

分かつていてばかりに満面の笑みの渚に遮られた。

いつも見慣れた、からかう時の笑顔なのに、場違いの感銘を受けてしまつたのは気の迷いである。

「じゃあ僕は、ちょっと散歩に行つてくるよ」

フリーズした太一をよそに、渚は着の身着のままで部屋から出て行つた。

扉の閉まる音を合図に太一は再起動を果たしていくが、渚がにやにやしながら出待ちしている可能性も考えられると、しばらく様子を見ることに。

入り口をジッと見つめながら数十秒。

太一はそつと立ち上がり、忍び足で入口へ。

ノブに手をかけそつと開けて、隙間から首のみを出すようにして左右を見渡した。

廊下には誰もいない。

扉を閉めてほつと一息。

少し視線を下げると、そこには大きなテントが張っていた。

（絶対これを不々にからかわれるな……。くそ、教官たちめ……許すまじ）

内心で罵詈雑言を浴びせながら、今度はため息。

色々と鬱になりながらも、寝台の下からある本を取り出して、太一はベットに腰掛けた。

## 8. 仲魔集め

「——霜月」

「? 何か用でしようか、教官殿」

聞き覚えのある低い声に名を呼ばれて、振り返った渚の高い声が校舎にあたつて残響した。

校庭での訓示が終わり、生徒たちは言われた通りに校舎裏の駐車場へぞろぞろと歩いていた所。

渚はある教官に呼び止められた。

そして呼び止めた張本人は、それつきり黙りこくる。

角刈りの三十台ほどの男性。なんだかこの人には随分と目をかけてもらっているよう気がする。

名前は覚えてないが。

他の生徒たちがこちらにちらちらと視線を向けながらも、声が届かないだろうと判断できるまでに距離が離れた頃。

男は漸く口を開いた。

「今回の実習で、悪魔とは契約できるだけ契約してこい。雑魚にも意外と使い道があるからな」

「……？」

頭上に疑問符を浮かべ、小首を傾げる。

前世の知識から、渚は教官が言わんとしていることを直感していたが、今は知らないふりをしておいた。

悪魔合体の記述など、図書室にあるどの本にも載つていなかつたからだ。

「悪魔同士を合体させて、より上のランクの悪魔を作成可能なのだ。お前もゲームをやつたことがあれば、なんとなく想像はつくだろう？」

「あー、はい、なんとなく。……しかし合体に使われた悪魔はどうなるんですか？」

殆ど予想していた言葉を聞いて、渚は、今まさに合点がいつたかのように手を叩き、納得したように頷いて見せる。

続けてふと思いつき浮かんだかのように、今まで気になっていた悪魔合体での疑問点を聞いてみた。

以前気になつて、悪魔あるピクシーに似たような質問をしたことがあつた。

当たり前というべきか、ピクシーは悪魔合体のことを知らない様で、現実の参考には

ならなかつたが。

しかし例え話として、強くなれる代償に自我が消失するという術法があれば使用するかという渚の問い合わせに対し、ピクシーは躊躇いも無く否定して見せた。

なんでも自我が連續していないと死んだも同然で、強さを得ても意味がないらしい。そして大多数の悪魔の見解も一緒だろうともピクシーは言つた。

その辺の価値観は人間に近いんだと、不思議な感覚を覚えたものだ。  
嫌がる悪魔達を無理やり合体素材にする。

悪魔合体の仕様次第で、渚のアライメントは決まりそうだつた。

「……」

そんな渚の反応を受けて、教官は僅かに沈黙する。

ちよつとわざとらしかつただろうか？ 渚の心中に微かな反省の心が去来したが、その心配は杞憂だつたようだ。

特に深刻そうな様子もなくいつも通りに、教官は言葉を発する。

「素材となつた悪魔の自我は消え去るが、悪魔合体は秘中の秘だ。素材にする奴には適当に強くなれるとでも誤魔化せばいい。——詳しい注意事項は帰つてきてからだ」「了解です」

言いたいことを言い終えて、去つていく教官の背を眺める渚の心中は複雑だつた。

ここ一か月ほどで更に親密になり、最早妹のように思えてきた彼女を悪魔合体の素材にする——

数秒の静寂の後、ふっと息を吐いた。

(——どつちが悪魔なんだか)

渚には、悪魔合体の利便性を捨て去るなんて考えられなかつた。  
誰に向けてか、渚の口元には嘲るような笑みが浮かんでいた。



車内の窓の外を流れる山並みは、秋の寒空の元で薄茶色に侵食されている。

道路脇に設置された灰色の柵や網が高速で流れいくのを、渚は普通乗用車の助手席の窓からぼんやりと眺めていた。

長野から新潟へ。

上信越自動車道を使つて、日本海側へ北上する。

目的地は、新潟県南部で二つの市にまたがつて存在する、陸上自衛隊関山演習場だ。なんでも演習場内のどこかに、ヤタガラスが維持している異界への入り口、通称“ゲート”があるらしい。

恐らく二十四時間体制で監視され、ICBMよろしく砲門やミサイルの照準がそこへ合わせられているのだろう。

最悪の事態が発生しても、人口希薄地帯の周辺に“運悪く”存在していた人間のみの犠牲で済むと。

……演習場内での大事故なんて聞いたことがないから、大丈夫だと思いたい。  
報道規制をされていたのかかもしれないが。

今回の実習の目的は、保護者（教官）同伴で生徒たちが仲魔を手に入れる事である。  
無事に三体以上の悪魔と契約することができれば卒業、そして実戦配備。  
訓練と知識の詰め込みもそこここに、基準を満たせば即出荷。

それを出発前に聞かされて、本当に促成栽培などと、神妙な顔で聞いていた面々も内心では呆れていたことだろう。

参加者は前回の授業で、レベルが基準値を上回つたものから更に選別して。といつても定員割れを起こしているようなので、今複数の車内に乗っている人間はそこここ才能がある方だ。

先行組に追いつく為、先日同様に使役悪魔と戦つて居残り組はご愁傷様である。  
それに比べて今回の渚たちは、旅行気分でもよさそうだ。

授業で使つている悪魔は、これから行く異界から調達してきているのだろうし、教官

たちにも気負った感じはあまりしない。

それから推察するに、かなり安全なのだろう。  
むしろ疑問なのは、それだけ間引かれながらも、需要を満たすだけの悪魔が存在する事だ。

『なんか気が付いたら増えてる。多分魔界からやつてきてるんじやね？（適當）』  
要約すればそんな感じの学説が主流であるが、本当の悪魔の生態というのはどうなつているのか。

興味は尽きない。



異界。魔界。冥界。幽冥。ダンジョン。迷宮。神域。

地域によつて呼び名は様々であるが、その意味するところは共通している  
すなわち、此の世ならざるモノ。

地獄のような悍ましい空間。迷路のような遺跡。神々しいさすら感じられる大自然。  
異界内の構造は千差万別だ。

そしてそんな異世界への入り口は、今やどこにだろうと開く危険性がある。

その危険性を排除しようと、人間界と異界を繋ぐゲートを日夜破壊している者達が、世界各地の対悪魔機関に所属する人間である。

しかし以外にも、悪魔関係者の異界内に侵入する機会というものは非常に少ない。

なぜなら異界への入り口というものは、別に内部を制圧せざとも破壊可能だからだ。魑魅魍魎が蠢き、大してお宝がある訳でもない空間を、膨大な犠牲の上に攻め落としていいつたい何になるというのか。

少なくとも人類の平均レベルが一〇以上底上げされねば利益が出ない事は確実である。

つまり異界内から出てくる悪魔を駆除しつつ、蜂の巣を探すようにしてゲートを見つけ、沸き潰しをするのが構成員のお仕事なのだ。

異界を閉じる道具は大昔に開発済みであり、素人だろうがヘンテコな骨董品に魔力を注げれば、それだけで孔は消える。

だが仮に、中に人がいる状態でゲートが破壊されると、その人間は出口を失い、永遠に異界で彷徨うことになるのである。

そしてゲートを発見すれば即時破壊が推奨されており、下手に異界内なんかに入つていれば、『出口を破壊されて異界内に閉じ込められる』という事故もあり得るのだ。

実際、情報伝達手段が少なく、入出報告が交錯しがちな昔において、そんな顛末で行

方不明になつた者はかなりの数に上る。

事故で失つたそれらの全てが異界内に突入できるだけの手腕なのだから、それを知らされて育つた者達が、異界に入るのを嫌忌するもの当然のことである。



渚たちの班が侵入した異界内は、前情報通り真つ暗だつた。

辺り一面は砂漠のような荒野が広がり、空はどんよりとした雷雲に包まれ、時折起ころ放電以外はこの異界を照らす物はない。

周囲は岩や段差が多くて見晴らしが悪く、その上視界には闇が満ちている。だが目視できずとも、あちこちに存在する悪魔の気配を渚は感じ取っていた。

「うわ、本気で”異界”なんだなあ……」

一瞬で景色が変わつたことに驚いたのか、少し遅れてやつてきた誰かが思わずといつた感じで呟いた。

その後からやつてくる者たちも、似たような感じで大なり小なり驚いている。

クスリを決めて交渉なんて出来ないと上は常識的な判断を下したのか、変なものは支給されず生徒たちは全員素面だ。

渚を入れて四人。

それが全員揃つたのを見て取つて、誰よりも先に異界入りしていた、助つ人で来たという教官役の女性がおもむろに動き出す。

支給される軍服のような戦闘服に身を包んだ彼女は、如何にもデキる女性士官といった風貌で勇ましい。

「揃いましたね。では行きましょう」

そう言つて歩き始めた教官に置いて行かれまいと、雛鳥のように迫いすがる者達の背を見て、その慌て振りに渚は失笑した。

そして事前の打ち合わせ通り、生徒たちを教官と渚で挟むようにして最後尾につく。周囲には人間達を守護するよう、教官の仲魔が長方形を描くようにして前後で二体ずつ配置されていた。

その力は渚よりも一段格下、レベル五か六といつたところか。

「結局、ついていくことにしたの？」

渚の肩に腰掛けていたピクシーが、その耳元に囁くようにして聞いてくる。

渚は今回の実習について、出来れば団体行動から抜け出して勝手気ままに狩りをしたいとピクシーには言っていたからだろう。

願望を気紛れに口にしたと思えばそんなに疑問に思うようなことでもないが、ピク

シーやくには暴れまくるのを期待してしまっていた分、拍子抜けしてしまい、暇つぶしを兼ねての真意確認といった所か。

しかし団体行動を選択した理由に、ピクシーの気が晴れるほどの深謀遠慮など存在しなかつた。

「普通に許可が出なかつたからね。流石に命令違反は出来ないよ」

「ナギサなら出来る」

「確かにやろうと思えば出来るけど……。僕はカオスじやなくてニュートラルだからね？」決まり事には従順なのさ」

「えー」

何の面白味も無い回答に、ピクシーはいじけたように渚の髪をもてあそび始めた。

「変な事しないでよ?」

「大丈夫」

以前、人の髪で遊ぶピクシーを放置していたら、いつの間にか変な編み込みをされており、その状態を気付かずに過ごして恥をかいた経験から渚は一応釘を刺しておく。

しかしそんなことをせずとも、ここは異界。

ピクシーのうわの空な返事に若干不安を搔き立てられたが、流石に編み込みなんてしている時間はないだろう。

ほら、噂をすればなんとやら。

自身の前方、探知圏内に悪魔の徒党が入つたのを渚はその優れた感覚で知覚した。異界に入つてから数分程度。早くも初遭遇である。

この班のレベル上位三人は、似たような距離でその事を察知していた。先頭の教官と、最後尾の渚。

二人は計つたようなタイミングで同時に足を止めた。

生徒たちも、一步踏み出し困惑しながらも停止する。

勘の良い者はこの時点できが起きたのか察したのか、すぐに戦闘へ移れるように身構えつつも、額には冷や汗を流していた。

「前方から悪魔です。数は四体」

機械音声のように告げられる、教官からの注意喚起。

何が何だかよくわかつていなかつた生徒たちも、その声によつて気が引き締められる。

そして前方の視界を遮つていた岩陰から、不意に動くモノが現れた。

異界内で動くモノなど、悪魔以外にありえない。

闇の中でも、目を凝らせばもう見える距離まで近づいていた。

「まずは見本をお見せします。霜月さん、ついて来て。他の皆さんには流れ弾に注意して

ください」

生徒たちへの発砲許可は無かつた。

新兵に後ろから援護射撃をさせるなど、背後に敵を出現させるようなものだからだろう。

仲魔を手に入れるまでの彼ら彼女らは、基本的には役立たずなのだ。

立ち止まつた時点でスキルの発動準備をしていた教官は、術式に十分な魔力を籠められたのを確認し、ソレを放つた。

——アギ。

闇に包まれた世界が、瞬間的に昼間のような明度を観測する。

教官から放たれた紅蓮の炎は、悪魔集団の戦闘にいたガキらしきものに照準された。

炎弾の弾速は、流石に雷速には到底かなわなかつたが、拳銃弾に匹敵する程度には早かつた。

そして着弾、更なる明滅。

周囲に溶鉱炉が現れたかのような強烈な熱が放たれる。

その被害の標的となつていたガキは何とか直撃は免れていた。

しかし弱点属性だつた火炎に加え、格上からのスキルは余波だけでも十分に疲弊させ

ていた。

「一匹残します。どれがいいですか？」

指示に従い前衛に向かう渚に向かつて、すれ違いざまに横合いの教官から言葉を投げかけられる。

反撃に敵の徒党がスキルを発動させようとしているというのに、その声は冷静そのものだつた。

流石の彼女も、集中砲火されたら生き残れるとは思えないのだが。

まあ何かしら成算はあつたのだろう。

いずれにせよ、渚が存在する以上この場での敗北はありえない。

「地霊コダマで！」

敵の面子を確認し、渚は即答する。

とりあえずは属性攻撃が被らなければなんでもよかつた。

今は熟考している場合などではないからだ。

ピクシーから習つた念動力で飛行の真似事をして速度を上げる。

空を自由に飛び回るどころか、風船のように浮かぶのが精々であるが、それを移動の補助に使えば目に見えて身軽になつた。

盾となるように、渚は教官の前に踊り出る。

そして悪魔達から反撃で放たれた稻妻と衝撃波を、手に持った刀を二回振るつて打ち消した。

(年代物のくせにやるじやん)

以前、木の枝で雷を殺した時とは比べ物にならない感覚に、渚は素直に感心した。

あの時の棒はたつた一度で消し炭となり、電流を通してしまつて渚にもダメージを与えていたというのに、今回はそれらの事象が発生しなかつた。

遠雷に照らされる刀身は傷一つなく、先程の電撃と衝撃波の余波は透明な防楯でもあるかのように、渚にはまるで影響を及ぼさなかつた。

その刀は支給品ではない。

それは戦地に赴く一人息子の役に立つものは無いかと、渚の両親が蔵から引っ張り出してくれた代物だつた。

由来は高祖父の代にまで遡り、彼の遺品である刀は当時の最高級品だ。

魔道具の製作技術はとつくなきつており、こういった一品物の性能は作り手のレベルに依存するらしく、約二世紀前の最高峰の刀鍛冶が製作したそれは現代でも十分通用する。

悪魔に敗れたとしても、異界で果てることは稀なので、遺品回収は本当の戦場と比べれば比較的楽。

その上、才能は遺伝するらしく、年代物を所持している生徒は意外と多かつた。まるでターン性のように教官が再砲撃の準備していると、それを阻止しようと赤い体色が特徴のオバリヨンが突撃してきた。

しかし渚たちの戦力を削ることができず、味方が魔法を放ち終わつた後のタイミングで、援護射撃を望めず手負いのガキも置いてけぼりに突出するのは無謀である。

——轟音と共に、稻妻が閃いた。

渚の仲魔であるピクシーの電撃。

先程のジオに比べて倍ほどの威力がありそうな雷は精確に、回避する間もなくオバリヨンを飲み込んだ。

格が違う相手からの攻撃による弱点属性への攻撃。

哀れオバリヨンは、その一撃のもとに屠られた。

爆発するように肉体を構成していた魔力が撒き散らされる。

光り輝く粒子が宙を舞う光景は、いつ見ても綺麗なものだつた。

それを横目に辺りに漂う膨大な魔力をかすめ取りながら、渚はガキに向かつて一気に距離を詰める。

疾風染みた速度とはいえ、彼我の距離はそこそこあつて、それを詰めるのに一息とはいかなかつた。

余裕をもつて渚の突貫に反応したガキは、必殺を企図した右腕を振るう。

骨と皮だけで構築されたようなガリガリの腕の先には、人間など容易く切り裂きそうな五本の刃が生え揃っていた。

腕と刀が触れ合うその瞬間——血飛沫が上がる。

胴体から切り離されて、くるくると空を舞う物はひょろ長い腕だった。

「ガア——ツ！」

当たり負けた事など物ともせず、刀を振り下ろした状態の渚に向かつて、ガキは残つた左腕を振るおうとして。

背後に忍び寄る魔の手によつて、隻腕のガキの首は落とされた。

「——ア？」

渚の刀は振るわれていない。

視野狭窄を起こすほどの集中力を發揮していたガキには、それを確信できた。

——ナゼ、オレのシカイはマワツテイル？

死因や敗北した手段どころか、突然視界が逆さまになつたことに疑問を抱くように。呆けた様子のガキは、オバリヨンに統いて魔力となつて世界に溶けた。

(念動力と魔眼のコンボ……予想通り凶悪だ)

念動力を手のようにして、直接触れずに死の線をなぞる。

ガキを死に至らしめた方法は、渚のここ一ヶ月の集大成だつた。

飛行は早々に切り捨てて、暇さえあれば精度向上の訓練をしていた甲斐があつた。身を焼く歓喜と達成感に、渚は顔が綻ぶのを抑えられない。

「ふふ……」

笑いをこらえるように身を震わしながら天を仰ぐと、ちょうど敵の妖精が教官のアギによつて焼かれるところだつた。

アギを見るのはこれで二度目である。

その後に齋される現象を一度目の経験から予想して、渚は身構えた。発生した光には甘んじて照らされるが、不愉快な熱波は刀を振るつて相殺する。生暖かい風が渚の頬を掠めていった。

再度見上げた中空には、一人残された地霊コダマの姿が見て取れた。最後の締めとばかりに充填完了済みのピクシーに照準されていて。

今にも解き放たれそうな魔法は、コダマを仕留めるには十分な威力を秘めている——

そういうえばピクシーには、どいつと交渉するか聞かせていいなかつたか。

これはまずいと感じた渚は、言葉に強制力を乗せて口を開く。

『瀕死でとどめろ』

間近で鼓膜を揺さぶった雷鳴によつて、声を出した自身にすら聞き取れなかつた声

量。

しかし命令の伝達は成功していた。

稻妻状の光が去つた後、若干焦げたコダマが浮力を失うようにして落下を開始する。数秒の自由落下の後。

荒野と抱擁して大きくバインドしたソイツは、身体が痺れていいるのか痙攣しているが魔力に還る様子はない。

それはつまり、渚の指示を察知したピクシーが、上手く手加減してくれたということ。コダマ捕獲の功労者が中空を滑つてこちらにやつてくるのを、刀を腰に戻した渚は小さく手を振り笑顔で出迎えた。

「ああいう事は早く言つて。お蔭でいらぬ苦労をした」

その歓待を受けるピクシーの表情は冷ややかだつた。

殺害対象が殺す直前で、いきなり殺害不可対象に変わつたら誰だつて面喰うだろう。

それが渚が早々と指示していれば回避できたとなれば、彼女が不機嫌になるのも致し方がない。

完全に自分のミスなので渚は素直に謝つた。

「ゞ、ゞめん。次から気を付けるよ」

妖精の美貌から繰り出されるじと目に少し気圧され、たじたじになりながらも小さく

頭を下げる。

はあ、と小さい溜息の音。

頭を下げた状態で上目使いで様子を窺つてみれば、ピクシーはじと目をやめて呆れた  
ような表情で渚を見ていた。

「戦闘はそつなくこなすのに、司令塔としてはギリギリ及第点。……これからが心配」  
「経験を積めばなんとかなるよ。少なくとも今回の失敗は学習したから」  
「そう……」

ピクシーの視線はどこか胡乱だつた。

彼女は渚の戦闘能力には信頼を置いているようだつたが、リーダーとしての指揮能力  
には疑問を呈していた。

というのも、渚には普段から冒険主義的な面があり、それを指揮に反映されたらと不  
安を感じているようなのだ。

ピクシーは舎弟を引き連れて戦闘を繰り返していた時期もあり、以外に経験豊富なこ  
ともあつて尚の事そう感じるのだろう。

本人的には確信をもつて実行しているのだが、馬鹿となんとかは紙一重。天才の発想  
というものは理解しがたいものなのである。

しかしどりあえずは、渚を信じて成長を見守ることにしたようだ。

「ところでアレは待たせていいの？」

「え？」

話を終わらせる為、ピクシーが地面に未だ転がつたままのコダマの近くを指差した。

渚の視線も、小さな指先に釣られてそちらに向かう。

コダマの傍には教官が立つており、生徒たちは周りに集まろうとしていた。

渚から注意を向けられたことに気が付いたのか、生徒たちを見ていた顔がこちらに向

けられて教官と目が合った。

その眼差しからは、相変わらず温度が感じられない。

無表情に手招きされる。

「……行こうか」

「ん」

なんとなく気まずい気持ちを感じながら、渚はピクシーを肩に乗せて教官の手招きに応じた。



交渉も何もなく。

コダマは二つ返事で渚の仲魔になつた。

彼は生に執着しており、生存の道はそれしかないのだから、使い潰される可能性を感じようとも誘いに応じるのは当然だつた。

渚はまるで意氣地が無かつたコダマに拍子抜けしつつも、次の行動を確認するため教官の様子を窺う。

この集団の頭は渚ではなく彼女だからだ。

自分一人だつたらもつとサクサク進めているのにと思うと、やはり集団行動は好きにはなれない。

「ここ」の悪魔たちは定期的に間引きされ、異界から飛び出したところですぐに処理されます。その現状を知悉している悪魔は媚びてくるでしようが……その時にどんな対応をするのが正解か、知っていますね？」

渚の対応がお気に召さなかつたのか、それとも既定路線なのか。

教官は、意図的に視界から渚を外しておもむろに語り始めた。

仮面のように変化しない表情からは、その内心を窺いることはできない。

「悪魔には絶対に隙を見せない……でしようか」

「それと、弱みに付け込む？」

「後は……十分に警戒してしつかり管理する？」

最近蓄えた知識を、実感が伴わない様子で生徒たちが口にする。

悪魔交渉の仕方は授業で教えられていた。

基本は砲艦外交。

仲魔にするなら甘やかすのに意味は無い。

とにかく押して押して押しまくり、それでも折れることが無ければ速やかに処理をする。

仲魔候補には格下悪魔を見繕い、格上や同格相手には絶対に話を持ちかけない。

万が一にも命令の強制力が効いている振りをして契約を結ばれると、獅子身中の虫となってしまうからだ。

「そうです。飽く迄も獵犬や番犬として厳重に管理しなさい。甘やかして首輪を緩めれば奴らは必ず反逆します」

仲魔のレベルが自身を上回りそうな場合もさつさと処分しろと教えられていた。

現代の悪魔召喚師のセオリーから言えば、渚のピクシーへの接し方は間違いなくアウトなのだが、不思議と少し注意されるぐらいで特に何も言われていない。

「一部、例外もありますが……」

そこで教官は一旦区切り、横にちらりと意味ありげな視線を向けた。

教官のガラス玉のような瞳に、仲睦まじげな渚とピクシーの姿が投影される。

彼女はすぐに目線を元に戻したが、その場にいた生徒たちは全員その光景を目にしており、次の言葉をなんとなく察することができた。

「それは天才だからこそ許される所業です。私たちのような凡人が真似をして、悪魔と同じ土俵に立てばすぐにでも追い抜かれて殺されます。身近な者が当たり前のように禁忌を犯しているとはいえ、命が惜しければ決して真似をしないように」

固有名詞を使わず誰のことかは伏せていたが、その天才が何者を意味しているかなど一目瞭然である。

しかし今回も渚に具体的な警告をするわけでもなく、他の生徒に真似をしないようと戒めて、それで教官の話は終わつた。

無表情に抑揚がない声が合わさつて、非常に意図が伝わりにくかつたが、それでも上位者の言葉である。

生徒たちは分かつたような分かつていないような顔を浮かべながらも、「はい」と頷いた。

この人は絶対に演説向きじゃない。

彼女の言葉を受けて、全員が共通して分かつたことはそれだけだつた。

「では、皆さんの仲魔探しを再開します。先程のように最後の一體を残してもらえると助かるのですが、よろしいですね、霜月さん？」

敵は大して強くなく、皆殺しよりは少ないとはいえ経験値が入るとなれば悪く無い。横目で確認すればピクシーにも異存は無さそうだったので、渚は快く承諾した。

渚の領きを目にした教官は、異界に入った直後の出来事を繰り返すかのように歩き出す。

流石の生徒たちも大分緊張が解れてきたのか、最初の時に比べれば教官に追従する姿は様になつてゐる。

今度は特に笑いも起こらずに、渚は最後尾についた。

教官の仲魔は相変わらず、中央から離れた四方で早期警戒の役目を振られている。

彼女が自身と渚を主力に使い、仲魔には警戒だけをさせて戦闘に参加させないのは、恐らく先程口についていた警戒や管理の一環だろう。

仲魔と常に一緒に戦つていれば、種族的な成長補正の違いで人間のレベルは簡単に追い抜かれてしまう。

そうなると起ころのは、生徒たちが教官から耳をタコにするように聞かされる、仲魔からの下剋上である。

それに対する予防法はただ一つ、サマナーと力が並びそうになつた悪魔は処分することだ。

しかし空いた穴を埋めるには当然野良悪魔を勧誘しての補充が必要で、それは非常に

面倒な事だ。

悪魔の勧誘を専門にする補給部隊でもあるのかもしれないが、その補給にしたつて潤沢という訳でもないだろう。

大穴で悪魔全書が存在したとしてもコストはかかる。

考えなしに運用していれば、そのサイクルが早まってしまう。

そこで教官は手間を避ける為、必要のない場面では仲魔に経験値を吸わせないようにしているのだろう。

(実戦経験が豊富の教官つて頼もしいものなんだなあ。世に跋扈するなんちやつて教師たちとは大違ひだ)

そこまで思考すると、渚は心中で呟いた。

常に張りつめている戦場帰りのような雰囲気に、放任的な姿勢も相まって、実は渚は教官たちのことを探ましく感じていた。

それを口にしても、無意識に發揮される傲慢さによつて、とてもそうは思われないのであるが。

何も考えずに自分が歩んだ道を、後進へ迫るように強要していく者達とは比べる事すらおこがましい。

尊敬できる先達というのはこういう人たちのことをいうのだと納得して、渚は最後尾

から、先頭を歩く女性の背中を眺め続けた。

## 9. 期待外れ

数時間にも及んだ仲魔集めが終わつて異界から帰還したところ、渚は角刈りの教官に呼び止められた。

そして連れていかれた場所は異界が設置されている場所のすぐ近く、頑丈そうな扉に『関係者以外立ち入り禁止』という看板が貼られた地下施設だった。

その先の階段を下れば、そこには教官が朝に説明してくれた、悪魔合体を可能とする設備があるらしい。

生物由来の材料が使用されていない無機質な空間が蛍光灯で照らされると、窓がないことも相まって秘匿された研究所といった感じの印象を受けた。

静謐な廊下に二人分の足音だけが反響する。

そこそこ歩いたにもかかわらず、すれ違う人間は一人もいなかつた。

扉の向こうに職員たちが詰めているのかもしれないが、内部の様子を窺うすべは無い。

その為、渚にはこの施設には人が全くいないように感じられた。

奥へ奥へと先に進む教官に、渚は無言で追従する。

先程までは渚が、悪魔合体についての疑問を問う形で会話もあつたのだが、どうにも彼は専門家ではない様で、渚でも知つてているような概要しか答えてくれなかつたのだ。

少し鋭い質問をすれば知識不足から返答に窮するようで、この先にいる専門家に聞いてくれと丸投げである。

そうなれば渚と教官はプライベートで話す関係でもないので、二人とも無言で黙々と足を動かすようになり、この静寂は形成された。

「……着いたぞ、ここだ」

施設の奥深くに位置するドアの前で。

目線の高さに張られた部屋の番号を見て、ほつとしたように教官が呟いた。

道に迷つたのか何度か行き止まりにぶち当たつて引き返しながらも、彼はどうにか目的地に辿り着けたようだつた。

まあ殆ど似たような構造の施設だつたから迷うのも無理はない。

渚としては今から一人で帰されたとしても、真っ直ぐ出口にまでいける自信はあるのだが。

(部屋の番号という目印があるんだから、その位置関係を覚えておけばいいのに。この人あまり頭の出来がよろしくないんじや……?)

とはいえた大人はからかうものではない。

渚が失言をしないようにと笑いをこらえながら押し黙つていると、教官はドアを開け放つて逃げ去るよう部屋の中へと消えた。

口元がひくつくのが抑えられなかつた為、後ろを振り向いた時に渚が笑つてるのがばれてしまつたのだろう。

声が出そうになるがお腹に力を入れてどうにか堪えて、渚は肩を微妙に震わせながらも遅れないようにと後に続く。

部屋の中は、悪魔合体という字面から想起させるような薄暗い雰囲気は皆無だつた。  
(当たり前であるが) 室内は照明が点けられていて昼間のように明るいし、部屋の構造にも何の変哲もなく、儀式や祭壇のような魔術的な要素は全く見受けられない。

天井から鎖が垂れ下がつてゐる訳でもなく、檻やシリンドラーのような生体ポッドも無く。

パソコンなんかのポピュラーな機器に加え、様々な用途不明の設備が置かれた、ごく普通の研究室だつた。

重く断続的に響く機械の作動音があちこちから聞こえてくる。

部屋の主の性格が表れているのか、床や天井に張り巡らされたケーブルは綺麗に纏められており、雑多な印象はあまり感じない。

「霜月渚くんじやな？ 話は聞いとるよ」

部屋の奥から聞こえてきたその言葉は、高そうなデスクチエアに腰掛けた研究室の主が発した声だった。

声の主を探した渚の視界に入った人物は、白衣をまとつた研究者風の出で立ちの老人だ。

顔に刻まれた深い皺に、真っ白な頭髪は彼が生きてきた歳月を物語るが、落ち窪んだ瞳が発する眼光は鋭く、弱々しい印象は感じない。

「……はて？ わしは少年と聞いていた気がしたのだが、遂にボケたのかの？」

渚を見た老人が驚きの声を発するが、性別を揶揄されるなど慣れた事。似たようなことはこれまでの人生で辟易するほど聞いてきたので、その内心は手に取るようになる。だがいちいち訂正する必要性は無い。

さつさと本題に入ろうと、渚は老人の問いかけを無視するかのように口を開く。  
少しぐらいは取り繕つておこうと、愛想笑いを顔に浮かべながら。

「悪魔合体とやらをしに来たのですが、さつそくやつて頂けますか？」

「最近の若者はせつかちだのう……。まあよからう、こつちじやー」

渚のそんな失礼な態度に、白衣の老人は好々爺然とした笑みを浮かべると、椅子から立ち上がり渚を手招きして歩き始めた。

向かう先には何やら大きな機械が置いてある。

あれで合体をするのだろうかと考えながら、渚もそちらに向かつて一步足を踏み出すと――

「霜月」

入り口周辺に突つ立つて事の成り行きを見守っていた教官が、不意に声をかけてきた。

「俺はこれで帰るが……博士に対して、くれぐれも失礼の無いようにな」

「もちろんです」

足を止めて振り返つた渚は、教官の言葉を受けて大きく頷いて見せるが、向けられたのは疑わしげな視線だった。

入室直後にもやらかしているから、今更殊勝な態度をとつた所でどうにも信じられないのだろう。

渚としても、老人に対して本気で丁寧な態度をとるつもりは無かつたし、教官の懸念は間違いなく当たつている。

「はあ……。帰り際、一人だと思うが道に迷うなよ?」

「はい、大丈夫です」

諦め交じりに溜息をこぼした教官が帰り道を心配してくるが、渚には何の問題もな

い。

「ここから地上に出る道は理解しているし、そこから宿に向かう道筋も把握している。そこの距離があるが、渚の脚力があれば車以上に早く帰れるだろう。」

「そうか……まああまり遅くならないように。ではな」

「お疲れ様でした」

扉の向こうに消える教官をかすかに頭を下げて見送つて、扉が閉まつたのを確認すると渚は踵を返した。

向かう場所は当然、老人の待つ機械の所だ。

「お待たせしました」

「いや、大してまつとらんよ」

教官の面子を立てておこうと、老人に対して待たせたことを一応謝罪してみれば、交わされた言葉はお互いに大して心の籠っていない社交辞令だつた。

それで分かつた。どちらかというとこの人は、挨拶なんかは素つ気なく行うタイプの面倒を嫌う人間らしい。

「これの概要くらいは聞いていると思うんじやが……由来なんかの説明は必要かの?」

目の前の機械をさすりながら老人が告げた言葉に、渚は頷きを持つて答えた。  
そして始まつたのが、渚に対する悪魔合体の講釈だ。

「よろしい。こいつは半世紀前に存在した大天才、サリエラ・ザストーアが発明、試作した物を、製作者亡き後にどうにかして完成させた物じや。ああ、サリエラの事は知つておるかの？」

「ええと、メシア教団の信徒で超有能な異能者であり、発明家でしたつけ？　あまりよく知りません」

サリエラ・ザストーア。

半世紀前の裏世界を代表する偉人で、魔導技術を一人で一〇〇年は早めたとか評価されていた氣がする。

常人には理解し難い世界の真に迫るような論文ばかりを書いていて、生産性に寄与するような発明はあまりしてこなかつたが、それでも僅かな手番で魔道具の機械的な大量生産方法を構築した人でもある。

渚も彼女の遺した論文には目を通してみたが、難解すぎて序論を見ただけで理解を放棄した。

頭脳面だけでなく戦闘面でも天才で、慈愛溢れる精神も合わせて聖女とか呼ばれてたらしい。

しかし功績ではなく、彼女の歩んできた人生の事は殆ど知らない。  
人の人生になんか興味はない、偉人関連の書籍は完全にスルーしていたからだ。

なんとなくルードルとアインシュタインを悪魔合体して生まれたような、大天才というイメージがあるくらいか。

「まあその理解で十分じや。彼女は本当に規格外での……。その頭の中身は言語化された論文を見ても理解に苦しむというのに、その論文すら未完成ならばもうどうしようもなかろうて」

「……ん？」

なんだか嫌な予感が。

「彼女はこの機械の理論を紙面へと纏める前に、異界探査中に閉じ込められて行方不明になつてしまつての。実のところどういつた原理で合体が起こつてているのかよくわかつていないんじやよ」

「ダメじゃん」

あまりにも不甲斐ない老人の言葉に、渚は思わず本音が口をついた。

サリエラの論文を理解できなかつた渚が言えた義理でもないのだが、それでも本職の研究者が半世紀もの時間があつて何をしていたんだと思わずにはいられない。

そんな思いが籠つた渚のジト目に、若干居心地が悪そうにしながらも老人は続ける。「……」応は悪魔合体も、悪魔のクローン生成ともいえることも可能なんだがのう。本人が目にすれば落第を下すほどに不出来な代物じやろうて

クローン生成……悪魔全書のことだろうか。

それに思い至つて渚のテンションは上がりかけたが、老人の陰った表情を目にして瞬時に鎮火される。

恐らく実験室レベルでしか使用に耐えない代物なのだろう。

悪魔合体は使用されているようだから使えるとしても、悪魔全書の方は期待しない方がいいか。

いや、この様子だと悪魔合体にすら期待を寄せない方がいいかもしれない。

「まあ実際に見た方が早いじやろ。悪魔の入ったCOMPを貸しどくれ」「勝手に合体したりしないでくださいよ？」

「そんなことせんよ」

半信半疑になりながらも渚は携帯型のCOMPを手渡した。

老人は機械とCOMPをケーブルを引っ張り出して繋ぎ終えると、機械の脇に設置してある机のPCに移動してなにやら操作し始める。

後ろから画面を覗きこんで見れば、ディスプレイはプログラム画面のようになつて何をしているのかさっぱり分からぬ。

「やけに育つとる妖精が一体いるの。これは残しておくか？」

画面を凝視したままの老人から、唐突に投げかけられた問い合わせ。

渚には数字とアルファベットの羅列にしか見えないのだが、老人にはステータス画面のようなものが見えるらしい。

その画面の見方も気になるが、今は返事をするのが先か。

「あ、うん。その子は残しといて。それ以外の悪魔は好きにしていいよ」

ここに来てから途端に胡散臭くなりつつある機械に、大切な仲魔を消されたらかなわないと、渚はまずはピクシー以外の悪魔を犠牲にして様子を見ることにした。

「ほいきた。では早速——」

かたかたつと老人は迅速の指使いでキーボードを叩き、最後にエンターキーを押した。

そしてディスプレイにでかでかと表示される、ダウンロードバーのようなもの。

これは悪魔合体にかかる所要時間を視覚化しているのだろうかと、渚は頭の片隅で考えて。

「えつ」

返事をしてからの一瞬で起きた出来事に渚は啞然とした。

いくら好きにしていいと言ったからって、何の説明も無しにこれは酷い。

というか合体予想を吟味している感じもしなかつたが、もしかして……。

生まれた疑問を確かめようと、変な声を発した渚に訝しげな視線を向けていた老人に

言葉をかける。

「……教官からはゲームみたいな物と窺っていたのですが、合体先の予想みたいのは分からないんですか？」

「まったくわからん。結果は完全ランダムじゃよ」  
おい。

遅々として進まないゲージを待つている間に聞いてみれば、返ってきたのは嫌な言葉だつた。

どうもこの世界の悪魔合体の技術というものは、ゲームと比べて格段に低いらしい。

待ち時間を利用して詳しく聞いてみたところ。

合体後の種族・レベルの統計を取つてみても結果はばらばらで、進化が五割。現状維持が三割。退化が二割ということぐらいしか分かつていないとか。

加えて悪魔にも個体値のような才能の格差は存在し、同じ種族の悪魔でもピンキリだ。

素材となつた悪魔の要素を引き継ぐこともあるが、それは所詮確率であつて、どんなに優秀な悪魔を素材にした使つたところで成長性皆無の産廃が生まれる可能性は無きにしもあるず。

ピクシーを生贊にして、生まれた悪魔が彼女を上回る才能を持っている確率は、十分

の一以下のこと。

一回ぽつきりでソレを引ける気がしないし、ピクシーを合体させるかさせないかで、悩む意味なんてなかつた。

普通は、人間のレベルアップ速度では絶対に勝てないピクシーのような才能ある悪魔は冷遇して、渚のいう産廃悪魔を重用するのだが、天才に“普通”は当てはまらなかつた。

本当に合体できるだけって感じである。

期待外れは悪魔全書的な機能も同様で、一レベルの雑魚悪魔ですら個人では賄いきれないような膨大なマグが必要であり、それでもカタログスペック通りに誕生することは限らないという……。

渚の中で、こここの施設は“邪教の館のようなもの”。出来の悪いパチもんという評価が下された。

「……それで、出来上がった悪魔の性能は、実戦の中で確認しろと?」

しばらく掛かるからと椅子に座られ、出されたコーヒーカップを揺らしながら渚はさも面倒くさげに言つた。  
「引き継げたスキルは直接聞けば分かる話じやが……成長性なんかは実際に確かめるしかないわな。その辺は人間と同じじやよ」

「なるほど、いい意味でも悪い意味でも、飛び抜けてれば一目で分かると」

考えてみれば、渚は他者の才能を見抜くのは得意とするところだった。

主に人間を差し測るのに使ってきた目利きが合体で生まれた悪魔にも通用するのなら、上中下の三段階ぐらいには容易に分けられるだろう。

「わしは純粹な研究者じやからよう分からんが、聞くところによるとそんなことも出来るらしいの。……しかしお前さん、悪魔の才能なんて見抜いて何をしたいんじや？」

皆そんなこと気にしてないぞ、と続けられる。

老人の表情はごく普通。とくに意図がある訳でもなく、純粹に疑問に思つたから聞いたといった感じだろうか。

渚の態度から何か思惑があるのを感じ取つて、興味が沸いたというのもあるかもしれない。

しかし素直に、優秀な悪魔の厳選がしたいです。とはちよつと言い辛い。

制度的には問題ないだろうが、人格面で外道キチガイ的に見られるのは間違いだろうからだ。

そしてもし万が一上に報告されて、ガイア教団的な危険思想の持ち主とか警戒されてもたまらない。

そんな自覚があつてもなおヤル気満々などころを見るに、実際渚は外道でキチガイな

のだが。

話を逸らす話題を探して視線を彷徨わせる。

そこに、悪魔合体の進歩状況を知らせるPCが目に入った。

視界に入つた情報を処理し終えた渚は、嫌なものを見たと言わんばかりに顔を顰めた。

半時ほどは話し込んでいたというのに、液晶画面に映るゲージが殆ど動いていなかつたからだ。

「……フリーズかな？ なんだかゲージが全く動いてないんですけど……？」

「ん？ ああ、問題ない。仕様じやよ」

逸らされた視線の先にある画面を見て、渚の言わんことを察した老人が何をいわんやとばかりに言い放つ。

あのペースではどう考えても後数時間は掛かりそうだった。

今の渚には、無難な話題逸らしに成功した喜びなど無い。あるのは待ち時間の壁だつた。

しばらくつてレベルじやねーぞと心中で毒づいたが、それを実際に口にするのは何とか堪える。

「……半分くらい行つたら一気にガーッてなつたりするんですか？」

「このペースは変わらんの」

とぼけたような態度の老人。

内から湧き出す笑いの衝動を押さえつけているのか、その声は若干震えていた。

渚は自分がからかわれていたことを理解する。

「そういうえば言つとらんかつたかの？ 合体には時間が掛かるから時間をあけて引き取りに来い、とな。お前さんと話し込んで忘れとつたが」

渚のイラついた内心を理解しているのか、老人は的確にその感情へ水を差した。  
とぼけた顔がドヤ顔に見えて無性に腹が立つが、装置の解説を求めたのは自分なので  
強くは言えない。

聞きたかったことは大体聞き終えた。

苛立ちにも後押しされ、戦略的撤退すべしと渚は静かに立ち上がった。

「ではもう僕は帰つても？」

「うむ。明日の今頃の時間には終わつとるじやろうから、その頃に来ると良いじやろう」

先に言えよ。とはもちろん口には出さない。

「分かりました。ではまた明日伺います。本日は貴重なお時間をいただき、ありがとうございました」

「仕事じやからな」

満面の笑みを作り、懶懶無礼に皮肉を込めて言つてみるが、老人には大して堪えた様子はない。

いらっしゃつとするが我慢。内心の感情を切り捨てるよう踵を返す。

仲魔の入つたC O M Pを老人に託して、渚は研究室から退出していった。



午後の六時を時計が刻む頃合い。

所はヤタガラス支部、その奥に位置する執務室のような部屋で。

建物の主と、渚たちを引率していた教官が、高級そうな机を挟んで対峙していた。

スーツを着た男と、異界から直行してきたのか戦闘服のままの女。

一方は椅子へ腰掛け、もう一方は立つたまま。

その光景だけでも力関係は一目瞭然。彼らは上司と部下の関係だと思われる。

部下である女性が入室してから数分が経つた頃。

一通りの口頭での簡易報告が終わり、彼女は多分に主觀が混じつた総括を語りはじめた。

「彼の才能は本物です。成長性、思考、判断力……戦闘に関わりそうなもの全てが非常に

高いレベルで纏まっています」

「ふむ……具体的には？」

「そうですね……。このまま彼が何処かに配属されれば、一ヶ月もしないうちに私は追い越されるでしょう」

「……そこまでか？」

スーツを着た壯年の男は険しい顔をして聞き返した。

女の戦歴を知っているだけに、その内容はとても信じられるものではない。

歴戦の古参兵の実力が、微か一ヶ月で追い越される――

想像すらできない事だつた。男は平静を装つてはいても、その内心は驚愕で満ちていた。

「むしろこれでも多く見積もつています。大して危機に陥つてゐる訳でもないのに、あの魔力の昇華速度は尋常ではありません。悪魔よりもよほど悪魔染みています」

訝しげな男に対し、真剣に語る女の様子はとても冗談を言つてゐる風ではない。

男は理解に苦しみながらも、そういうものなんだと自分を無理やり納得させた。

「……最終的にはどこまで育つと予想する？」

正解であろう数字を頭に浮かべながらも、あまりにも荒唐無稽なその答えに、男は自分で出した結論を信じられなかつた。

しかしその不信は、自身の常識によつて発生したものだと男は正しく自覚できていた。

だが信じられないものは信じられない。

そこで自身よりも戦闘に知見のある女性に同じ解答を聞かせてもらい、その常識の壁を打ち破つて貰おうという思惑から発した言葉である。

「世に跋扈する悪魔達を相手にする以上、そのうち成長が頭打ちになるでしょう。しかし成長速度と成長限界が比例するという理論が正しいのなら、そこまで至つたとしてもかなりの伸び白が残ると思われます」

悪魔との交戦は有史以来から行われているものだ。

その豊富な経験則や統計から、アナライズでも知ることが出来ない成長要素といつた才能の割り出し方を人類は編み出していた。

成長速度が速ければ、同じぐらい成長限界にも恵まれているという仮説である。統計上でもそれは正解という回答が導き出されていた。

それを踏まえた先程の女の言葉である。

ゲーム風に説明するならば、成長限界が一〇と一〇〇の二名がいたとする。

その二名が成長限界に達するのに必要な経験値量は変わらない。

両者共に同じ戦場を体験して、一〇の者がようやくレベルを一つ上げたところ、一〇

〇の者は一〇も上げて いる。

かなり極端な例だが、今回の話はそいつた規格外を評する為の会話である。それを正しく理解しているのか、男は考え込む仕草を見せた。

「末恐ろしいものだな」

数秒の沈黙を破った男の声。それは若干震えていたように女は思えた。

「同感です。或いは潜在能力では、最上級悪魔にすら匹敵するやもしれません」「……そうなると、過激思想に染まつてしまわなか心配であるな」

手が付けられなくなる前に、ある程度の戦果をあげて死んでくれないだろうか。

言葉の裏で、男はそんな最低な思考を巡らせて いた。

こういつた思考が才能あるものに悪感情を抱かせる原因となり、過激思想に染まつてしまふ遠因となるのかもしれないが、それでも男には嫌な考えを止めることはできなかつた。

身近にそんな理解不能の才能を持つた人間が存在するなど、ある程度逸脱しようが常人の域に留まつて いる男にとつては恐怖以外の何物でもないからだ。

「確固とした芯を持つて いるように感じました。変な思想に容易に染まることはないでしょう。それにあれだけの才能を自分が手にして いたらと思うと、むしろ彼は模範的ですらあります」

「……」

関係者と比べても逸脱しまくっている女は、いつも通りの無表情で渚を擁護した。その言葉を受けて男も想像を巡らすが、この女が力に溺れている姿など想像もできなかつた。

であればそれは男を揶揄した言葉なのであろう。

ただなんとなく生きていたような高校時代、男の過去にそれだけの力があれば——己の不利を悟ったのか、男は話題を切り替えた。

「それで『眼』の件について、何か分かつた事は？」

眼。つまり魔眼。

それは対象が持つと報告されていた力だ。

『放されたジオを霧散させた』『遙か格上の悪魔であるリリムを殺害した』それらの所行は全て、その辺で拾つたという木の枝で行われたという。魔眼が関わっていることは確実であろう。

しかし本人が能力の詳細はぐらかしているため、その性能はよく分かつていなかつた。秘密のベールに隠された魔眼の能力の確認も、今回派遣された女の仕事の一つだつた。

「正直言つて良くわかりません。戦闘中、瞳が青白く輝いていた所を見ると使用していましたようですが……」

「歯切れが悪いが……よもや大したモノではなかつたのか？　だとすれば信楽から上がつてきた報告は嘘だつたということになるが……」

「いえ、口で説明するのが難しいだけです。あの報告書は事実でしょう。私も似たような現象を目撃しましたから」

相対していた悪魔に、本来なら掠り傷にすら満たないような攻撃で致命傷を負わせた  
り。

放たれた魔法を、無造作に振るつた刀の一振りで相殺したり。

異界での戦闘で、女は報告書の記述に類似した現象を何度も目にしていた。

しかしどちらかといえば口下手な彼女は、それを言葉で表現するのに億劫だった。

半信半疑となるであろう男の予想される反応もそれに拍車をかけている。

「なら……」

「とにかく私が言えることは、あれは既存の魔眼とはまるで違うとしか。詳しくは後ほど報告書を上げますので」

報告書を作成する間もなく、現場から直行させたのは男の指示である。

現場を見てきた女がそう言つている以上、男はそれ以上何も言えるわけがない。

階級は男の方が上であるが、戦闘力は比べ物にもならない。現代の組織である以上階級が優先されるものの、力の多寡によつて発生する発言力は無視できるものではなかつた。

行き過ぎたパワハラでもしようものならぶつ殺されるだろう。少なくともその程度の危機感は存在した。

「どうか。……では、下がれ」

「はつ。失礼します」

無表情に軽く頭を下げ、女は去つて行つた。

執務室に一人残された男は机に肘をつき、疲れたような溜息をついていた。

## 10. 友達

邪教の館と呼ぶには大いに雰囲気が欠けていた研究所から宿へと帰り、夕食が終わつた後の自由時間にて。

冬の近さを感じさせる夜の公園で、ベンチに座つた小柄な人影が外灯に照らし出されていた。

ペットボトルのお茶を片手にベンチに腰掛ける少女のようなシルエットは渚であつた。

寒さも手伝つてか人気の少ない屋外で、彼はTシャツに短パンという信じられない程の薄着であつたが、特に寒さは感じていないようである。

わざわざ夜の公園に来た渚は、とくに何するでもなくぼうつと公園の景色を眺めていた。

実際意味はないからだ。

渚の唯一の友達にして親友の太一が他の友人と出かけてしまつたため、暇を持て余してこんな所で時間を潰している訳である。

殆ど出払っているとはいえ宿にはまだ幾人かが残っている。ぼうつとするには適さなかつた。

太一がいなゐのならば、渚としては一人の方が好ましいからだ。

なんとはなしにお茶を口に含む。

飲み口が唇から離れ、微妙に中身が減つた合成樹脂の容器に視線が落ちた。

(……そういえば、久しぶりに金を使つた気がする)

寮では食堂どころか自販機まで無料だつた為、ここのことろ渚は貨幣を目にしていかつた。

しかし今回は町にも繰り出せるようなので、金は入用になつた。

そこでお金を下ろすためにヤタガラスに入る前に作られた口座を確認したところ、どこのエリート職員の給料だというような金額が振り込まれていたので驚いた。

給料が出ることは知つていたが、まさかこれ程とはと。

辛く厳しい訓練を課されても、訓練生たちが逃げない理由の一つでもある。

給料も良く、遠回しに特別な人間だと告げられて、人類の為といふ大義名分まである。命の危険にさえ目を瞑れば、金銭的にも自尊心も満たされる素晴らしい職業だろう。リスクにリターンが見合うかどうかは正直微妙な所だが。

「……あー」

だらしなく背もたれに身を預けて伸びをする。

渚はだれた様子で、全身を使って暇であると表現していた。

一ヶ月前まではこういつた時間は偶にできていたが、ピクシーが仲魔になつたここ最近は無くなつていた。

だがCOMPを預けている今はピクシーがない。つまり話が出来ない。

一ヶ月前に戻つたといえばそれまでだが、最近はこういつた間が無いことに慣れきつてしまつていたようで、渚はどうにも憂鬱な気持ちになつていた。

夜空を見上げる。

寒気団が本格的に到来していない上、外灯に邪魔されて見える星々はあまり鮮明ではないが、公園の風景に飽きていた渚にとつては気晴らしにはなる。

普通なら首が痛くなりそうな角度で、渚はぼうつと星空を見上げていた。

しばらくそうしていたが、偶に飛行機が見つかる程度の代わり映えしない風景に飽きたのか、渚は適当に星座を探しはじめた。

秋の星座を見つける目印である秋の四辺形。そしてペルセウス座を発見。

そこから学校で習つた程度の知識を駆使して、次々と星々を結ぶ。

あまりシーリングがいいとはいえない環境の中、無駄にやる氣を出した渚は超人染みた視力を發揮して、見えずらかつた星も見て取つて行く。

主要な星座を全て発見したころには大分時間が潰せていた。

その間ずっと空を見上げていた渚の首は、流石に違和感を発していた。  
労わるうように肩を竦め、首を回す。

公園の時計を確認すれば、まだまだ渚は暇を持て余す必要があるようだつたが。  
暗く静かな場所で孤独に居ると、人間誰しも無駄な思考をしてしまうもの。渚もご多  
分に漏れずに一月前のこと回顾していた。

もう既に検討を重ねに重ねた出来事を思い出すなんてどうかしていると渚は感じた  
が、今日は異界に潜つた事も影響しているのかも知れないとも考える。

人類史に残るような天才が、異界に閉じ込められて行方不明になつていたと知つたこ  
とも関係しているのかも知れない。

——埒もない思考に意識を割いていた渚の耳へ、地面を擦る靴の音が聞こえてきた。  
近づいて来るが見知った人の気配だつたため、背後をとられようとも渚はこれといつ  
た対応を取らなかつた。

「やつぱり渚か。こんな所でどうしたんだ？」

ベンチ脇で立ち止まつた人間から掛けられた声は、やはり太一のものだつた。  
小中とずっと体操服でよかつた環境に慣れてしまつたのか、彼は私服というものを着  
ることに抵抗があるらしい。

中学時代の紺色ジャージといううずぼらな恰好のそいつに、渚は答える。

「んー、暇を持て余して」

「……そうか」

微妙な沈黙。

中央に座つてベンチを占拠していた渚は、なんとなく端に詰めてみた。

空いたスペースに、太一が腰掛ける。

「で、何考えてたんだ？」

再びほんやりし始めた渚に対し、太一が掛けたのは疑問の言葉だつた。

とはいえそれ自体に大した意味は無い。太一が自分から話す際の癖の様なものだ。

「どうしたの」「今何してる?」それらの言葉にならんで使用頻度が高い第一声が「今何考えてた?」である。

「……」か月前の事を思い出してて

「お前が異界に迷い込んだ日のことか?」

うん。渚は空を眺めながら呟いた。

「一步間違えれば、僕って今も異界で彷徨つてたんだろうなーって思つて

「は? 何言つてんだ」

話の内容が見えなかつたのか、いきなり変なことを言いだしたと太一は怪訝そうな顔

をした。

悪魔関係者の常識として、悪魔関係者でもない一般人の為に、異界内の搜索なんて行わない。

ほぼ確実に悪魔の餌となつてゐるからだ。

徒労に終わる可能性が限りなく高い目的の為に、貴重な戦力を失う可能性もあるとくれば見捨てるのも当然である。

異界の外側から異界内を探知する術は無い。

下手をすれば、実力者が異界内にいることを知らずにゲートを閉じてしまう事件だつてある。

それによつて半世紀前の偉人、サリエラ・ザストーアすら行方不明になつてゐるのだ。「もしも太一が異界閉じを行えたら。もしも巴さんたちが駆けつけるのがもつと早ければ。もしも僕が脱出するのが遅れていたら。……少しでもボタンを掛け違えていればあり得た展開だよ」

それらの事情を思い出せなかつたと見える太一に、渚の補足説明。

太一の表情に理解の色が浮かぶ。同時に微かな怒りも浮上していた。

「……もしそうなつていたら、俺達はお前を見捨てたと？」

人生で一番気を揉んだ時間と断言できる当時の心境を、太一は今でも鮮明に思い出せ

る。

電話越しにも伝わった狼狽した母の様子。親友の危機に対してもできない自分への圧倒的な無力感。それでも何もせずにいられないという無謀な考え方。

あと数分、渚の帰還が遅れていれば、太一は居ても立つても居られずに異界に飛び込んでいた所だった。

九九パーセント以上の確率で自分が死ぬとしても、渚を助けられる可能性が僅かでもあるのならそれに賭けたい。そう決意して。

あの時、実はそんな覚悟を決めていた太一にとつて、自分達を信用していないような渚の物言いは我慢ならなかつた。

思わずといった様子で立ち上がつた太一が、静かな怒りを湛えて渚に問う。

怒気を纏つた太一を見上げる形となつた渚は、何を怒っているのかと不思議そうな顔をしながらも、あっけからんと答えた。

「さあ？ そこまでは分からない。けど、僕が異界に閉じ込められる可能性はあつたつてこと」

「——ふざけんなっ！ 僕達がお前を見捨てるわけないだろ！」

まるで人の気持ちが分かつていらない渚の態度に、太一は思わず激昂した。

お前の中では俺達の評価はそんなに低いのかと、悲痛な色すら乗せて。

感情を真っ直ぐぶつけられて初めて、自分が地雷を踏んでしまった事に気付いた渚は、大きく見開いた眼で呆然と太一の顔を見上げていた。

やがて太一の目力に負けるように視線を逸らす。

何で怒ったのかよく分からぬ。

その答えを求めるかのように視線が彷徨い挙動不審な態度になりながらも、原因を探そうと支離滅裂な思考を巡らせる。

そして太一の言葉を十数回ほど繰り返しリピートして、ようやく気が付いた。自分が彼を信頼していないとも取れる発言をしていたことに。

血の気が引いた。

思い出されるのは小学校に入つたばかりの頃。

あの時は今と同じぐらい怒らせて絶交を言い渡され、三日ほど口もきいてもらえないかつた。

その時は子供だつたから禍根も残らず許された。だがこの年で関係を拗らせれば、元通りになるのは難しく思えた。

「——え、あ。……な、なんか誤解させちやつたね？ 誓つてそういう意図は無かつたんだ。……本当だよ？」

嫌な予想に渚は狼狽しながらも頭を下げ、謝罪する。

籠つた熱を吐き出すように、大きな溜息がつかれた。

そしてバツが悪そうに咳かれる「いきなり怒鳴つて悪かつた」という言葉。最悪は免れたようだと、渚はほつと胸を撫で下ろした。

「……で、いつたい何が言いたかったんだよ?」

近くの自販機でコーラを買つて、再びベンチに戻つてきた太一が言つた。

渚は何か懸念があるのか、若干口を籠らせながら返答する。

「えーっと、僕が言いたかったのはその……。あれだ、異界を閉じるのはちょっと怖いなつて」

「?」

「だつてもしかしたら、中に人が居るかもしれないんだよ? むしろ知らない方が幸せだよね。完全善意で閉じちゃつて、後から仲間がその異界にいた、とか知らされたら……」

「……やめろよ。異界が閉じれなくなるだろ」

その場面を想像したのか、太一は苦い顔をしていた。

素直なその反応に、どうやら峠を越したようだと安堵して、渚は小さく笑みをこぼす。

「ごめんごめん、そんなに深刻に考えなくつても大丈夫だよ。今では異界への入出報告は義務付けられてるんだから」

「そ、そうだな……つてそれ悪魔関係者だけの話だよな？　お前みたいなのが居たらどうすんだよ」

「んー、その時は運が悪かつたとしか……」

「結局それか……」

「大丈夫だつて。眞実僕のような存在なら、どんな状況からだつて生還できるから」

宇宙で遭難しても大丈夫さ、と自信に満ちた渚の言葉。

絶対に不可能と思われる大言壯語も、妙なカリスマのある渚が言えば本当に実現できそうな淒みがあつた。

加えてそんな状況を今考えても仕方ないとも思つたのだろう、太一は渚の冗談めかした会話を乗つて來た。

「ホントかよ？」

「本当だよ」

ベンチの上で顔を見合させて、そして二人は示し合わせたように笑いを溢した。

ほんの数分前、喧嘩しそうになつたとは思えない程の仲の良い光景がそこにはあつ

た。

(んん……はぐらかして正解だったかな？)

そんな思考をしたのは、太一と楽しそうに会話を交わしながらも終始冷静な渚の心の

一部分だつた。

当初渚が話そうとしていたのは別のこと、もつと黒い話。  
しかし太一のリアクションが予想外に大きかつた為、急遽それっぽい話題に切り替え  
た。

渚が本当は口にしたかつたこと。

それは――

聖女サリエラは実は謀殺されたのではないか、という疑念だつた。

中の人居ると勘違いしていたサリエラが、救出に異界に入したところ、偶然にも  
その異界を発見した者が、『善意』からゲートを閉じてしまう。

異界を閉じることは事態は悪い事ではない。むしろ賞賛されるべき行いだ。

中の人いるかなど知るすべは無い。万が一後から確認が取れたとしても、それで罪  
に問われることはありえない。

蓋然性の犯罪である。

怖いのは、少し修練を積んだ程度で異界閉じの道具は使えるようになるという事だ。

そして異界の入出報告は義務付けられており、その内容は、構成員ならば何時でも何  
処でも聞ける物。

つまり少しでも仲間内での心証が悪く、もその人に魔が差しでもしたら……。

(異界に入るのは控えた方がいいかもしない)

そして例に挙げた聖女様は、半端な異界程度ではくたばらないと思われる。

それでも帰還してこなかつたということは――

(帰還方法は見つからず、異界内でのたれ死んだか……。南無南無)

異界とゲートの関係は、ボートと係船索のような関係だ。

岸（人間界）に係留されたボート（異界）は、船を繋ぐロープ（ゲート）を切られれば沖合に流されてしまう。

なんの用意もしていないでそんな場所に行つてしまつたら、帰つてくるのは難しい。そんな状況に陥れば、生き足搔いて苦しんで死ぬか、早々に生を諦めて自殺するか。この程度の選択肢しか生まれないだろう。

渚は自分が妬みや疎みで謀殺されやすいことを自覚していた。

そんな惨めな最期を迎えないよう、渚は警戒を新たにしたのだつた。

# 11. 企み

——ドクン、ドクンと世界の鼓動する音が一定速度で刻まれていた。  
その世界を構成する肉塊が、鼓動のリズムに合わせるように脈動する。  
生物の体内。

そんな表現が相応しい其処は、一種の魔力炉だつた。  
赤黒い肉塊と共に世界が脈動するたび、天文学的な量の魔力が産出されて、何処かへ  
と循環していく。

マグネットイトの海に沈んでいると錯覚するほどの濃密な魔力。

地球上の全ての魔力を一か所に集中させたと説明されても信じられそうな其処は、魔  
界の奥深くに存在していた。

どのような超常存在でも一切の制約を受けずに活動できそうな、悪魔にとつての超一  
等地であるその場所には、当然のように支配者がいる。  
数千年前からアザセルと名乗り、人間にもそう呼称されている強大な悪魔は、その支  
配者に呼ばれて肉の廊下を黒いマントを磨かせて歩いていた。

堂々たる立ち振る舞いの外見からは分かり辛いが、その実アザゼルはこれ以上ないほど緊張していた。

意識は研ぎ澄まされ感覚は鋭敏に。発散される気配はまるで戦闘時かのように刺々しい。

原因はアザゼルが向かう先を見れば、勘の鋭い者からは一目瞭然だつた。  
アザゼルの目的地、その場所から放たれる圧倒的な存在感。

魔界の中でも上から数えた方が早い実力者のアザゼルを軽く捻れるような者が發している気配だつた。

無風の廊下に地吹雪でも発生しているかのように背筋が冷え、一步足を進める度に気圧される。

ただそこに“居る”というだけでアザゼルの本能は警鐘を上げ、ここは死地と錯覚してしまふ。

どんなにイカれた悪魔でもここに長居をしたいとは思わないだろう。よしんば思つて実行したとしても、精神に異常を来すに決まつている。

最上級悪魔ともいえるアザゼルですらそうなのだ。

悪魔にとつては超一等地といえる其処は、支配者のせいで無人の世界と化していた。やがて廊下の先に切れ目が見え、その更に先には巨大な空洞が広がつていた。

その空間へと迷いなくアザゼルは地から足を離して浮かんでいく。

漂う魔力の濃さが増し、それに比例するように感じる威圧感も増大する。

後ろで肉の廊下が独りでに閉ざされた。

空洞の上方は悪魔の視力をもつてしても天井は見えず、下も同様に底が見えない。横幅も閉塞感など感じない程に広い。

そんな超常的な空間をホールだとでも強調するかのように、舞台のようなものが宙に浮いている。

其処から放たれる気配に圧倒されながらも、意を決してアザゼルは舞台へと降り立った。

中心には二つの人影があつた。

一際目につくのがこの圧倒的な存在感の持ち主である安楽椅子に腰かけた金髪の女性だ。

まるで邪神に仕えているかのような悍ましい色彩の修道服を身に纏い、不気味な微笑を湛えているその女の名前は、サリエラ・ザストーアといった。

——ある日突然、この魔界にやつて來た人間だ。

決して多いとは言えなかつたが、それでも当時それなりの数がいた最上級悪魔達を一掃した化け物もある。

とはいえ、それ自体はアザゼルにとつてのマイナスではない。忌々しい競争相手が減ったのはむしろ喜ばしいことだ。

問題はそんな化け物がアザゼルの上に君臨してしまったという事実。

ついでに言えばその人間は、悪魔はもちろん、何があつたのか人間にすら深い憎悪を抱いている狂人もある。

その背後にはもう一つの人影、従者のように佇む喪服の女がいた。  
最上級悪魔にも数えられるくせにいつの間にやらサリエラに媚を売つて、真っ先に己の安全を確保した気に食わない輩である。

「（ご）足労掛けましたね。ようこそいらっしゃいました、アザゼル」

地面に降り立つたアザゼルへ向けられた、サリエラからの勞わりの言葉。

口調や仕草は丁寧で、おつとりとした容姿も相まって、一見まともそうに見えるかもしれない。

だが騙されてはいけない。そんな穏やかな調子で問題を起こした悪魔を肅清してしまいうようなイカレた奴が、サリエラという人間なのだから。

まあ奴の狂人染みた昏い双眼と目を合わせれば、勘違いなど悪寒と共に一瞬で晴れるだろうが。

合わさつた視線から伝わる狂氣と威圧感に、アザゼルの中の気弱な部分が跪いて許し

を請いたい気分にさせるが、プライドにかけて絶対に拒絶する。

「ふん。それで要件とはなんだ」

飽く迄対等な関係だと主張するように、アザゼルはサリエラの事など物ともしていいと気丈に振る舞う。

その性急な言葉には、さつさとここから離れたいという切実な願いもあつた。アザゼルの不敬な言動に喪服の女から苛立つたような気配が伝わってくるが、従者という役割に徹しているのか主の許可なく口を挟んだりはしてこない。

喪服の女は戒告の許可を求めるかのように背後から視線を送るが、当のサリエラは気になった風もなく、たおやかに答える。

「人間界の侵攻の件についてです」

半ば予想していた言葉を聞いて、アザエルは内心で思いつきり顔を讐めた。

人間界への侵攻とはサリエラが魔界のトップに君臨してから暫くして、頃合いを見てアザゼルが提案した計画である。

アザゼルが自分の為に立案した計画は、拍子抜けするほど簡単に受諾された。しかし

……。

「ああ、遂に決心がついたか？　お前の号令があれば人類など即座に奴隸化できるだろう」

「いいえ、残念ながら今回はそのお話ではありません」

ふふふ、と穏やかに、捉え方によつては馬鹿にしたようにサリエラは微笑んだ。手を上げれば殺されるのは自分である。怒りに胸が焼かれながらも、アザゼルは身を震わせながらもどうにか堪えた。

そう、アザゼルの計画は、サリエラからの露骨な妨害にあつていた。アザゼルにはアザゼルの目的があつたように、サリエラにはサリエラの目的があつたようである。

今から思えばアザゼルは利用されただけだつた。

彼が立案した計画で実行されたのは『人間界に侵攻する』ということぐらいか。後は殆どサリエラによつて改変されていた。

計画通りにいけばアザゼルが地球を支配していただけに、本人としてもそのまま通るとは夢にも思つていなかつたが、意義があるなら逆らつて死ねと言わんばかりの過酷な対応は予想外だつた。

この時のアザゼルは、サリエラに外面で騙された者の一人であつた。

「一二月二五日は何の日か、ご存知ですか？」

「人間界の事情など知るか」

「そうですか……。では、ナイア。あなたは知っていますか？」

くだらない話をするなと言わんばかりにアザゼルに一刀両断されたサリエラは、若干  
しょんぼりとしながらも後ろの喪服の女に振り返り、期待するように問うた。

「確か……メシア降臨の記念日でしたでしようか。なんでもメシア教徒を中心にして盛  
大に祭りを行い祝うとか」

ナイアと呼ばれた喪服の女は、それだけをどうにか絞り出した。

過去に主であるサリエラが詳しく語っていた記憶があつたが、馴染みの薄い風習は良  
く理解できず、その時の主の言葉の大多数は忘却の彼方へと追いやられていた。  
しかしなんとか及第点は貰えたらしい。

サリエラは笑顔で頷くと、アザゼルに向直り話を再開した。

「その記念すべき日に、悪魔の侵攻を再開させます」

「……詳細は？」

驚愕しながらもそれは表に出さず、アザゼルは静かに聞き返す。

それに本格侵攻の可能性は先程否定された為、それほど大した規模でもないのだろ  
う。

侵攻と銘打つ以上はあまりにもしょっぱい戦力ではないだろうと、期待せずにいら  
には十分すぎる。

れなかつた。

「世界の一〇〇万都市にそれぞれ一体、中級悪魔を放ちます。貴方にはその悪魔の選別をして頂きたいのですが……」

「こ、これは……いや、喜ぶには早い。もう少し確認しなければ。

アザゼルは動搖しながらも口を開く。

「必要な数は?」

「そうですね……五〇〇もあれば十分かと」

「! いいのか? そうなれば人類は確実に滅ぶぞ」

今まで邪魔し続けていたお前がどんな心境の変化だと、思わずそんなことを聞いたアザゼルに対し、サリエラは不気味なほどに笑顔だつた。

「ええ、構いません」

「ほう……だがそんな手段ではとても効率的とは言えんな。俺に任せれば——」

その先の言葉は出てこなかつた。

殺氣を向けられた訳ではない。サリエラと視線が合わさつただけ。されどそれだけ

のことと、アザゼルの言葉は遮られた。

「その侵攻が順当に行つてしまふようであれば、人間界にはもう興味はありません。地  
球はあなたの好きにしてくださいって結構です」

そのサリエラの言葉に、アザゼルは耳を疑つた。次いで言い間違えを疑う。

いつも通りのサリエラの微笑と、その背後で慌てた様子のナイア。それを見て、アザゼルは漸く聞き間違えでも言い間違えでもなかつたのだと確信できた。

「ええ。ただし侵攻直後はしばらく様子を見させてもらいます。権限を委譲するのはその後です」

やけに気前のいいサリエラを不気味に思いながらも、アザゼルは欲を出した。

貰えるものなら早く貰いたい、と。

「しばらくとは三日ほどでいいのか？ 確か『しばらく』という概念はそのぐらいの期間だつたと記憶しているが」

“しばらくは数分だ”と強弁しようかも一瞬考えたが、流石に命は惜しい為に自重した。

「分かりました。では侵攻後、七二時間以内に派遣した中級悪魔が人間に斃されることがなければ、そのように」

怖くなるほど望外の条件である。アザゼルは考えるまでも無く頷いた。

「しかし、どうやって人間に斃されたと判断する？ 同士討ちの方が可能性としては高いだろう」

「参加する全ての悪魔に私の力を少量注ぎます。敗れればその力の行方で判断できるでしょう。……不正を疑うようなら貴方も一緒にやりませんか?」

「……ああ、そうさせてもらおう」

内心ではやりたくないと思いつつも、アザゼルは了承した。

一つ一つは大したこととは無いが、それが五〇〇となると結構な魔力の消費であるからだ。

その上、ここから産出される規格外の魔力を支配しているサリエラと、一等地とはいえるここより遙かに劣る生産地しか所持していないアザゼルでは魔力の価値も違ってくる。

かといって魔力の無心は出来ない。プライドの問題もあるが、それ以上に現実的な問題が存在する。

魔力を供給する際に必ずと言つていいほど提示される契約を結んでしまうと、供給側に受給側は物理的に逆らえなくなってしまうのだ。

サリエラが人間界にばら撒いている悪魔召喚プログラムとやらと原理は同じである。確かに魔力の供給を求め、サリエラに下ればナイアのような形で生き延びることはできるだろう。

しかしそのデメリットは、下剋上を虎視眈々と狙い、それに芽が出始めていたアザゼ

ルにとつては甘受できるものではなかつた。

「要件は終わりか?」

「ええ。では、アザゼル。派遣する悪魔の選別は任せましたよ?」

安楽椅子に座つたサリエラが、手を翻すと何らかの魔法を発動した。

それは今取り決めた内容の遵守を強制させる、契約の魔法である。

ほんの数秒で二人を縛るだけの膨大な魔力をいとも容易く籠め終わり、後はアザゼルの返答があれば正式に契約が結ばれるという段階にまでなつていた。

本来ならば、二人の様な力を持つた悪魔を強制できる契約は、こんなインスタントに用意できる代物ではない。

そんな規格外の力を見せつけたサリエラは、常と変らぬ微笑を湛えながら静かにアザゼルの返事を待つていた。

「……任された」

一分ほど後。変な契約が盛り込まれていない事を何度も何度も確認して、アザゼルは漸く了承の言葉を口にした。

その言葉に反応して、疑似的な契約書に籠められていた魔力が二人の体に溶け込むよう包み込んだ。その魔力は平時は全く違和感を感じさせないが、契約を違反した際には苦痛を齎す非常に頑丈な鎖へと変貌するのだ。

「契約、成立ですね。……ふふ。クリスマスが楽しみです。これほどまでに待ち遠しい気持ちになつたのは、私が幼子だつた頃以来でしようか」

ふふふ、と珍しく恍惚とした様子を見せるサリエラに面喰いながらも、狂人に構つている暇などないアザゼルは無言で舞台から飛び立つた。

アザゼルは、サリエラの不可解な行動の先にある目的を、敢えて聞かなかつた。

どうせ本心は口にしないと思い込んでいた事もあるが、仮に本当の事を教えられたとしても、こんな意味不明な過程を経てから達成できるような目的である。

きつとそれは、過程と同じく目的も意味不明なものだろう。きつとアザゼルには嘘としか思えないに違いない。

目的など聞かされても考えが乱されるだけ。狂人の思考など捨て置くのが正解なのだ。

その真意などは考えず、生まれた隙に罠だけを警戒して食いつけばいい。

遠ざかる浮遊した舞台を背に、アザゼルは思考を巡らせていた。

## 12. 冬の到来

冬が來た。

北西からの本格的な寒気団の到来により、辺りは冷氣で満ちていた。  
事務所の窓からは冬の弱々しい光が斜めに差し、その先には寒空が広がっている。

12月も半ばに差し掛かつた現在、道端で見かける草木は枯れはて、秋の面影はまるで残つていなかつた。

悪魔関係に初めて関わった日から3～4ヶ月程だろうか。渚は訓練学校をとつくに卒業し、正式なヤタガラスの構成員として働いていた。

配属先は、地元である東京から遠く離れた北海道の札幌である。太一とも引き離されてしまつっていた。勿論、渚は地元がいいと主張したが、危うく東京都繋がりで小笠原諸島に飛ばされそうになつて妥協した。どちらも気に食わないが、まだ大都市であり空港も近い札幌の方がマシであると。

同期の殆どは希望が最大限配慮された場所に配属されているだけに、渚だけが島流し染みた事をされたのは何らかの意図を感じざるを得ない。かといって、平戦闘員の身分

では何もできないのであるが。

ペンを置いて、椅子の背もたれに体を預けて大きく伸びをする。

早朝から悪魔を発見し、異界を潰してきて、今、ようやくその報告書が書き終わつたのだ。

情報の流出を警戒しているとかでアナログな手法を強要される上、かなり細かなところまで書くことを要求してくるコレは、渚にとつては悪魔と対峙するよりも遙かに神経を摩耗させることだった。

ここに配属されてから、一ヶ月以上。その作業は大分手慣れてきたものがあるとはいって、生来の気性からして向かない作業である。それを嫌々ながらも終わらせたのだ。職場とはいえ伸びくらいしても罰は当たらないだろう。

しかししながら、それに目くじらを立てる者も存在する。

「渚、職場でだらしがないですよ」

書面と向き合つていた顔を上げて、向かいの机からそんなことを言つてくるのは、渚より少し年上の銀髪の少女だ。

彼女がいるだけで職場の雰囲気が引き締められるような、空気を凍らせ張りつめさせる厳格なオーラを纏つてているのはカティア・レイグラフといった。

彼女は敬虔なメシア教徒であり、渚の仕事の先輩でもある。

外国人でありメシア教徒が日本の公的機関で働いていいのだろうかとも思つたのだが、どうもそれらはこの業界ではごく普通の事のようで、問題にもされていない。渚としては違和感を感じてしまう所であるが、こういつた事や、ニュースで国同士の不和が報じられていなかつたりと、人類が一致団結しているというのは本当なのだろう。

歳も近く、自分にも他人にも少々厳しすぎるという欠点を除けば、彼女は凄く面倒見のいい先輩な為、渚とも大分気心の知れた関係となつていた。

そんなカティアからの注意を何時もの小言だと聞き流し、渚は首や腕をぶらぶらと揺らしながら返事をする。

「体を解すぐらい、いいじやん」

「いけませんよ、ナギサ。綻びは小さなことから生じます。その油断が命取りとなるのです」

「メリハリは大事だよ?」

「だからと言つて、普段から油断しきつていい訳ではありません。それに渚、あなたは悪魔に操られてしまつた事があるのでしよう。その時も、気を引き締めていれば何とかなつたとは思いませんか?」

「いません、と即答しそうになつて、思いとどまる。

渚が悪魔に関わった経緯については、つい先日、話の流れで彼女に語っていた。

確かに、耐性やレベル的に考えて、あのチャームに抵抗することはまず無理だつた。しかし、もし仮にカティアのいう通り、あの頃の渚が常駐戦場の心構えであつた場合、あれほどの無様は晒さなかつたかも知れない。

常に気を引き締めるとか、渚が実行できる気がしないだけで、彼女の言葉には一理ある。真っ向から否定するのは駄目だろう。

「でも、こんな所でまで気を張つてたら、集中力が続かないと思う」「集中するから駄目なんです。自然体で自分を律するのです」

「え？」

何を言つてゐるんだこいつは、と渚は自分の顔が引きつったのを感じた。

彼女の言葉を要約すれば、四六時中、意識せずに警戒を怠らないということだろう。それか、警戒態勢を自然体にしろと。

多くの者にとつての暴論を言い放つたカティアの表情は、とても大真面目なものだつた。

『自分にもできるのだから、渚にもきつとできるだろう』と、渚を期待するそんなカティアの思考が伝わつてくるようだ。

自身の持つてゐる知識から大きく乖離したメシア教。その実情を聞けそうな本場の

信徒に、興味を持つてしまつたのが運のつき。

中立中道を歩む者にとって、偏った思想の持ち主は、その内容の是非はどうあれ鬼門だということを、カテイアに声を掛けた時の渚は忘却していた。

入信する気はないにもかかわらず、どうにも渚はカテイアに気に入られてしまつたらしく、こうして事ある毎に小言を溢されていた。

知り合いのいない土地の寮での一人暮らしをした為、毎日のように部屋へやつてきては料理を振る舞つてくれたりするのは本当にありがたい。が、宗教のお誘いはノーサンキューであった。

しかもカテイアは本当に善意から勧誘してきているようでたちが悪い。

言葉に打算が混じつていれば距離を測れるが、完全に善意で迫つてくる者を無視できるほど、渚は心を無くしてはいなかつた。

「……室長にコレ、提出してくるね」

とはいゝ、よく分からぬ事に対し真摯に対応できるほど、お人好しでもない。

渚は仕事を口実に逃げ出そうと、今しがた書いたばかりの書類を片手に席を立つた。

「……その後はどうしますか？」

「ん、いつも通り夜までパトロールじゃない？　あいつ等潰しても潰しても湧いて来るからねー」

「そうですか、分かりました。それでは私も準備をして待機しています」

「りよーかい。なるべく早く終わらせてくるね」

「室長は目上の方なのですから、失礼のないようにするんですよ」

はいはい、と相槌を打ちながら去つていく渚の背を見つめるカティアの蒼い瞳は、手のかかる子供を見つめるような、そんな愛情に満ちた目をしていた。  
渚がこの支部にやつて来てから、支部の悪魔と異界殲滅のスコアの増加速度は跳ねあがり、報告した室長が更に上から捏造を疑われるほどに、その戦果は傑出するようになつていた。

普通は、悪魔や異界を探して朝から晩まで街を巡回なんてしない。

悪魔を相手にオーバーワークをこなせば、いつミスを犯して死んでも可笑しくないからだ。

常人より遙かに才能に恵まれているとはいえ、渚も疲労しミスもする人間である。

そんな彼が自らを顧みずに実行する、まるで世のため人の為に身を粉にして悪魔を排除しているかのような振る舞いが、カティアからの渚への好印象の原因だつた。

当の本人としては、初めての仕事を一緒にした先輩が、自主的にそんな普通ではないことをしていたから、それがこの業界の常識なんだと思い込んでしまつただけなのだが。

流石に今では誤解も解けているが、別にあまり負担でもないし、悪魔を殺すのは良い事だと思つてゐるので続けてゐる。

性格が良くて強くて仕事も出来るカテイアだが、ナチュラルに自分を犠牲にしていく節もある彼女について行ける者は渚が来るまでは誰もおらず、職場では尊敬はされても敬遠されているような状態だつた。

そんな状況で泣き言の一つも言わずに行動を共にしてくれる後輩が現れたら、同志だと思うのも無理はないかも知れない。

カテイア・レイグラフという人間はメシア教徒で、性善説を信じる、俗にいう良い人である。

そんな人間に一度でも好感を覚えられれば、口で何と言おうと、決定的な行動をしない限りは素直じやないとか照れ隠しだと思われ、絶対に認識は覆らない。

渚のことを立派な人徳の持ち主だと勘違いしているカテイアと、そんな立派な人間ではないと面映ゆさを感じる渚。

微妙にすれ違つていながらも、二人は普通に良好な関係だと言えただろう。



「クリスマス？」

「はい。その日はお暇ですか？」

年末も近づくある日の夜。

何時ものように渚の部屋へやつて来たカティアは、食事と洗い物を終えて、渚に母親の如く早くお風呂に入つて夜更かししないで寝る事を言い含めるように口にしながら帰り支度をし始めて、ふと思ひだしたかのように言つてきた。

クリスマス。世界を救つたとメシア教に称えられる、メシアが誕生したという日。

一二月二十四日から一二月二十五日にその生誕祭は行われる。

本場ではどうだか知らないが、此方では家族、または親しい人物と過ごすことが多い。少なくとも日本では、前の世界との違いは感じなかつた。

さて。家族、または親しい人物。見知らぬ土地で仕事三昧の日々を送つてきただの。そんな相手、居るはずなかつた。

「残念でした、その日のナギサはわたしが予約済み。ね、ナギサ？」

「え」

もはや定位置ともいえる渚の膝の上で、我が物顔で寛ぐピクシーが、カティアへの対抗心をあらわに言つた。彼女のなかでは勝ちを確信しているのか、その態度はどこか得意げだ。

……そういえば少し前、街を彩るイルミネーションのことをピクシーに聞かれ、クリスマスのことを説明したんだつたか。

流石に会話の詳細は思い出せないが、その時確かに『クリスマスと一緒に祝う』的な約束をした記憶がある。

「……本当ですか、渚？」

ピクシーの言葉を受けて、カティアが確信してくる。

一瞬だけ、修羅場という三文字が頭を過つたが、まさかそんなことはないだろう。

恐らく彼女の提案は、『暇だったら教会に来て』とかそんなところだろう。そしてあわよくば入信させようと。恋愛感情などあるはずがない。

教会に連れて行かれるのはちよつと面倒だ。それにいい口実もある。ここは断るべきだろう。

「……うん。本当のことだよ」

「そう、ですか」

消沈したかのような口調とは裏腹に、カティアからは言いようのない威圧感を感じた。

多分、悪魔と親しくするなどとんでもない、とか思っているのだろう。  
なぜか、気圧される。

ふと服が引っ張られた感触に視線を下に向ければ、ピクシーも渚と似たような感慨を抱いていた。

「……それでは仕方ありませんね」

カテイアはそうつぶやいて、すくつと立ち上がると上着を羽織り、玄関へと向かつて行く。

見惚れるような銀髪と、華奢な背中が遠ざかる。

少しばかり不意を突かれた渚は、若干慌てた様子で声を掛けた。

「ご飯、美味しかったよ。御馳走様。道中気をつけてね」

「はい。ありがとうございます」

渚の声に反応し、靴を履き終わつたカテイアは、振り返つてぺこりと一礼。そして踵を返すと「お邪魔しました」という言葉と共に、玄関の扉の先に消えて行つた。

「……うーん」

「どうしたの」

「いや、なんか。……対応間違えたかなーって」

「そんなことはない。ナギサの対応は百点満点だった。悪いのはあのニンゲン」

「……そうかな?」

「間違いない」

「そうかなあ」

機嫌良さげのピクシーの言葉に釈然としないものを感じながらも、渚はそれ以上の詮索をやめにした。

(考へても分からぬし、まあいつか。明日、機嫌が悪そだつたら謝ろう)  
一種の思考停止である。



カティアはそれ以来、渚になにやら含む物がありそうな感じだつたが、職務には支障がなかつたので気にしないことにした。

そして日は流れ、結局イブの夜に渚が教会に顔を出すことは無かつた。

ピクシーに七面鳥とケーキを丸ごと買わされて、その処理に四苦八苦していただけである。

明くる一二月二五日、純真無垢な子供が朝起きて枕元にプレゼントが置いてあつてサンタさんが来たとはしゃいでいるだろう時間帯、クリスマスだろうが休日ではないし、ましてや冬休みでもないので渚はいつも通りの時間に自宅を出ていた。八時ちょっと前のことである。

(……なんか嫌な予感がする。……一応警戒しておこうか)

予感を感じながら気にしないでいたら、無抵抗のまま良いように操られてしまった苦い経験を思い出した渚は、COMPを操りピクシーを召喚し、意識を戦闘それへと移行した。

「……なにがあつたの、ナギサ?」

人通りがあるからと、召喚された直後に外套の中に押し込まれたピクシーが、襟の内から見上げながら聞いてくる。

「なにもないよ。でも、何かありそだから一応ね」

「そう」

小声でのやり取りは、街路の雑多な音に搔き消されて二人以外の耳には入らなかつた。

根拠のない理由だつたが、渚の勘は良く当たるとこれまでの経験で実感していたピクシーは、それ以上何も言わずに警戒にあたつた。

特に何事もなく数分が過ぎて、何も感じられないピクシーには渚の杞憂だつたのかと考え始めた頃。

渚だけが感じていた『何か良くない事が起ころ』という感覚は、もはや確信の域にまで高まつていた。

——そして、崩壊の序章はやつてくる。

日本時間の一月二五日朝八時、中央ヨーロッパ時間では一月二五日深夜〇時。魔界からの侵攻は始まつた。

全世界の一〇〇万都市を対象とした、平均レベル四〇の中級悪魔による地球侵攻である。

それは、渚の住む札幌も対象となつていた。

「あれは……」

空に、黒い孔がぼっかりと開いた。

今まで感じたことのない強力な魔力の波動が孔から漏れて伝わつてくる。

札幌にある巨大なサーバーでも利用しているのか、それは渚の見たどんなゲートよりもしつかりとしたつくりに感じられた。

周囲の人々も異常を見つけたのか、呆けたように空を見上げている。

漏れ出る悪魔の存在感に圧倒されて、人々には超常現象を目にした時のようなざわめきは無く、ただただ静寂が辺りを支配していた。

そして、悪魔はぬつと黒い孔から姿を現した。

鬼のような形相をした大男が和風の甲冑を身に纏い、現世での力を確かめるように手に持つた槍を一振りする。

強烈な烈風に、近くにあつたビルの窓が粉碎された。

ガラスが割れる甲高い音に再起動を果たしたのか、周囲の人々は悲鳴を上げて逃げ始めた。

遠目からでも伝わってくる強烈な存在感に恐慌を起こしているのである。

恐らく四天王の内の誰かだと思われる悪魔は、逃げ惑う人々を見て舌なめずりするようく笑うと地上に降り立つた。

悪魔が人の群れに飛び込んで、やることといつたら一つしかない。

虐殺が始まつた。

「……まずは、現状把握かな。皆と合流しよう」

「……うん、情報は大事」

飛び掛かつてこられてなし崩しに戦闘が始まるのことを覚悟していただけに、渚は若干拍子抜けしながらも冷静にこの異常事態に対処しようとしていた。

今も犠牲になつている人達には悪いが、侵攻の規模を把握する前に勝てるかどうかも分からぬ強者を相手に戦闘に入るのは愚策過ぎた。

仮に悪魔の出現はここだけだとしたら、応援が来てから準備万端で攻めかかればいいし、あちこちで同様の事が起つてゐるのだとしたら早急に現有戦力で対処すればいい。

今のところ、強力な悪魔が一匹やつてきているだけで、他の電子機器からは悪魔が湧いてくる様子は皆無である。

そんな想定など事前にしていなかつた為、正確な状況を把握する為に情報収集を優先するのは正解と言えた。

(COMPは……使える。本気だつたら電子機器は全部駄目にするだろう。となるとこれは本格的な侵攻ではない？)

仲間が集まっているだろう職場に人で溢れる道路を避けて、建物の屋根を飛び跳ねながら急行する。

もはや超人的な身体能力を衆目に晒すことなどお構いなしだつた。

悪魔の存在が最低でもこの街に住む人間の殆どに知られた以上、超常的なモノの存在を隠し通すことは不可能であるからだ。

普段通り歩いていたら数分はかかつてていた職場までの距離を、今日の渚は僅か十数秒で踏破した。

乱暴に扉を開け放つて強引に屋内へと侵入する。

いつも静かな職場では、電話先に怒鳴つたりパソコンを必死で操作したりと、皆が忙しそうにしていた。

とはいえ、遠慮していくは欲しいモノが手に入るまでどれだけかかるか分からぬ。

「状況は!?」

とりあえず、大声を出して自己主張をしてみた。

間違いなく渚の力が必要とされている状況で、無碍にはされないだろうとの判断もある。

だが、悪魔が出現してから二分と経っていない現状で、その要求は無茶振りすぎた。渚のことには気づいた職場の人達も纏まつた情報を持つておらず、皆困った顔をして顔を見合させていた。

「——強力な悪魔がこの街に出現したことは知っていますね？」

そんな中、奥の方でパソコンに向かっていたカティアが、画面から振り返ることもなく言葉を発した。

「うん。ついでに言えば奴は今、中央区辺りで食事中だよ」

「そうですか……。同様の現象が人口の多い都市で発生しているようです。海外からの報告もあり、まだ確認は出来ていませんが恐らくは全世界規模で」

「悪魔の大量発生が確認された場所はある?」

「いえ、今のところはありません。電子機器の大半も無事のようです」

「この街の近くに同様の出来事が発生した場所は?」

「北海道では札幌だけのようです。本州にはいくつか。大陸ではうじやうじやと」

「なるほどね」

二人の会話に耳を傾けていた職場の人間の殆どが、あまりの規模の大きさに絶望で言葉を失っていた。

だが、もつと最悪を考えていた渚にはカテイアの言葉は朗報にすら聞こえていた。  
「なら、僕らは好き放題暴れてるあの悪魔をぶっ殺せばいいわけだ」

「ええ。他に応援に行くにしろ、まずはこの街のことを片づけなければいけないでしょ  
うね」

我が意を得たりと言わんばかりに抑揚に傾いて立ち上がったカテイアは、仕事道具が詰まつたバッグを抱えると渚の方へと歩き出した。

それを見た渚も、踵を返して出口へと向かい始める。

「ちょ、ちょっと待て！ 今から向かうつもりか！」

電話で何やら会話をしていた上司が、二人を慌てて止めに入った。

実力はカテイアにすら劣るが、指揮系統的には上に位置する上司の為、対応の為に二人は足を止めて振り返る。

もつとも、渚の顔にははつきりとうんざりしたような色が浮かんでいたが。

一方、至つて冷静といったカテイアは質問へと答えた。

「そのつもりですが？」

「馬鹿な。いくらなんでも我々だけであの悪魔にかなう訳がない。ここは周辺からの応援を待つてだな……」

「ん、待つて。もしかしてこの周辺に僕らに匹敵するレベルの人間がいるの?」  
気になる言葉を耳にして、渚は咄嗟に口を挟んだ。

不躾な言動にカティアから鋭い視線が飛んでくるが、何食わぬ顔で無視をする

「い、いや、流石にそこまでの手練れはいないが、それでも周辺の戦力を結集すれば——」「ああ、君。ちょっと勘違いしてるみたいだね」

「……何?」

色んな意味であんまりな渚の言葉に、思わず上司の眉根が寄る。

「あの悪魔に挑むのは僕とカティアの二人だけだよ。それ以下の人はいてもいなくとも変わらない。だから、皆にはいつも通り下級悪魔への警戒をしていてほしいんだけど」「……馬鹿な」

上司は、その言葉を絞り出すように呟いた。  
会話が途切れて、カティアが口を開く。

「渚、言葉遣いがなつていませんよ」

「…………めん」

「謝る相手が違いますが……今は緊急事態です。それは後にしておきましょう。

室長、私も渚と似たような見解です。周辺から戦力を結集したとしても、あの悪魔を討伐できる確率が微かに上がる程度であまり効果的とは言えず、仮にこれが陽動だとしたら非常に危険だと思われます」

「だが……」

「一人に説明されても未だに納得できない様子の室長に、渚は『この緊急事態に雑魚がごちゃごちゃとうるさい』とイラッとするのを押さえられなかつた。

「……はつきり言つてやろうか、邪魔なんだよ」

カティアに注意されたばかりの渚は、今度は上司に向かつて決定的な暴言を吐き出した。

「あのレベルの悪魔だと前衛が務まるのは僕しかいないだろうから、集められた人達は必然的に全部後衛になるわけだ。で、共闘経験もないそいつ等を守りながら、僕は誤射の危険に怯えて遙か格上の悪魔と戦うの？ 穴談じやないね」

「だが、それで悪魔が斃せるのなら……」

「はつ」

室長は言葉尻を濁したが、心の中で続けた言葉は『悪魔が斃せるのなら多少の犠牲はやむを得ない』といったところだろうか。

使命感で動いているように見せつつも保身を感じさせる言動に、渚は鼻で笑つて見せ

た。

「カティアの説明を聞いてなかつたの？　ここと似たような状況は世界中で起こつてゐわけだ。そんな中で、人類最高峰の才能を持つた僕をすり潰して一匹の悪魔を仕留める？　正気とは思えないね。

……察するに君は——」

「渚！」

臆病者とでも直接的に罵りそうな渚の気配を察知して、遅まきながらもカティアは止めに入つた。

だが、渚はその制止を無視する。

「……君は、恐怖でおかしくなつていると見える。あの悪魔のことは僕とカティアに任せ、ゆつくり休んでいるといいよ」

突き刺さる視線に遠慮して、考えていた言葉を若干オブラートに包みこんで告げた渚は、悠然と室内から去つて行つた。

カティアも渚の代わりに軽く一礼すると、後を追う。

今度は、二人を止める者は誰もいなかつた。

# 13. 鬼神

強大な悪魔が街の中心部に突如出現したという異常事態に、大部分の人々は恐慌状態となり訳も分からず逃げ惑つていた。

サイレンが鳴り響き、避難勧告が発令される中、屋根伝いに現場へ向かっている渚とカテイアの二人には、その混沌とした状況がよく見えていた。

「それで、あれだけ啖呵を切ったのです。勝算はあるのでしょうか？」

現場にたどり着くまでに作戦を決めておこうというのだろう、カテイアが隣を並走する渚へと問いかけた。

「んー、正直なところ、あまり

「……渚」

一見したところ、あの悪魔のレベルは渚と比べても一回りどころか倍以上違つていた。

そんな化け物相手に必ず勝てると自惚れるほど、渚は增長してはいなかつた。だがそれをどう受け取つたのか、カテイアは呆れたような目を渚に向けた。

慌てて弁明する。

「でも！ 僕には知つての通り反則技があるからね。か細いチャンスだろうが物にしてみせるよ」

「……ですか、期待しています」

これまで一緒にこなしてきた仕事の数々により、渚の魔眼の異常性を認知していた力ティアは、そういうと黙りこくつた。

その沈黙を「その考えを説明しろ」と暗に促しているのだと感じた渚は、あの悪魔を目に出した時から温めていた計画を口にする。

「で、作戦なんだけど——」

ピクシーにも聞かせるため、外套の襟を緩めながら作戦を話しあはじめる。

人類にとつて、長い長い一日が始まつた。



人間界は天国だ。

逃げ惑う人間共を目につく端から虐殺し、零れ出るマグに舌鼓を打ちながらゾウチヨウテンはそう思った。

(これほど大量のマグを短期間に味わったのは久しぶりだ。私を抜擢してくれたアザゼル様には感謝しなくてはな)

やけに身綺麗で軟弱な者が多いと、ゾウチョウテンが記憶していた人間達とはいささかこの時代の人間は変わっていたが、それでもマグの味も質は変わっていない。

闘争を生き甲斐とするゾウチョウテンは、人間界にやつてくれば街の総力を挙げて迎撃されると踏んで楽しみにしていただけに、ここまで人間側が無抵抗なのは拍子抜けだった。

それでも、これだけの人間を独り占めできるのは悪くないと、欲求不満はどこかへ飛んで行つたのだが。

「た、助け——」

「ふん」

腰を抜かして顔をぐしゃぐしゃに歪めながら命乞いをしてきた女を慈悲もなく葬り去る。

そしてマグを吸収すると、抜け殻となつた死体になど目もくれず、ゾウチョウテンは手当たり次第に獲物を追つて躯を量産していく。

(この独占状態も後発の者共がやつてくれれば終わりを告げる。それまでに食えるだけ食つておかねばな)

アザゼル率いる本隊がやつてくれれば、その時に地球は魔界の物となるだろう。

そうなれば誰のものでもないこの地も誰かの物となってしまい、資源を枯渇されてしまらないと人間の虐殺に制限がかかるのは火を見るよりも明らかである。

そうなる前に、先遣隊の権利を駆使して役得に浸るのは当然のことだつた。事実、その思考に至つた悪魔はゾウチヨウテンだけではなく、地球上のあらゆる場所で似たような光景が現出していた。

人間からしてみれば、もはや神ともいえるレベルの中級悪魔に匹敵するだけの戦力をもつた都市など、世界を見渡しても僅かにしか存在しないのだ。

だがゾウチヨウテンにとつては不幸なことに、この札幌という都市にはそんな例外が存在していた。

次なる獲物をあの世へ送ろうと、槍を振るつた瞬間――

悪魔の本能が危機感を発し、背後を見る事なくゾウチヨウテンはその場から飛びのいた。

「……避けられたか」

舌打ちと共に発された言葉は、少年とも少女とも取れる声音だつた。  
ゾウチヨウテンが槍を構えながらも振り返れば、そこには肉塊と化した人間を背にして美しい少女が立つていた。

肩口で切り揃えられた黒髪に、昼間でもなお煌々と輝く蒼い瞳。

黒い外套を羽織つて刀を油断なく構えたその少女は、間違いようもなく実力者だった。

「中々良い奇襲であつた。だが我を仕留めるにはいさか修練が足らぬぞ、女子よ」  
「……そりや、僕は暗殺者じやないからね」

渚のことを、ゾウチヨウテンは女だと判断した。

夜魔や妖精が分かつても、鬼神では分からぬ事もあつたのだ。

魅了や悪戯で性別の判断が重要な種族と違い、何事も武力で解決するゾウチヨウテンにはそんな小手先の技術など必要なかつたのである。

そんな事情までは知らずとも、またしても勘違いされたことを知つた渚は、当然の如くスルーした。

一触即発のこの状態で、性別の勘違いを訂正するとかいう醉狂な真似は出来なかつたのだ。

「ほう、ならばそなたは自分を何と心得る」

「悪魔がいたら殺す、ただの戦闘員だよ」

薄く笑みを浮かべて「今からお前を殺す」と遠回しに告げる渚に、ゾウチヨウテンは子供が見れば泣き出しそうなほど凶悪に破顔した。

「その意気やよし！ わが名はゾウチョウウテン！ アザゼル様よりこの都市の侵略を任された悪魔である！」

ゾウチョウウテンの体から、烈風を伴つて戦意が膨れ上がつた。

間近で実感した格の違いに全身が粟立ちながらも、鬼神に呼応するようにならぬ静かに戦意を研ぎ澄ませた。



乗り捨てられた車と、死体が散乱する街道で睨みあう二人。

一触即発の空氣の中、先に仕掛けたのは渚の方だつた。

風を割り、黒い外套をはためかせ、刀を手にして渚は疾駆する。

その様はさながら、黒い砲弾の如く。

二〇メートルに及ぶ距離を詰める時間など、瞬き一つもかかりはしない。

対するゾウチョウウテンは魔槍を構え、刹那もせずに目前に来るだろう渚を迎撃たんと力を漲らせた。

縮む両者の距離。

自身の間合いを侵した瞬間、ゾウチョウウテンは真っ直ぐに突っ込んできた渚へと、光

と化した槍を放つ。

奔る閃光。

「ほう——」

驚愕か感嘆か。

思わずといった様子で二つが入り混じった声を上げたのは、ゾウチョウテンだつた。

鋼が擦れ、金属の軋む音。

両者の獲物から発せられたその音は、不吉なぐらいに周囲へと木霊した。

ゾウチョウテンの放つた槍の一撃は、狙つた場所から大きく逸れていた。

針の穴をも通す精度で機関銃の如く連射できる、そんな神業を持つたゾウチョウテンのミスでは断じてない。

自身が光となつたと勘違いするほどの相対速度の中で、完全に見切つて受け流されたのだ。

渚と、彼が握る一振りの刀によつて。

伸びる刃は鋼色。

波紋の浮かぶ細身の刀身は危うげな美しさを醸し出し、だといふのに軟弱さは一欠けらも感じさせない。

渚はそんな得物を用い、涼しげな顔で必殺の魔槍を受け流していた。

その様子にゾウチヨウテンは薄く笑み、瞬時に槍を引き戻す。そう簡単に間合いを征せんと、大きく後ろに下がりながら。渚は躊躇いも無く、ノータイムで迫りますがる。

剣戟が始まった――

比喩でもなく機関銃の如き速度で突き穿たれる魔槍は、まるで閃光。突き、穿ち、払い、押して、流し、弾き、そして再び突き穿つ。

常人には視認すら許すことのない、必殺の乱舞。

達人クラスですら、一秒と持たずして挽肉になるであろう暴力の嵐。そんな魔槍が雨霰と殴りかかる暴風圏で、渚は常の如き表情を崩さぬまま、掠り傷一つも負わずにそこに居た。

額に迫る突きを回避し、胴を切り裂く斬撃を反らし、脚を碎く一撃は受け流す。

攻撃の機会を窺いながらも紙一重で躰し、回避しきれない物は体勢を崩すことなく華麗に受け流す。

火花が散り、双方の獲物が敵手の命を欲するよう、金属特有の不協和音を奏でていた。

肩まで届く黒髪を振り乱しながら、いまなお無傷の渚は距離を詰める。刀と槍。

今は槍の間合いで、リーチに劣る刀は挑戦者である。

三歩間合いを詰めれば、三歩間合いを離される。

共に札を隠し持つた状態の攻防に於いて、双方の力量はほぼ互角。

拮抗している戦場の中、それでも渚は亀の歩みのような速度で、ゾウチョウウテンとの距離を縮めていた。

様子見だろうが、軽い手合わせだろうが、それを制してイニシアチブを握れば、有利になるに決まっているからだ。

というより、ゾウチョウウテンが様子見の内に主導権を握つて畳み掛けない限り、基本スペックで劣る渚の勝機は薄い。

今更そんな劣勢に怖気つく玉でもないが、客観的に見て不利なのは自分の方だと、正しく渚は理解していた。

後、半歩も近づければ渚の、刀の間合い。

傍から素人が見れば、渚が押しているように見えたかもしれないが、そこまで進んだ彼の顔には喜色など欠片も浮かんでいない。

むしろ何かを察知したのか、苦々しげに顔を顰めていた。

対するゾウチョウウテンの顔は、渚とは対照的に明るいもので、凶悪な笑みが浮かぶ表情には歓喜すら見て取れる。

「人間にしてはなかなかやるではないか。ほれ、少し速くするぞ」  
楽しませて見せる。

そう続けて、ゾウチヨウテンが全身に力を籠めた。

渚の脳内で、けたたましく警鐘が鳴らされた。

一瞬に複数、閃光が舞う。

「——ツ！」

とてもじやないが、無傷で距離を詰めながらいなせる様な攻撃ではない。  
手傷を覚悟で仕掛けるか、足を止めて機会を待つか。

ゾウチヨウテンは未だに余力を残しているようで、対応力も未知数だ。今この時、全ての札を切つたところで仕留めきれるかどうかは不明。

後者も、相手の底が見えない中、防戦一方になつて反撃の余力が残るかは、これまた不明。

渚は分岐点であろう選択を迫られて——足を止めた。

一瞬にして、今仕掛けるのは拙速との判断を下した為だ。

そして何より、勝負の時は今ではないと、直感が叫んだのも大きかった。

ゾウチヨウテンの魔槍が、際限なく加速する。

先程までの攻防を早送りするかのように、火花と金属音が速度を増した。

しかし先程までの攻防との差異は明白だ。

渚の黒髪がひとふさ舞い、衣服に擦れた跡や、切れ目が生じ始める。

放たれる槍は一秒を追うごとに銳さを増し、刻一刻と渚を追いつめていく。空間が歪んで距離が縮んでいるのではと錯覚するほどに、魔槍は鋭く速い。神速の連撃。

機関銃など生温い。

槍を操る神業に、その技術を十全に生かす、驚異の身体。

それは正真正銘、人の域を超えていた。

対する渚もまた、その速度に対応する。

心技体。全てが非常識なレベルで合わさつた、まさに鬼神と呼ぶに相応しい、理不尽な力。

それでも渚は、辛うじてながらも凌ぎ切る。

最初に比べて倍ほどにも銳さが増した槍を、躊躇して受け流す。

死を齋す必殺の魔槍を、刀を持つて否定する。

魔槍を見切り、ゾウチヨウテンの動きを読み切つて、最適な行動を選択していく。

ゾウチヨウテンに比べれば緩慢ながらも、渚の速度も着実に増していた。

ゆっくりながら確実に、相手に傾きかけた天秤を自身の方へと傾け始めるその技量

は、人類最高峰とすら呼べるだろう。

人の身にあつてここまで抵抗できるのは、ゾンチョウテンですら感心するほどだ。しかしそんな渚の力量ですら、ゾンチョウテンの力は手に余っていた。

耐えて耐えて、隙を見つけて畳み掛ける。

そんな亀のような作戦などを抜きにしても、渚には既に、一歩の距離を詰めることすら出来なくなつていた。

「そら、受けに回るばかりでは我は倒せんぞ」

安っぽい挑発に反応する暇もなく、渚は必死になつて戦つていた。

（やばい——！　武術を修めている悪魔がこんなに手強いなんて……見誤つた！）

まるでスキルを使わず、鼻歌交じりに自身を完封するゾウチョウテンに、渚は危機感を募らせていた。

今まで戦つてきた悪魔は力任せやスキル任せの奴が全てだつたため、マグを集めると外で自身を研鑽している悪魔がいるなど思いもしなかつたのだ。

（だけどこうしてみれば、僕が提案した作戦は正解だつた。正攻法でやつてたらと思うとゾツとしない。カティアとピクシーの二人どころか僕すら半信半疑だつたけど、直感には従うもんだ……）

しかし、まだ勝利の目は潰えたわけではなかつた。

事前に打つていた布石を有効に機能させることを決意し、渚は苛烈な攻撃にさらされながらも、ただその時を待つた。